

家ノ脇Ⅱ遺跡図版13



2区流路跡(SX05)西端(西から)



2区斐伊川河床跡と集石・  
土器溜り(SX01)



2区調査区北壁土層堆積状  
況(南から)

家ノ脇 II 遺跡図版14



3区土器溜り



3区集石



3区土器溜り（接写）

家ノ脇 II 遺跡図版15



4区全景（航空写真）

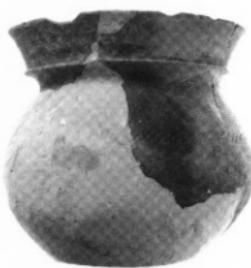


4区全景（北から）

家ノ脇 II 遺跡図版16



6-1



6-2



6-4



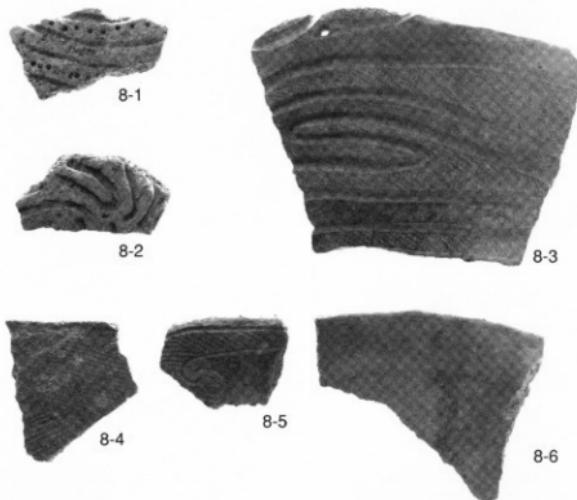
6-3



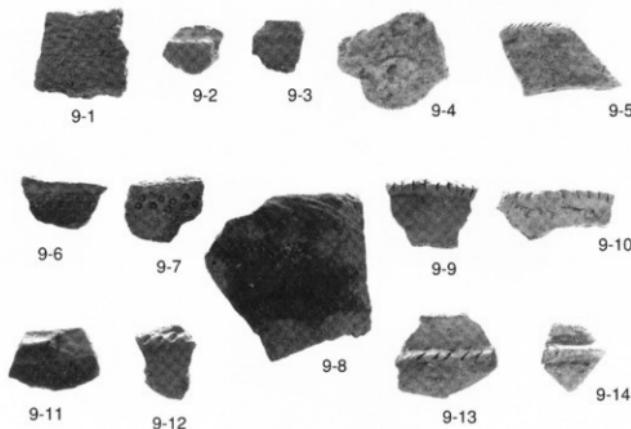
7-1

1 区土器溜り出土弥生土器・SK01出土須恵器

家ノ脇 II 遺跡図版17

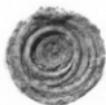


1区・4区出土縄文土器（深鉢・浅鉢）



1区・2区・3区出土縄文土器

## 家ノ脇 II 遺跡図版18



9-15



10-13



家ノ脇Ⅱ遺跡図版19



12-1



18-6



18-10



18-9



18-1



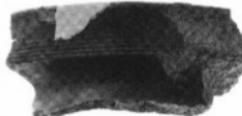
18-2



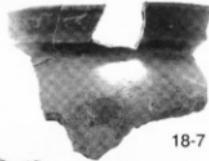
18-3



18-4



18-5



18-7



18-8



18-16



18-17

2区南側（A-11～C-11）木列付近出土器（盃・集石・土器溜り（SX01）・流路跡出土弥生土器・土師器

家ノ脇 II 遺跡図版20



18-11



18-12



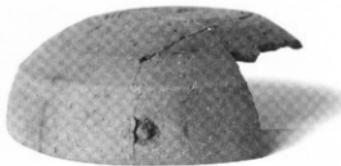
18-15



18-13



19-2



19-4



19-3



19-5

2区集石・土器溜り (SX01)・流路跡出土弥生土器・土師器・須恵器 (蓋)

家ノ脇 II 遺跡図版21



19-6



19-12



19-7



19-13



19-8



19-14



19-9



19-15



19-10



19-16



19-11



19-17

2区集石・土器溜り (SX01) 出土須恵器 (蓋)

家ノ脇 II 遺跡図版22



19-18



20-4



19-19



20-5



19-20



20-6



20-1



20-9



20-2



20-11



20-3

2 区集石・土器溜り (SX01) 出土須恵器 (坏)

家ノ脇 II 遺跡図版23



21-3



21-5



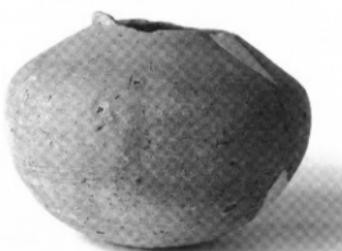
21-6



21-7



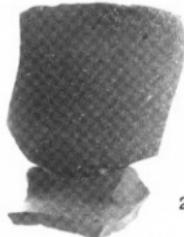
21-9



21-10



21-11



21-12

2区集石・土器溜り (SX01) 出土須恵器 (高坏・壺)

家ノ脇 II 遺跡図版24



21-13



22-1



21-14



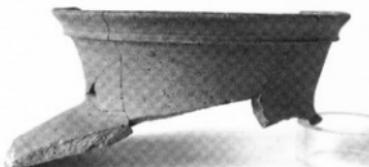
22-2



22-4



22-5



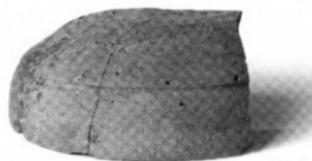
22-3



22-6

2区集石・土器溜り (SX01)・流路跡出土須恵器 (壺・平瓶・提瓶・甕)

家ノ脇 II 遺跡図版25



23-1



23-8



23-3



23-11



23-4



23-12



23-6



23-13



23-7



23-16

2 区流路跡出土須恵器（蓋）

家ノ脇 II 遺跡図版26



24-3



25-3



24-7



25-4



24-8



25-1



25-5



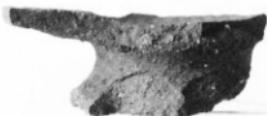
25-2



25-7

2区流路跡出土須恵器（壺・高壺）

家ノ脇Ⅱ遺跡図版27



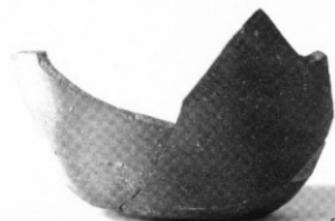
25-12



25-14



25-13



25-18



25-15



25-16



25-17



25-22

2区流路跡出土須恵器（高坏・壺・甌）

家ノ脇 II 遺跡図版28



26-1



26-3



26-2



26-4



26-5

2 区流路跡出土須恵器

家ノ脇 II 遺跡図版29



2区集石・土器溜り (SX01) 出土土師器 (壺)

家ノ脇 II 遺跡図版30



28-1



28-7



28-6



28-8



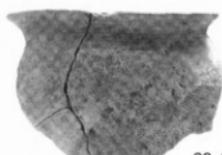
28-9



28-10



28-11



28-4



28-5

2 区集石・土器溜り (SX01) 出土土師器 (壺)

家ノ脇 II 遺跡図版31



29-1



29-5



29-2



30-1



29-3



30-2



29-4

2区集石・土器溜り（SX01）出土土師器（壺・瓶）

家ノ脇 II 遺跡図版32



30-3



30-4



30-5



31-1



31-2



31-3



31-4



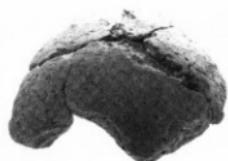
39-1

2区集石・土器溜り (SX01)・流路跡出土土師器 (瓶・甕)

家ノ脇 II 遺跡図版33



32-3



32-4



32-5



32-7



32-8



32-1



32-2



32-6

2区流路跡出土土師器（高坏・坏・壺・盃）

家ノ脇 II 遺跡図版34



33-1



33-4



33-5



33-6



33-7



33-11



33-12



33-13

2 区集石・土器溜り (SX01)・流路跡出土土師器

家ノ脇Ⅱ遺跡図版35



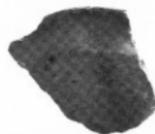
33-2



33-3



33-8



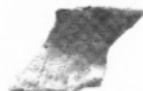
33-9



33-10



33-15



33-18



33-19



33-20



33-14



33-15



33-22



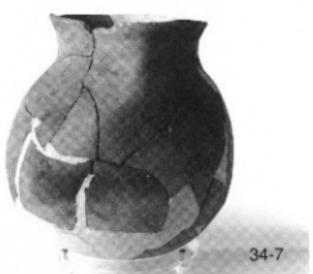
33-21

2区集石・土器溜り (SX01)・流路跡出土土師器

家ノ脇 II 遺跡図版36



34-2



34-7



34-4



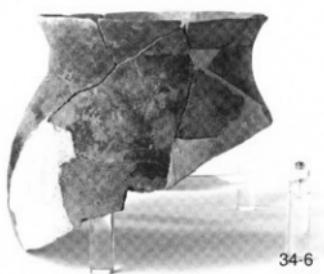
34-8



34-5



35-1



34-6



35-2



35-3

2区集石・土器溜り (SX01)・流路跡出土土師器（壺・甕）

家ノ脇 II 遺跡図版37



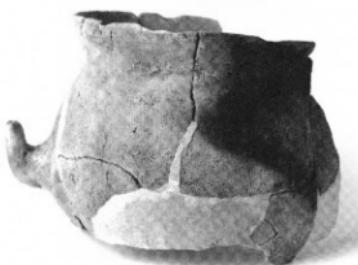
35-4



35-6



35-5



37-2



37-3



37-4



37-5



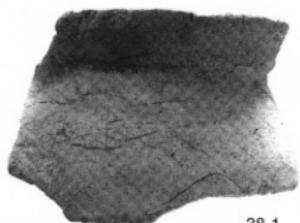
40-3



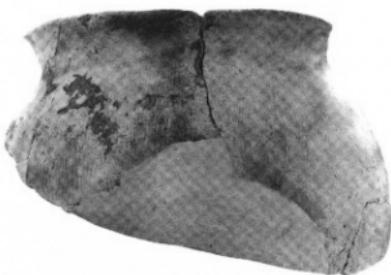
40-4

2区集石・土器溜り (SX01)・流路跡出土土師器（壺・瓶・土製支脚・土錘）

家ノ脇 II 遺跡図版38



38-1



38-4



38-3



38-6

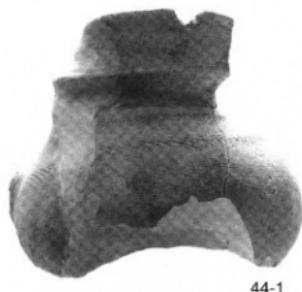


38-5



38-8

2区集石・土器溜り (SX01)・流路跡出土土師器 (壺)



44-1



45-3



45-9



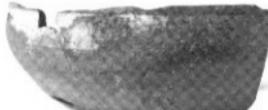
45-6



45-11



45-7



45-12

4区出土弥生土器・須恵器・土師器・手捏土器

家ノ脇 II 遺跡図版40



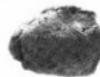
45-15



45-16



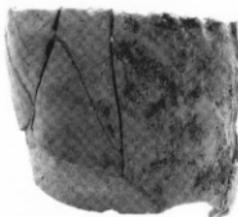
45-19



45-5



45-8



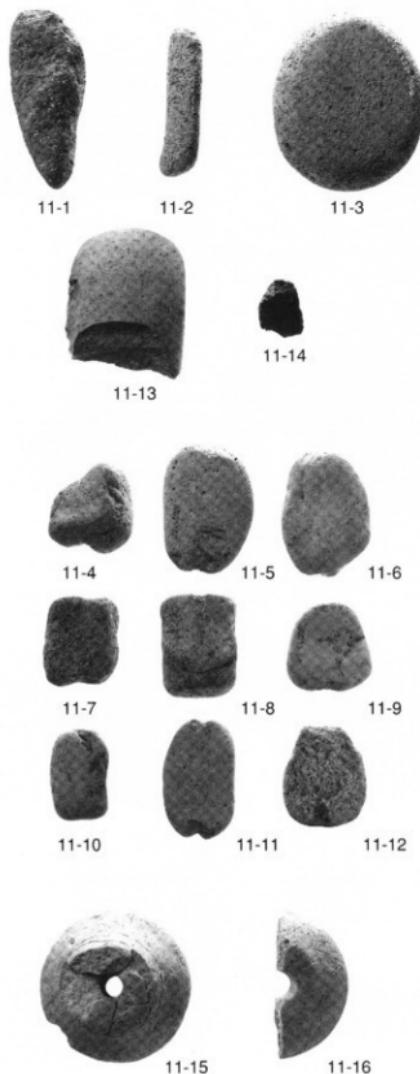
45-17



45-18

4区出土須恵器・土師器・手捏土器・製塩土器

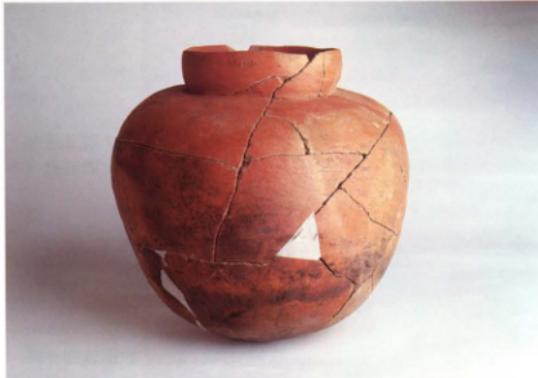
家ノ脇 II 遺跡図版41



1区・2区(流路跡)、4区出土石器(槌石・磨石・石錘・磨製石斧・楔形石器・紡錘車)



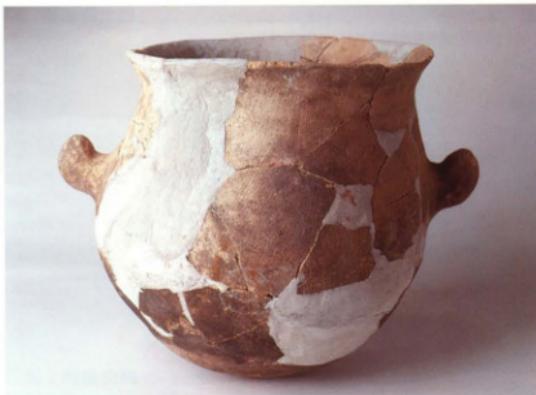
カラー図版 1



家ノ脇 II 遺跡  
SX01出土土師器（壺）



家ノ脇 II 遺跡  
SX01出土土師器（壺）



家ノ脇 II 遺跡  
流路跡出土土師器（把手付壺）

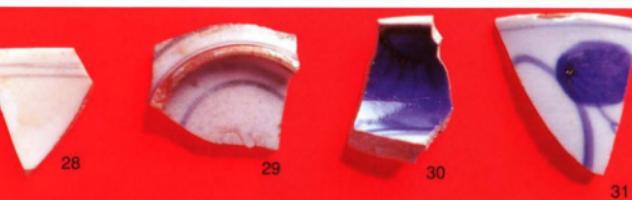
## カラー図版 2



家ノ脇 II 遺跡  
出土陶磁器 (1~8)



前田遺跡 4 区  
出土陶磁器 (9~12)



原田遺跡 1 区  
斐伊川河床跡  
(江戸時代)  
出土陶磁器 (28~34)



## 第4章 原田遺跡1区

### 第1節 調査経緯と遺跡の概要

**調査経緯** 原田遺跡は平成5年3月の分布調査で発見された集落跡である。その後、平成11年3月に、再度分布調査を行い、河岸段丘の5haを要範囲確認調査地とした。これに基づき、確認調査は平成12年10月から12月に実施し、43本のトレンチを水田跡全域に入れ、川沿いの水田跡以外の段丘において遺構や遺物が確認した。その面積は29,000m<sup>2</sup>で、これを本調査範囲とした。

また、原田遺跡の内、東端で、林原橋北の部分が尾原ダム建設付替道路町道八代三沢線にあたるので、平成13年度に発掘調査を行うことになった。対象面積は2,200m<sup>2</sup>であり、同年4月15日か



第46図 原田遺跡位置図 (1 / 3,000)

ら開始し、12月25日に終了した。なお、8月には対岸の前田遺跡4区の調査も入り、原田遺跡と併行させて進めた。

調査は水田跡から始めたが、水田の客土の下には昭和52年(1977)に実施された窪直し(水田造成)以前の棚田の石垣が何段に残っており、それを外して掘り下げるのこととなった。また、盛土部分は、重機により表土と共に掘削して、その後、手掘りとした。

調査の中間で発見された原田古墳については、既に石室が壊され、基底部が僅かしか残っていないかった。副葬品である金銅製の大刀や馬具、ガラスの玉類、須恵器などは石室を中心に古墳の周辺に散在していた。遺物も多くが壊れており、さらに小玉も混じっていたため、慎重に掘り進めるうこととなった。よって、計画よりも古墳調査にかなりの時間を要すこととなった。なお、調査区西側の、斐伊川河床跡には奈良時代土器が多く集積し、一方、段丘上では縄文時代の土器包含層があり、調査面積は狭かったものの、大量の遺物が出土した。

調査により縄文時代、奈良時代、江戸時代の3時期の斐伊川河床跡が発見され、原田古墳から金銅製大刀や馬具など豊富な副葬品が知られたので、10月12日(土)の午後に、古墳を中心に現地説明会を行った。当日は天候にも恵まれ、地元をはじめ遠来から150人程の見学者が訪れた。また、調査区からは縄文時代の埋設土器の発見もあり、8月以降、隨時現地指導を受けた。さらに、斐伊川の古い河床跡が確認されたので、地質学からの指導会も併せて行った。なお、国土交通省斐伊川・神戸川事務所により、縄文時代の火山灰堆積層と奈良時代から江戸時代にかけての斐伊川の堆積層について2ヶ所で、部分的に剥ぎ取りが11月13日に行われた。

仁多町では、これまで大規模調査が実施されることがなかったので、町内の生徒・児童の見学が幾度かあり、6月5日には、町立高尾小学校の6年生8人の発掘体験も実施した(注1)。平成15年5月3日には、「菜の花祭」がダム予定地内で開催された。原田遺跡の対岸の林原橋の南詰めが会場となつたため、原田古墳と殿ヶ迫横穴墓の見学会も行われ、出展品や調査時のパネルを併せて展示した。また、同年11月1日と2日に、仁多町中央公民館において仁多町芸術文化祭が行われた。ダム予定地内の殿ヶ迫横穴墓群、円溝寺遺跡、原田遺跡、家ノ脇II遺跡の遺物やパネルの展示会が催され、ここでも町民の関心が高く、両日で600人以上の見学者があった。

注1「心に残る文化財子ども塾から」『肥乃河上考古たより』

No.15 仁多町教育委員会 2002

**遺跡の概要** 原田遺跡は仁多郡仁多町大字佐白の前布施に所在する。遺跡は家ノ脇II遺跡の下流1kmの斐伊川右岸に立地し、流れが大きく蛇行する内側の3ha程の広い河岸段丘にある。時代は縄文時代から近世までで、集落跡や古墳、さらに斐伊川の河道跡などの複合遺跡である。原田遺跡の北側の山腹には仁多町教育委員会が調査を行った殿ヶ迫横穴墓群や西尾社遺跡があり、対岸の水田跡や畑地跡には本書で報告する前田遺跡が所在する。また、東側500



写真3

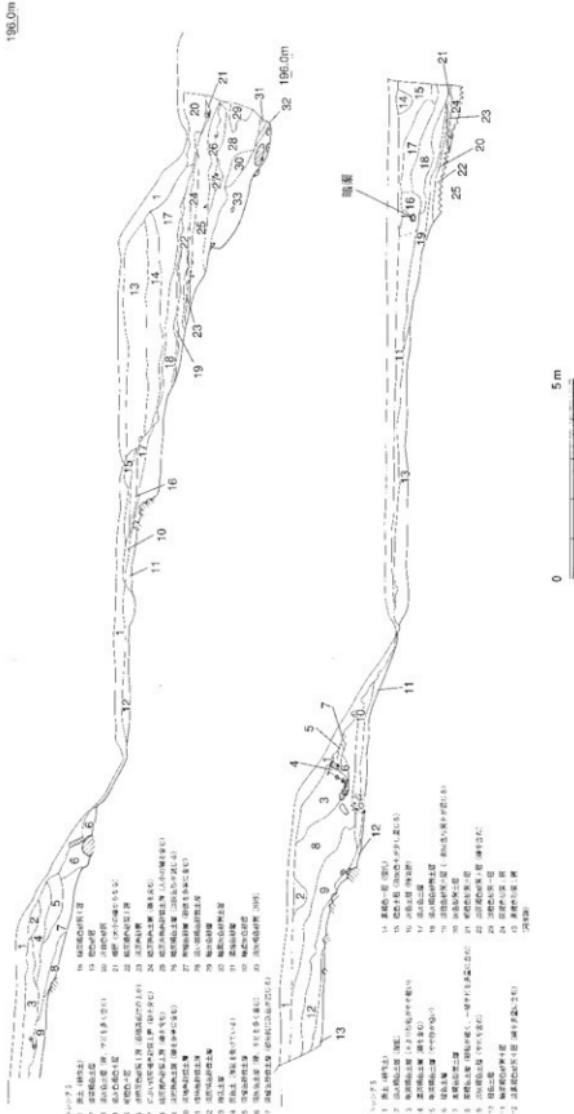
1区西側(H-6)の調査風景

mには円満寺遺跡や中世の山城である水ノ手城跡がある。

原田遺跡は縄文時代から近世に至る複合遺跡である。今回の対象地は遺跡の東端に位置し、最上段の水田の標高は195.6mで、現在の斐伊川からの比高差は7mである。一方、低い水田は標高192mで、比高差は3mである。今回の調査面積は2,200m<sup>2</sup>で、今後継続的調査が行われるので、調査



第47図 原田遺跡1区調査区



第48図 原田遺跡1区西側トレント5・6の東壁セクション図（1／120）

区としては1区と呼ぶ。なお、調査区中央には、古墳時代後期の横穴式石室をもつ原田古墳が位置する。この古墳の西側には縄文時代晩期と奈良時代のピットや土坑および建物跡があり、反対側の東側には中世以降の加工段や建物跡が検出されている。さらに、古墳の南側前面や南北側には縄文時代と奈良時代および江戸時代の河道が発見されたので、それぞれを河床跡1、河床跡2、河床跡3とした。調査区には10mの方眼を掛け、東西をアルファーベット、南北を数字で表示している。(第47図)

調査区の層序は、調査の最初に入れた西側端のトレンチ5、6のセクション図(48図)により記述する。

JとKラインに設定したトレンチ5 (TR 5) の東壁についてみると、2段の水田跡の内、上の段については、1、2、3層が昭和52年(1977)の窪直し時にできた層であり、8層はそれ以前の水田を造る時に盛られた層である。9層は近世以降のものである。13層の下の石垣状の造構は中世の陶磁器を伴うものである。一方、下段の大部分は昭和52年の窪直し時に作成され、表土の耕作土と11層の盛土の下にある13層は縄文時代の遺物包含層である。25層の砂礫は縄文時代の河床で、河床跡1にあたる。なお、この縄文時代の層と河床跡1については第9章第1節の中村報告の第2図⑤にあたる。

HとGとのラインに設定したトレンチ6 (TR 6) の東壁についてみると、調査時の水田は3段になっていたが、昭和52年の窪直し時に、中央部の12層がある部分が削られ、14層の水田面に13層が盛られている。昭和40年代の写真(写真4)を見ると、このライン上には江戸時代の河床部分の水田を除いて、細長い棚田の5段の水田がある。この内、14、15層の2段と最下部(河床部分)の水田の3段は確認できる。しかし、上2段は認められない。6層と18層の北端の2カ所に水田に伴う石垣がある。2層から6層は石垣を築く時の土層である。7、8、9層には斜面から落ちてきた山石が混じる。北側の最下層は縄文時代の遺物包含層の淡黒褐色・黒色土層である。

川側では、14層の客土となっている17層には中世の陶磁器が混じっている。昭和期に耕されていた水田を造る時、北側の山腹斜面の土を持ち込んだと考えられる。17層以下においては、水田面は知られていない、斜面からの流入土と斐伊川の堆積土である。20層は江戸時代の斐伊川本流の砂層で、最下層の水田面に広く存在する。25層以下は、近世以前の堆積層である。27層や29層は斐伊川の砂層で、



写真4 昭和40年頃の原田遺跡(仁多町役場保管の航空写真)

洪水時に流入した砂である。中世には斐伊川の後背湿地にあたり、本流は今の河道の近くを流れでいたと推定される（第9章第1節の中村報告参照）。中世の土層である28層には多くの鉄滓と炭が混じっていた。このことは、北側の山腹斜面が開発され、それ以前に造られた製鉄遺跡が壊され、斜面に土砂と共に落とされたものと考えられる。最下層の33層には須恵器や土師器が混じる。この層は奈良時代に堆積した土層であり、詳細については第5節の第107図で説明している。

遺物としては、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、石器、金属製品など多種多様の出土品がある。量的には、縄文土器が多い。遺物のコンテナー数は73箱になる。また、調査区の全域から中世の土師器・須恵器、陶磁器と鉄滓も出土している。これらの遺物は調査区の北側にある山腹から二次的に落ちたものである。その内、土器と陶磁器は本書に掲載しているが、前記の鉄滓と奈良時代の鍛冶に伴う鉄滓は成分分析の関係で来年度に別途報告する。なお、近世以降の陶磁器も出土している。近代以降は水田となっているが、近世には上布施集落が近くにあり、生活の場となっていたと考えられる。



写真5 1区西側で検出された昭和期の石垣（東南から）

## 第2節 縄文時代の遺構・遺物

**遺構** 調査区の西側で土器溜り、ピット、竪穴住居跡、炉跡、埋設土器を、古墳の南で斐伊川の河遺跡を検出した。遺構は、斐伊川の河岸段丘にできた黒ボク層の中に遺構が存在するので、土層の確認や遺構の検出作業には困難を極めた。

調査区の東側では、土器の出土も少なくなり、遺構は検出されなかった。但し、広範囲で三瓶山の降下火山灰の再堆積層を確認している。前記の家ノ脇Ⅱ遺跡と同様に、山腹に降った火山灰が斐伊川の河岸に流れ込み、河原の砂でバックされたと考えられる（第9章第1節の中村報告参照）。

### 土器溜り（第50図、図版5）

縄文土器は調査区西側の上の段において多く出土している。なお、固化し、サイトシステムで取り上げた土器については第54図で示している。中でも、大形の土器が密集する所が2地点認められたので、土器溜り1、土器溜り2として出土状態を記録した。

### 土器溜り1（第50図、図版5）

調査区の北西にあたるJ-6に位置する。深鉢の大形破片が2m四方に水平に散らばっている。



第49図 原田遺跡1区西側遺構実測図（1／150）（アミは炉跡）

周りからは小さい破片も出土している。

#### 土器溜り2（第50図、図版5）

山際にあたるI-6に位置する。深鉢の小さい破片が1×3mの範囲に上下となって散布していた。周りからは小さい山石も混在している。

#### ピット群（第49図、図版3）

ピットは調査区西側にあるH、I、J区の上下の水田跡から検出されている。総数は203個で、下の段に多数存在する。しかし、H-5区、J-5区には奈良時代の掘立柱建物が2棟が発見されており、この時代のピットも少なからず混じっていると考えられる。柱穴の可能性があるものは第49図のSI01とSI02である。山際の一段高い水田の下で発見されたピット10個は縄文土器の包含層の下



第50図 原田遺跡1区西側土器溜り1（縄文土器）、2実測図

で検出されているので、同時期のものと推定される。しかし、南側の一段低い水田で見つかっているものについては、昭和52年の造成で地山まで削平されており、水田の下は即各時代の遺構になってしまっており、時期を明らかに出来るものは少ない。ここでは竪穴住居の可能性がある2群のビットと縄文土器が入っていた2個の穴の説明を行うにとどめたい。土器がまとまって入っているビットとしてはP186とP191がある。P186（第51図、図版4）はJ-6区に位置し、縄文土器深鉢（第58図3）と浅鉢（第59図5）の大きい破片、および小石が穴の中程の茶褐色の砂層と土層の間より出土している。P191（第51図）はI-6区に位置し、縄文土器深鉢（第57図3）の大きい破片と石が穴の茶褐色層より出土している。

#### 竪穴住居跡 SI01（第49図、図版4）

竪穴住居跡の柱穴と考えられるビット列を調査区の中央と西端で1棟ずつ検出した。

SI01は調査区のI-5、I-6に位置し、一部H-5、H-6にかかっている。長径6m×短径5mの梢円に並んだビット群で、ビット間隔は80cmから2.5mとまちまちである。削平された水田部で検出されており、遺物はほとんど出土していない。内部には5個の小さいビットがあるが、規則性はない。一応、住居跡の可能性があるので、SI01とした。

#### 竪穴住居跡 SI02（第49図、図版3）

SI02は調査区の西端のJ-5、J-6に位置し、一部トレンチ5にかかっている。直径5.85mの円形に並んだビット群で、ビット間隔は60cmである。南側は削平されて遺物は少なかったが、北側からは縄文時代晩期の土器が多く出土している。なお、トレンチ5や未調査地K-5の部分も存在するので、住居跡でない可能性もある。

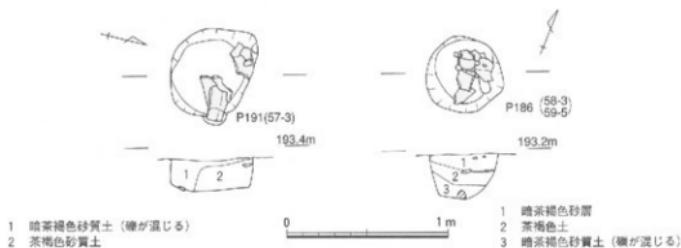
#### 炉跡（第49図）

調査区の北側5地点において、地面の赤化が確認された。大きさは大小まちまちであるが、I-6区にある大きいものは1.05cm×0.75cmである。高熱によるものと考えられ、炉跡と推定されるが、周囲ではビットがまとまっては検出できなかった。なお、低い水田では造成時に当時の生活面が重機で削られ、地面の赤化は認められなかった。

#### 埋設土器（第52図、図版7～9）

西側調査区で、縄文土器の深鉢を埋設した穴を4個発見した。土器は総て正立で、穴は土器が入る程に掘られている。なお、土壤の分析の結果は第9章第2節（若月・三浦報告）で報告している。

埋設土器1（第52図、図版7） I-6区に所在する。埋設穴は、平面形が円形で、直径40cmで



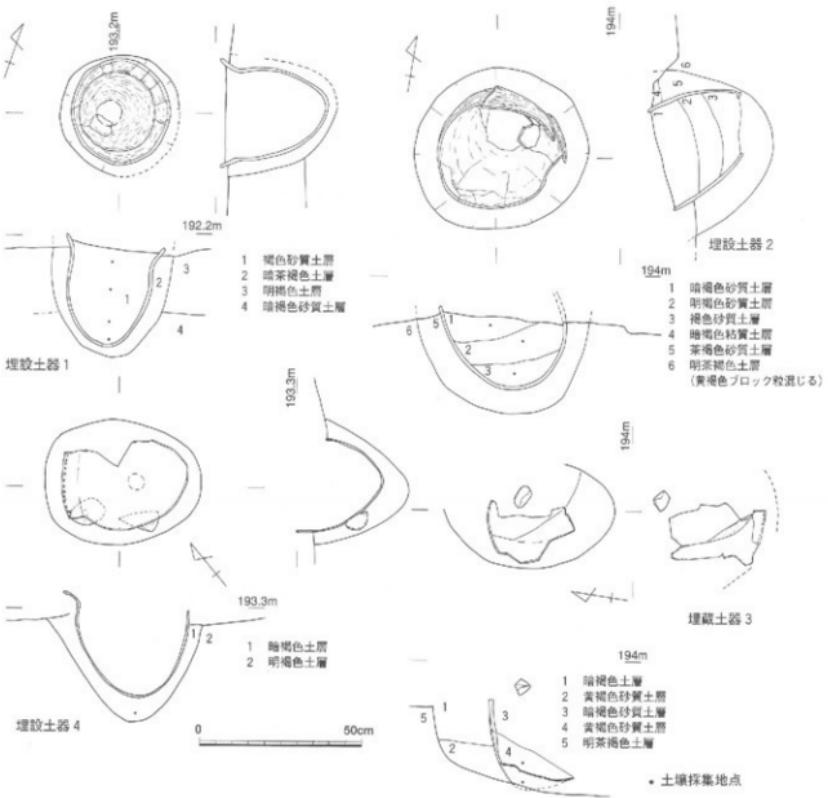
第51図 原田遺跡1区西側ピット（P186・191）実測図

（カッコ内の番号は図版番号・挿図番号と一致する）

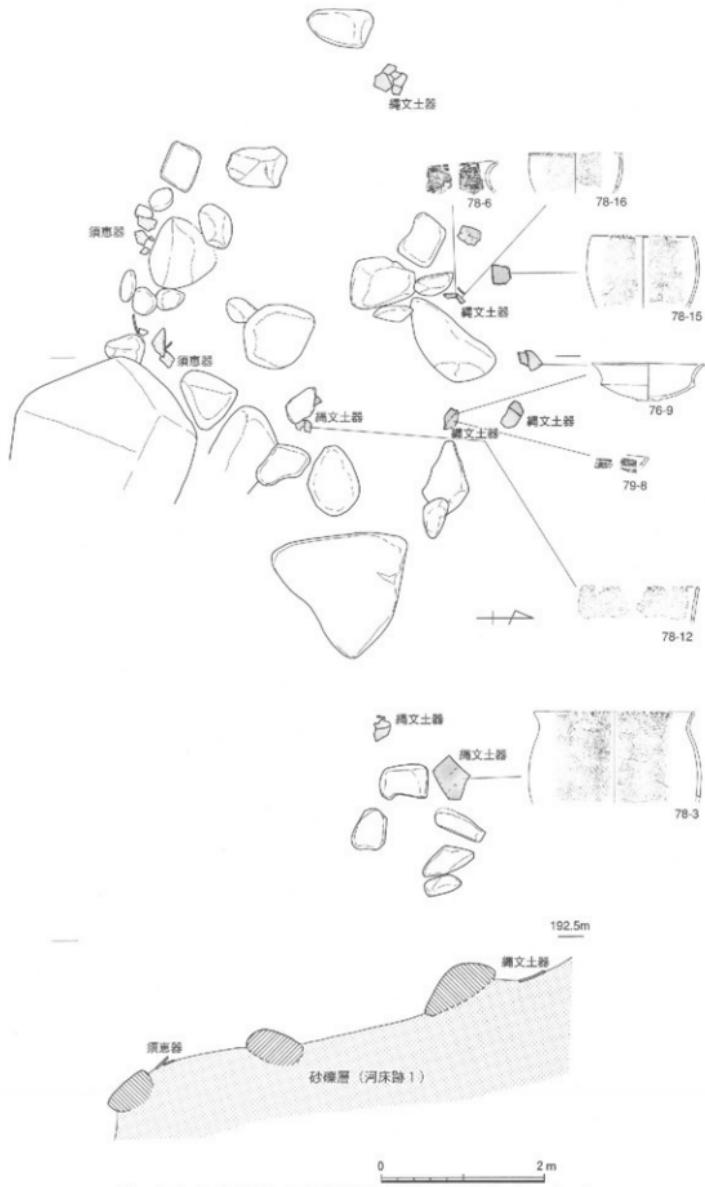
ある。素握りで、深さ40cmあり、底はやや尖っている。入っている土器は、粗面の縄文土器深鉢（第55図1、図版18）で、口縁部の径28.4cm、器高36cmの大きさである。土器の時期は形態より晩期中葉に属する。土器の内部の土は褐色砂質土で、外部の埋土は暗褐色土である。

**埋設土器2（第52図、図版8）** G-7区に所在する。埋設穴は、平面形がほぼ円形で、長径54cm、短径50cmである。素握りで、深さは40cmであり、底は丸くなっている。入っている土器は、粗面の縄文土器深鉢（第55図2、図版18）で、口縁部の径37.6cm、器高は底を欠くので、不明である。外面に縁が付着している。土器の時期は形態より晩期中葉に属する。土器の内部の土は3層となり、上から暗褐色砂質土、明褐色砂質土、褐色砂質土で、外部の埋土は茶褐色砂質土である。

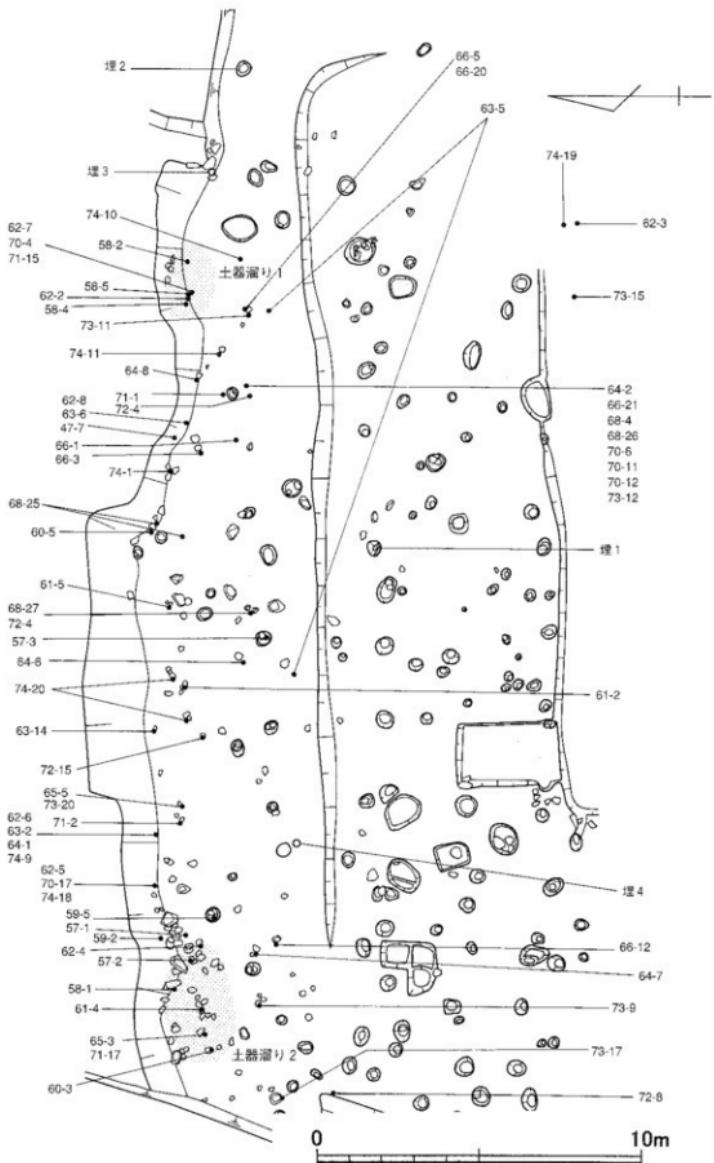
**埋設土器3（第52図、図版9）** H-7区に所在する。埋設穴と土器の上部は後世に壊され、失われている。残った部分の平面形は楕円形で、長径53cm、短径は不明。土器は深鉢（第56図3）



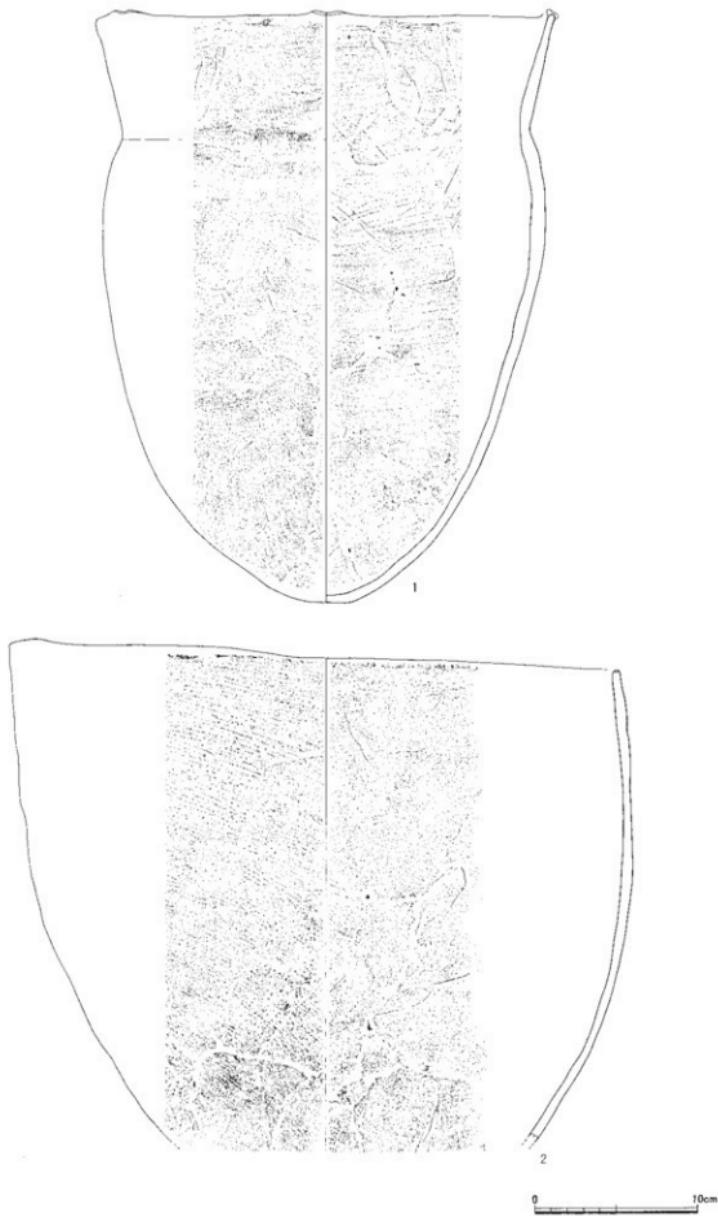
第52図 原田遺跡1区西側埋設土器（1～4）実測図（1／15）



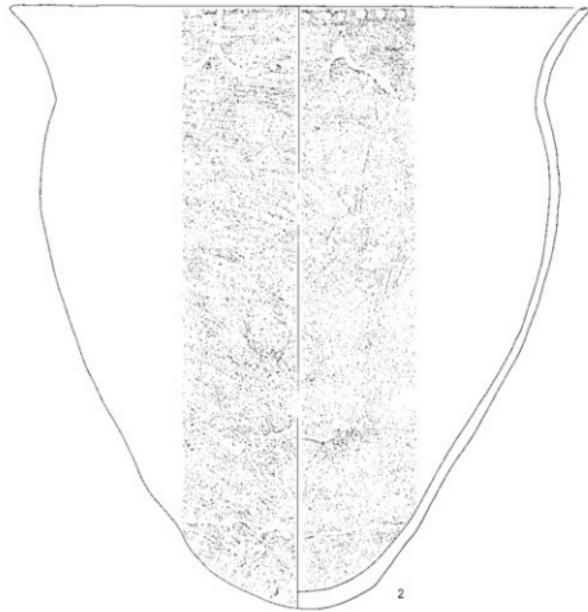
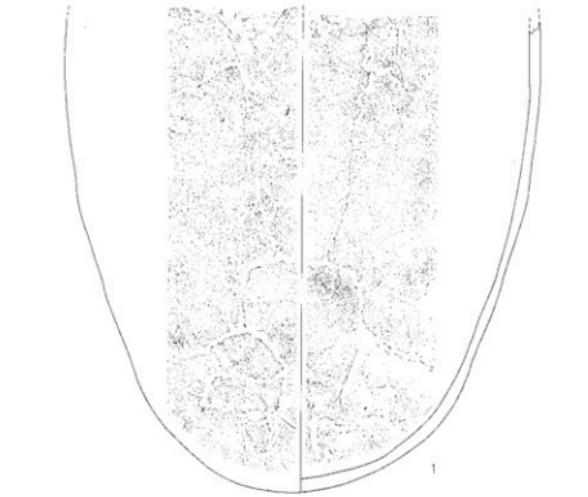
第53図 原田遺跡 1区斐伊川河床跡 1実測図 (1 / 60)



第54図 原田遺跡1区西側 繩文土器出土位置図  
(番号は図版番号・挿図番号と一致する)

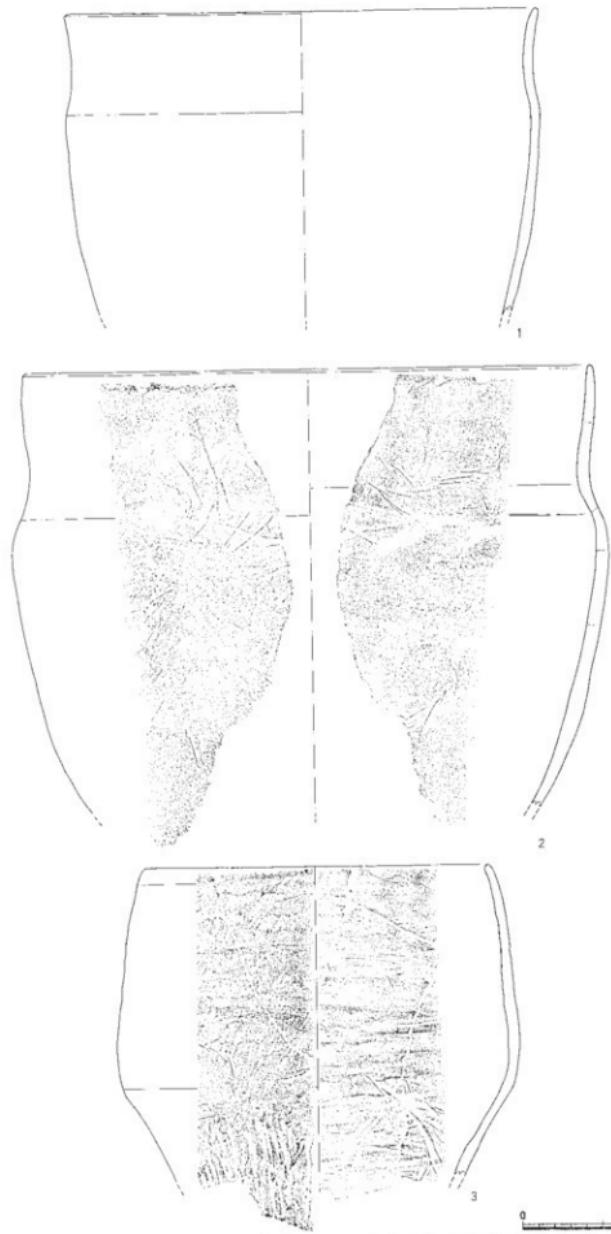


第55図 原田遺跡1区西側出土縄文土器（埋設土器1・2）実測図（1／3）



0 10cm

第56図 原田遺跡1区西側出土縄文土器（埋設土器3・4）実測図（1／3）



第57図 原田遺跡1区西侧土器溜り(1)・Pit191出土縄文土器(深鉢)実測図(1/3)

で、胸部から底部が残っている。時期は不明。土器の内部の上は2層で、上部が黄褐色砂質土、明茶褐色砂質土、外部の埋土も2層で、上部が暗褐色土、下部が黄褐色砂質土である。

**埋設土器4(第52図、図版8)** J-6区に所在する。埋設穴は、平面形が楕円形で、長径48cm、短径39cmである。素掘りで、深さは40cmであり、底はやや尖っている。なお、穴の西側には挙大



第58図 原田遺跡1区西側土器溜り(1・2)出土縄文土器実測図(1/3)

の山石が2個置かれ、土器を支えていた。なお、外部の埋土は暗褐色土である。入っている土器は、粗面の縄文土器深鉢（第56図2、図版18）で、口縁部の径36.3cm、器高は36.6cmの大きさである。口縁部内側に刺突文を巡らす。土器の時期は形態より晩期中葉に属する。

#### 斐伊川の河道跡（第53図、図版4、6、10）

古墳の南側にあたるG-5区、F-5区で、縄文時代の斐伊川（河床跡1）が現れている。岸辺部分であり、小さい円礫が多いが、中には人頭大以上の石も混じる。標高は189mから192mで、それより低い部分は奈良時代の斐伊川の河道で削られ残っていない。川岸からは縄文土器は深鉢や浅鉢の破片（第53図、図版6）が出土している。これらの土器は石の間や堆積した砂層中に存在していた。土器は形態より晩期中葉のものであり、当時の斐伊川は谷間にあたる山隙を流れていることが知られた。

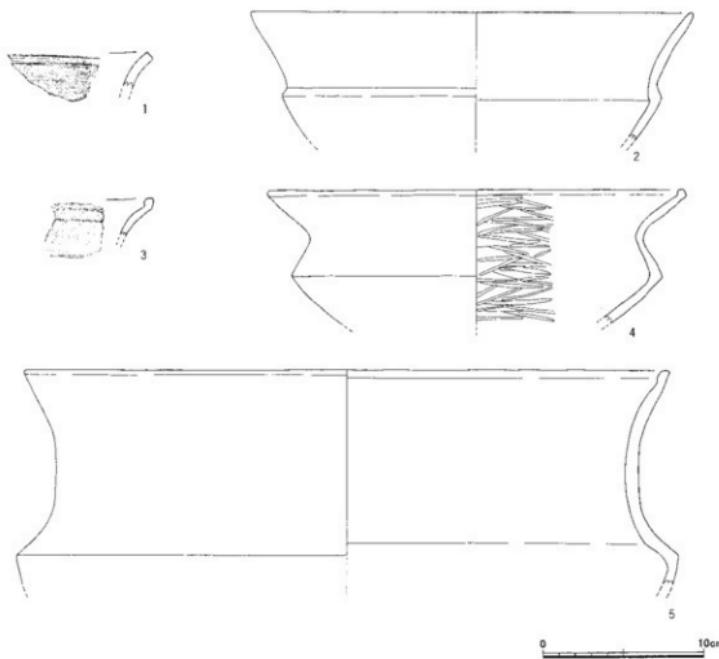
遺物 縄文土器と石器がある。

#### 縄文土器（第55図～第79図、図版18～36）

##### 1区西側埋設土器、土器溜り、ピット出土深鉢（第55図～第58図、図版18～21）

埋設土器1～4の深鉢は第55・56図である。

第57図1、2は土器溜り1の深鉢で、口縁部が直立し、屈曲の位置が高い。2には突起をもつ

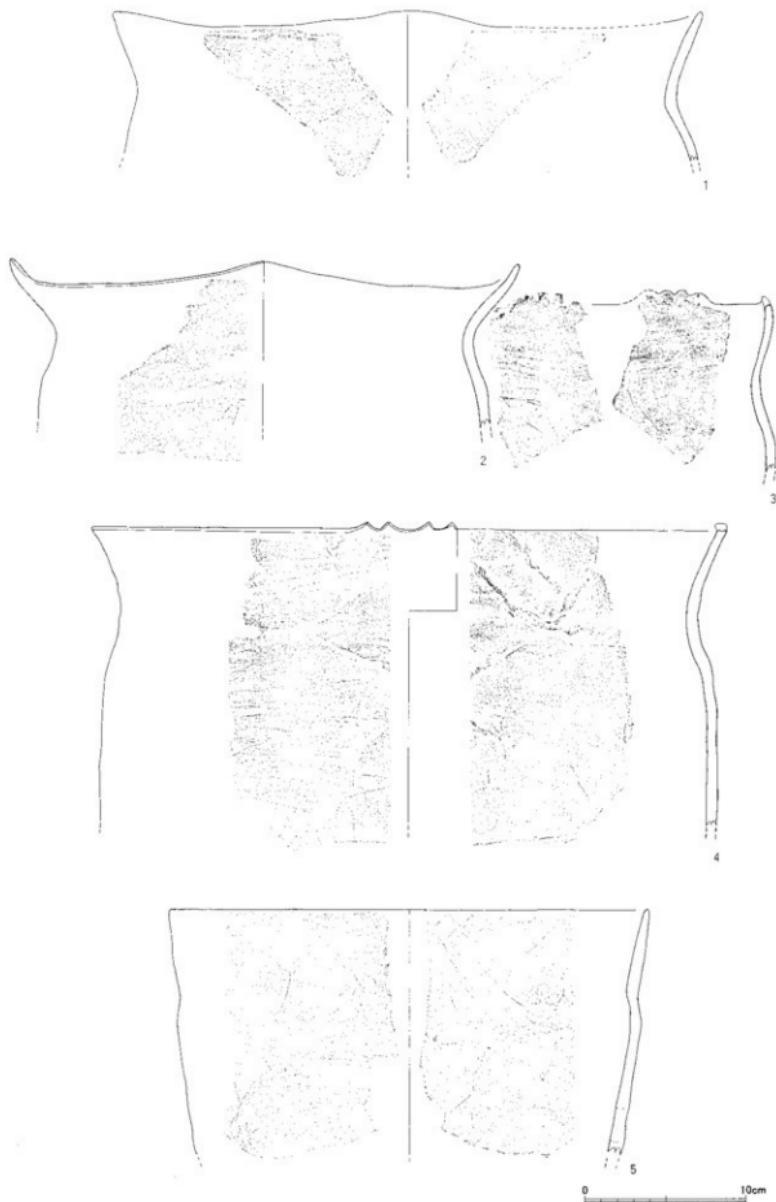


第59図 原田遺跡1区西側土器溜り（1）出土縄文土器実測図（1／3）



第60図 原田遺跡1区西側遺物包含層出土縄文土器（深鉢①）  
実測図（1／3、7の拓本は内面）

0 10cm



第61図 原田遺跡1区西侧遺物包含層出土縄文土器（深鉢②）実測図（1／3）

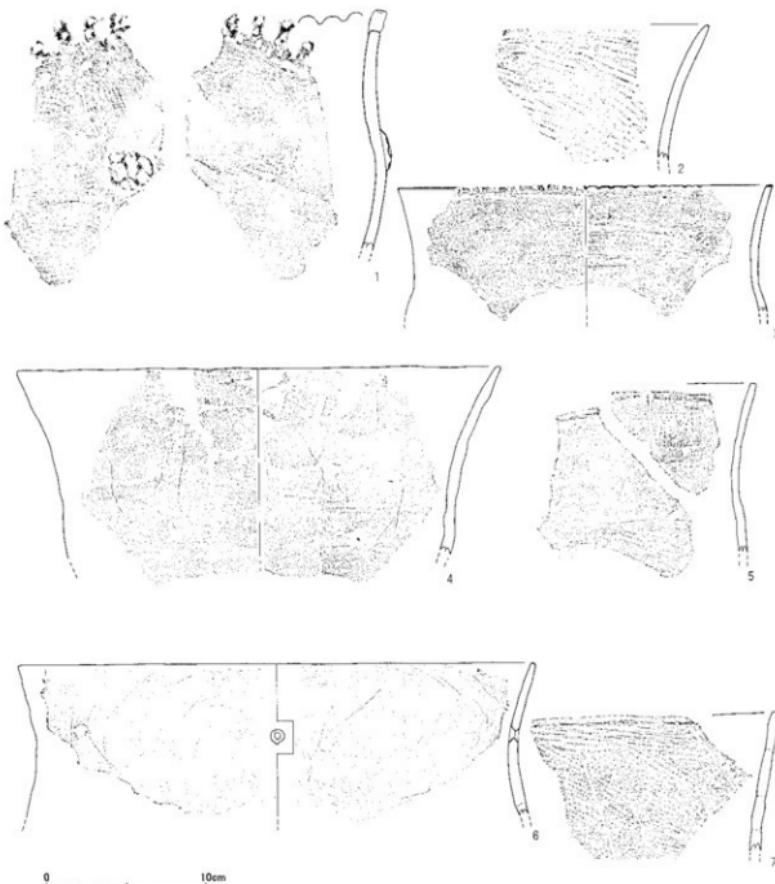


第62図 原田遺跡1区西側遺物包含層出土縄文土器（深鉢③）  
実測図（1／3、7の拓本は内面）

と推定されるが、欠損している。3はP186出土の深鉢で、口縁部が内傾し、屈曲の位置が低い。特異な器形といえる。外面下部に縱方向の二枚貝条痕の調整がある。第58図は土器滲り1・2、P186出土の深鉢である。1～3は口縁部はやや外反し、頸部・胴部の屈曲は緩やかである。2は頸部に、3は口縁端部に突起をもつ。2の突起の上には垂下沈線が施されている。1、2には二枚貝条痕を調整している。4、5は底部で、4は凹み底で、5は尖底気味の丸底である。

#### 1区西側土器滲り、ピット出土浅鉢（第59図、図版21）

第59図は長頸浅鉢で、全体の器形が分かるものは、胴部が明瞭に屈曲する。1は口縁部は外傾するが、端部には平坦面をもつ。2は単純口縁で、頸部の屈曲部と胴部の屈曲部の距離が短い。3



第63図 原田遺跡1区西側遺物包含層出土縄文土器（深鉢④）実測図（1／3）

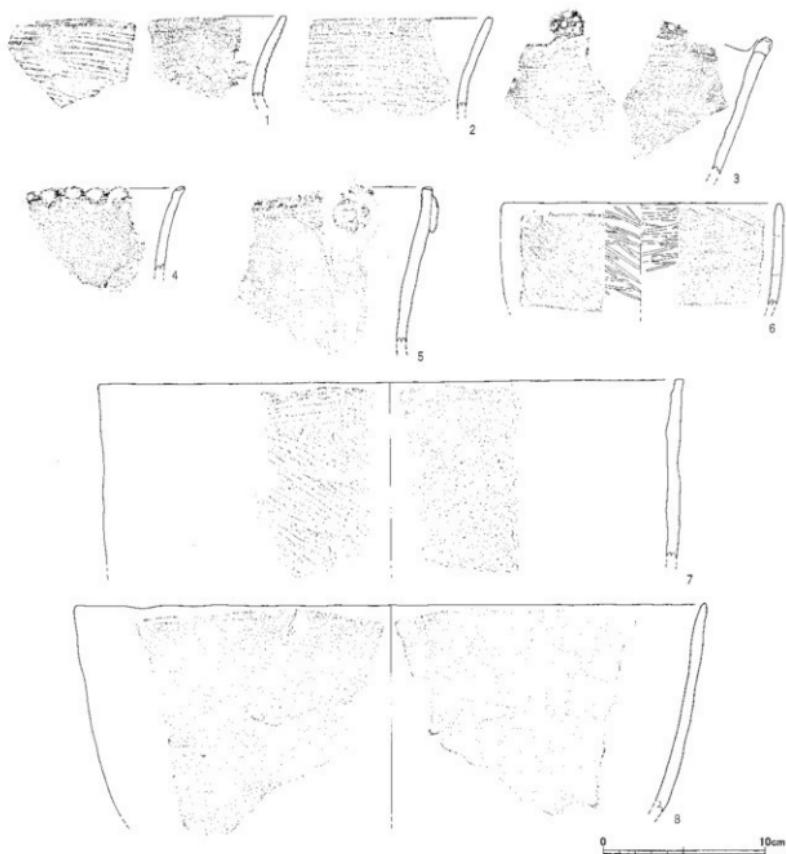
と4は、口縁端部が屈曲する。5は口縁部内側に段をもつ。

#### 1区西側遺物包含層出土深鉢①（第60図、図版22）

第60図は遺物包含層出土深鉢。1は沖戸式の注口土器と考えられる。外面に、縄文が一部施されている。2、3の口縁部は僅かに屈曲の痕跡がある。2の外面には垂下する沈線と斜格子状の沈線があり、内面にはC字の爪形刺突文が施されている。4は滋賀里Ⅲa式の特徴をもつ深鉢である。5～10は口縁部は短く外反する。5、6、8、10は二枚貝条痕で調整している。6は口縁部に山形の突起をもつ。9の口縁部には瘤状の突起が2個ある。

#### 1区西側遺物包含層出土深鉢②（第61図、図版22～23）

第61図は遺物包含層出土深鉢。1～3は、頸部が明瞭にくびれる。1は二枚貝条痕で調整して



第64図 原田遺跡1区西側遺物包含層出土縄文土器（深鉢⑤）実測図（1／3）

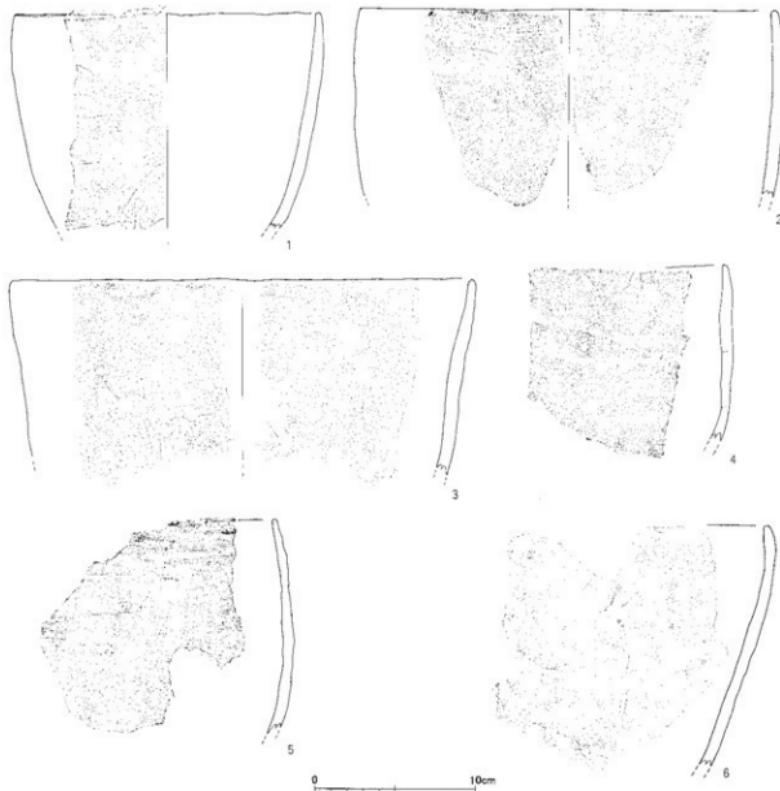
いる。3の口縁部には山状の突起が付く。4、5は頸部の括れが弱く、肩部に段または稜がある。4の口縁端部に突起が付き、突起には橢円形の凹点が施されている。5の外面には二枚貝条痕で調整してある。

#### 1区西側遺物包含層出土深鉢③（第62図、図版23）

第62図は遺物包含層出土深鉢。1～4は肩部に、稜または段をもつ。4の口縁端部には小さなO字刻目がある。1、2、4は二枚貝条痕で調整している。5～8は、頸部の屈曲が弱く、口縁部は短めである。5は内外ともに二枚貝条痕で調整している。

#### 1区西側遺物包含層出土深鉢④（第63図、図版24）

第63図は遺物包含層出土深鉢で、口縁部は長いが、屈曲が弱いもの。1には口縁端部に4山の突起が、口縁部と頸部に上下に2個の円形浮文の突起が付く。上下2個の突起間には4条の垂下沈線がある。また、口縁端部の突起周辺と頂部に円形突起が、さらに、突起間の凹部にも刺突が認め



第65図 原田遺跡1区西側遺物包含層出土繩文土器（深鉢⑥）実測図（1／3）



第66図 原田遺跡1区西側遺物包含層出土縄文土器（深鉢⑦）  
実測図（1／3、5・11・16・29の拓本は内面）

られる。3の口縁端部には小さいO字の刻目が上から施文されている。6の頭部には孔が開いている。1～5、7は二枚貝条痕で調整され、7の外面は垂れ気味に施されている。

#### 1区西側遺物包含層出土深鉢⑤(第64図、図版24)

第64図は遺物包含層出土深鉢。1～5は、口縁部は長く、頭部の屈曲は弱い。3の口縁端部には、板状の突起が付く。突起周辺には円形刺突がある。4の口縁端部には凹点気味の刺突が施されている。5の口縁部外面に円形の浮文(突起)が付く。口縁部の内外面に1条の沈線があり、外面では突起から下方にも引かれている。また、口縁端部にはV字刻目が入る。1～3、5は2枚貝条痕で調整している。7、8は砲弾形の器形。外面に2枚貝条痕の調整が良く残る。

#### 1区西側遺物包含層出土深鉢⑥(第65図、図版25)

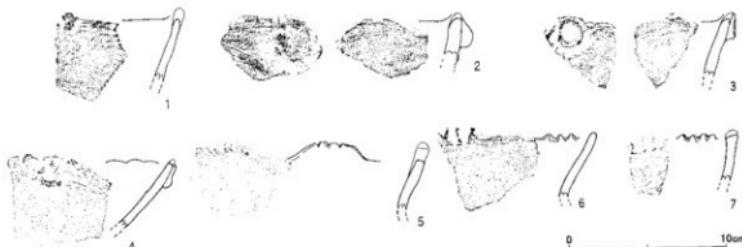
第65図は遺物包含層出土深鉢で、砲弾形の器形。1～6はナデ、ケズリ調整である。

#### 1区西側遺物包含層出土深鉢⑦(第66図、図版26)

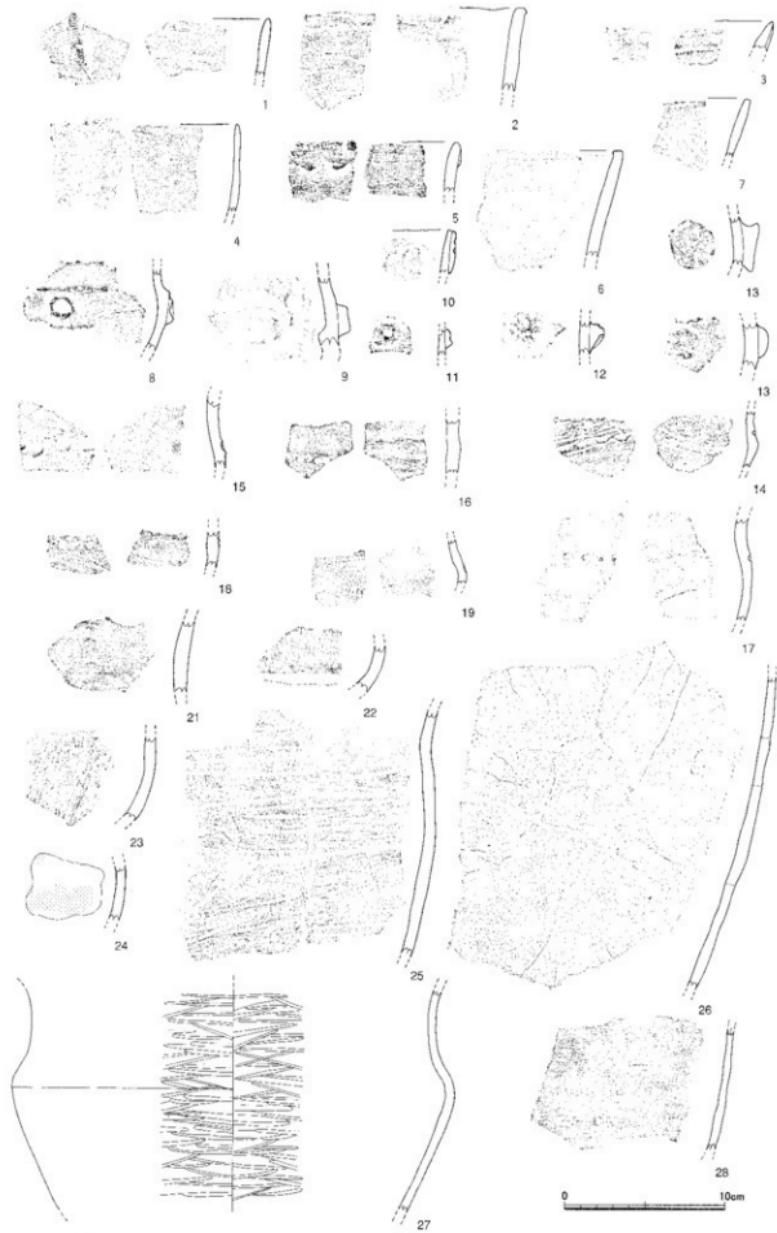
第66図は遺物包含層出土深鉢。1～9は口縁部内面に刺突(孔列文)をもつ。5はヘラ状工具で、刺突されている。6の口縁部内面にはテーブル状の突起がある。7は円形の刺突となり、外面には3条以上の垂下沈線が施されている。8は右から左に施文されている。2、3、5は2枚貝条痕で調整している。10～16の口縁端部には、内面および上からの大きな刻目がある。これらは刺突に近い。10と13はO字刻目で、11は円形の刺突である。12は大きいO字刻目で、15は横長のO字刻目。16は大きな刻目か突起なのかは不明である。16の内面は二枚貝条痕で調整してある。17～22は口縁端部に小さい刻目を入れる。17は深い刻目をもつ。18はO字刻目で、19は浅いV字刻目。20は浅い逆D字、21は小さいV字刻目。22は外面にも刺突文をもつ。17、18、20は2枚貝条痕で調整してある。23～27は4山に復元した口縁部突起をもつ。これはリボン状突起で、特異である。23には浮文が付く。24の外面には浮文の剥離面が残る。25の外面には、周囲に刺突が施された浮文が付く。27～20、26、27は二枚貝条痕で調整してある。28は2山の突起をもち、外面には円形浮文が付く。29～31は大きな刺突で山を表現した突起をもつ。31はD字刺突で、巻き貝によるものと推定される。円形浮文は歪である。30、31は二枚貝条痕で調整してある。

#### 1区西側遺物包含層出土深鉢⑧(第67図、図版27)

第67図は遺物包含層出土深鉢。1～3には、突起が浮文で表現されている。2は瘤状の、3は円形の浮文が付く。4～7は口縁部の頂部に刻目を入れた突起をもつ。4は波状口縁である。6の



第67図 原田遺跡1区西側遺物包含層出土縄文土器(深鉢⑧)  
実測図(1／3、5・7の拓本は内面)

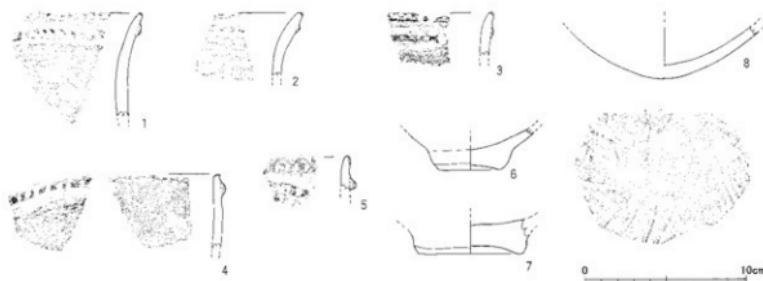


第68図 原田遺跡1区西側遺物包含層出土縄文土器（深鉢⑨）  
実測図（1／3、25・26の拓本は内面）（23と24は同一個体・アミは黒塗）

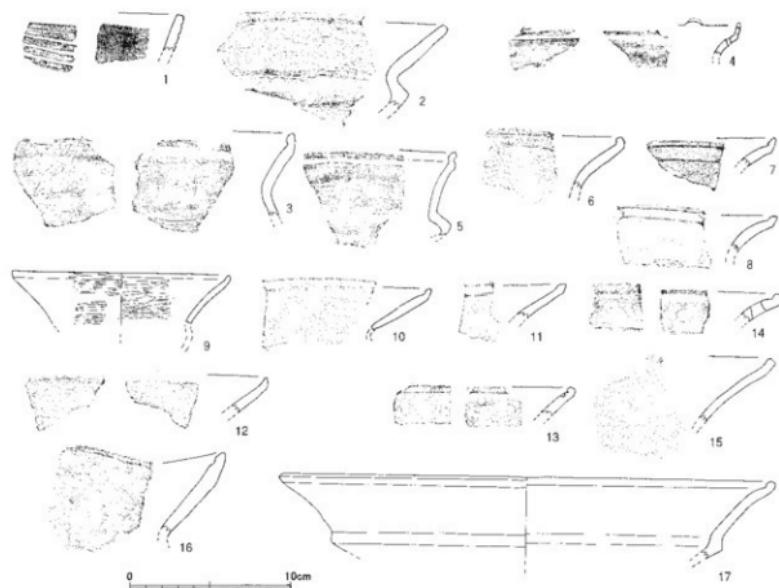
ものは突起か、大きな刻目かは不明。

1区西側遺物包含層出土深鉢⑨（第68図、図版27・28）

第68図は遺物包含層出土深鉢。1～3には、口縁部付近に文様をもつ。1は垂下降帶を、2は細かな線による垂下降線をもつ。3は横方向に2本の沈線を引き、その後、縦の沈線を施す。口縁部は擬口縁の可能性もある。2の外面は二枚貝条痕で調整してある。4～7は無文。8～14は

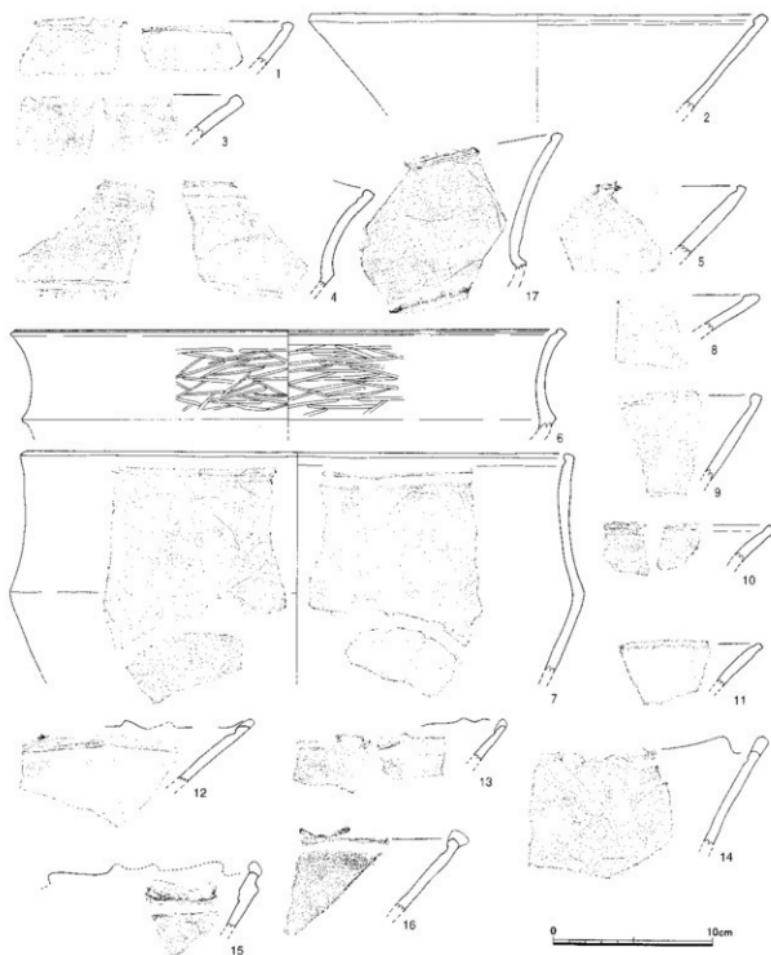


第69図 原田遺跡1区西側遺物包含層出土縄文土器（深鉢⑨）実測図（1／3）



第70図 原田遺跡1区西側遺物包含層出土縄文土器（浅鉢①）実測図（1／3）

胴部に浮文（突起）をもつ。8は円形で、中央は凹点。9～14は、浮文に刺突がある。8の外側は二枚貝条痕で調整してある。15～20は、胴部に刺突文がある。14、15、18は円形の刺突をもつ。17、20は棒状工具で、梢円形の刺突が横方向から施されている。19は爪形文に近い。二枚貝による刺突か定かでない。17、20は二枚貝条痕で調整してある。21には双曲線状の文様が、22には多く



第71図 原田遺跡1区西侧遺物包含層出土縄文土器（浅鉢②）  
実測図（1／3、12・16の拓本は内面）

の沈線文がある。22は山形の文様になるかもしれない。23、24は無文で、外面は二枚貝条痕で調整してある。同一の個体であるが、24の内面には黒漆が残る。25～28は頭部が緩やかに屈曲する鉢である。25の外面は二枚貝条痕で調整してある。

#### 1区西側遺物包含層出土深鉢⑩（第69図、図版29）

第69図は遺物包含層出土深鉢。1～5は口縁部に突帯文をもつ。口縁部は、1～3は外反し、4、5は直立する。1はV字の刻み、2はD字の小さい刻み、3はD字の刻みである。4は、上がV字、下がD字の刻みを施す。1、4は二枚貝条痕で調整してある。6、7は平底、8は丸底である。8は二枚貝条痕で調整してある。

#### 1区西側遺物包含層出土浅鉢①（第70図、図版29）

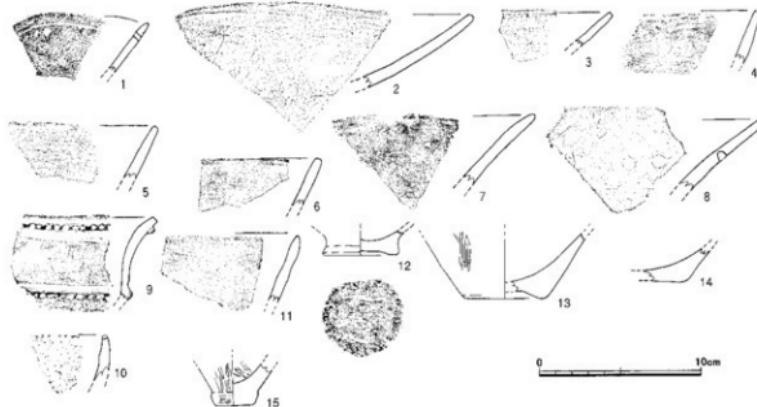
第70図は遺物包含層出土の長頸浅鉢で、胴部に稜をもつ。1は口縁部に4条以上の細めの沈線を入れる。楕型の浅鉢か。2は屈曲部の上に微かに稜をもつ。3～8は長頸の浅鉢で、口縁部の屈曲が明瞭である。4、5は口縁部外面に沈線をもつ。9～17は、不明瞭ながら屈曲の痕跡がある。10は口縁部外面の下方に浅い凹線が入る。13の内面には円形の刺突がある。14には、孔が焼成後に穿たれている。16の内面には沈線がある。17は鋭い稜をもち、調整はミガキである。

#### 1区西側遺物包含層出土浅鉢②（第71図、図版30）

第71図は遺物包含層出土の長頸浅鉢で、胴部に稜をもつ。1～11は口縁部内側に段をもつ。4は2段となっている。11は浅い凹線状の段となり、調整はミガキ中心である。12～16は段状口縁の突起をもつ。12、13の内面は段状にケズり出す。同一個体の可能性もある。16は凹線気味な段をもち、調整はミガキである。

#### 1区西側遺物包含層出土皿形浅鉢・浅鉢・底部（第72図、図版30）

第72図は遺物包含層出土の皿形浅鉢・浅鉢・底部である。1～8は皿形浅鉢。1は波状口縁で、外面に1条の沈線を引き、小さな孔が開く。8の外面には、2個円形の刺突文が存在する。調整は

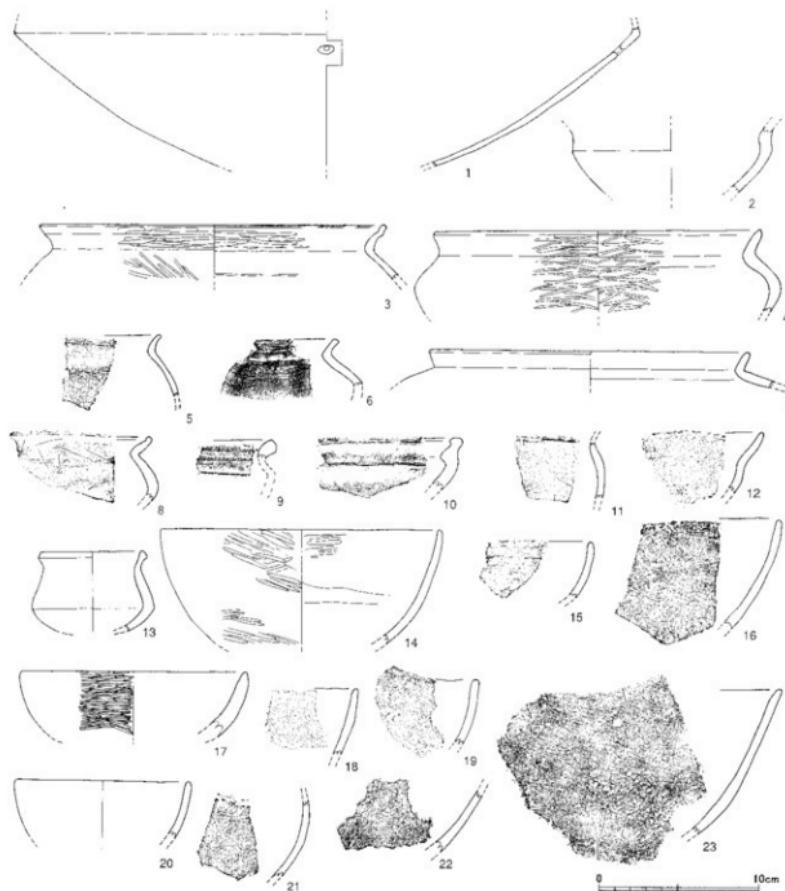


第72図 原田遺跡1区西側遺物包含層出土縄文土器（皿形浅鉢・浅鉢・底部）  
実測図（1／3）

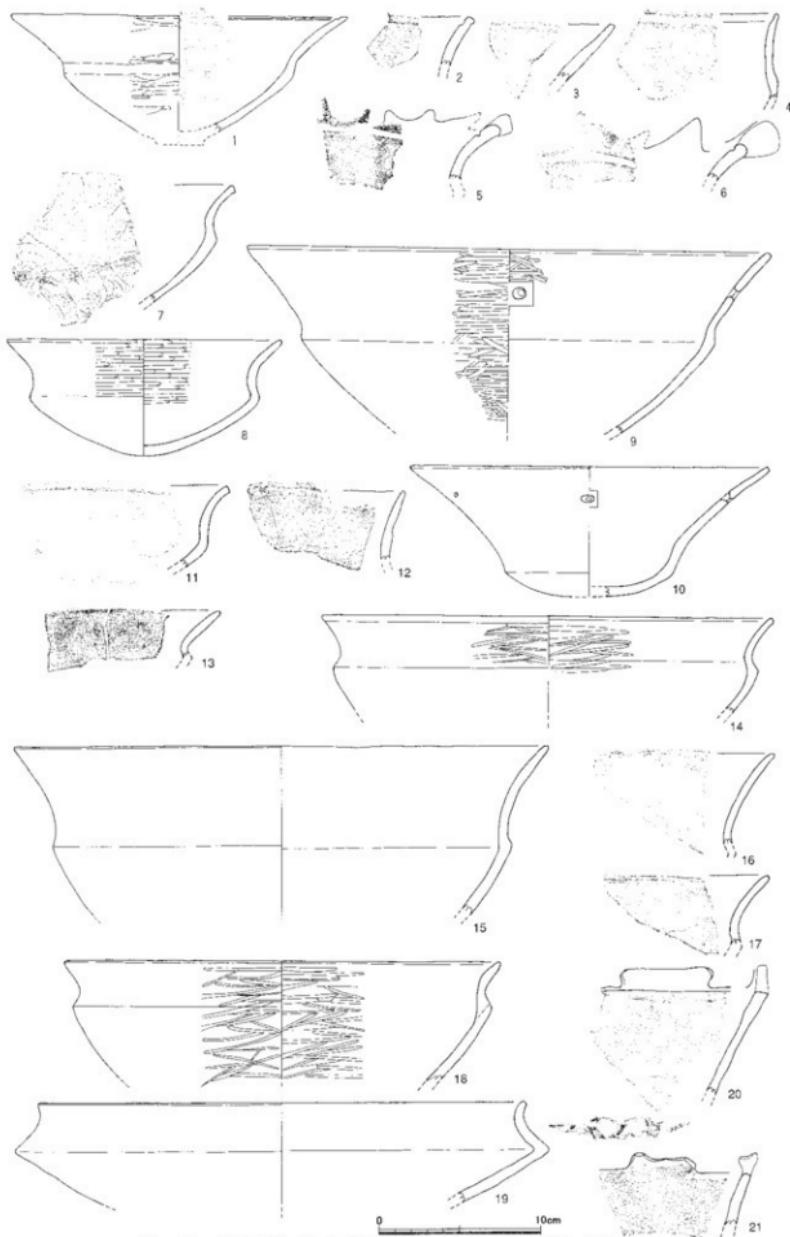
ミガキが中心である。9は突帯文をもつ浅鉢で、縁の上に沈線がある。突帯文と後にはO字状の刻目を施す。10、11は深鉢の可能性もあるが、取りあえずここに載せる。10はV字の刻目をもつ。12～14は底部。15はミガキで、他はナデ調整である。

#### 1区西側遺物包含層出土浅鉢③（第73図、図版31）

第73図は遺物包含層出土の長頸浅鉢。1、2は胴部に稜線をもつ。1は鋭いが、2は鈍い。調整はミガキである。3は口縁部が屈曲する。短頸のもの。4～7は口縁部は単純で、短頸のもの。調

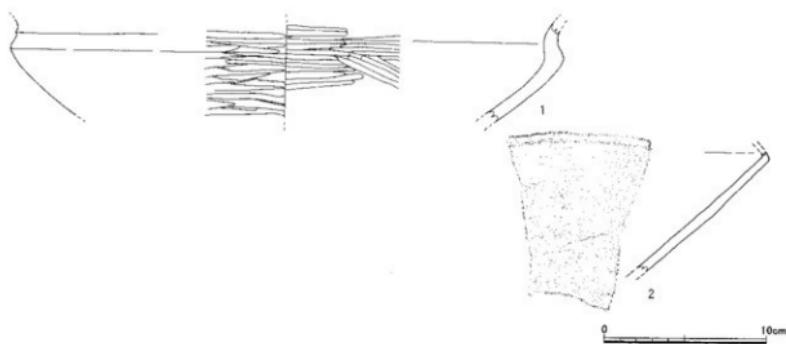


第73図 原田遺跡1区西側遺物包含層出土縄文土器（浅鉢③）  
実測図（1／3、8・10・15・23の拓本は内面）

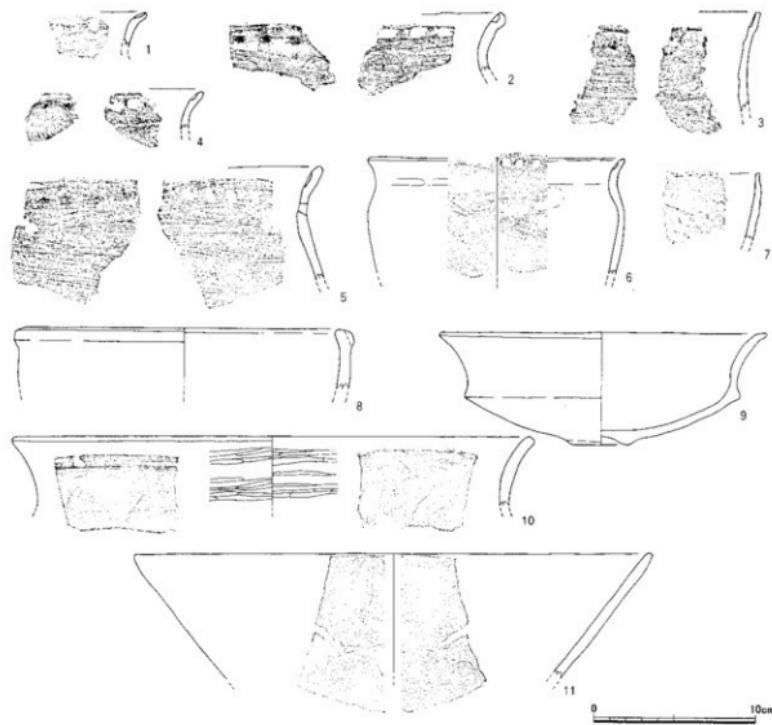


第74図 原田遺跡1区西側遺物包含層出土繩文土器（浅鉢④）

実測図（1／3、1・3・5・4・6・13の拓本は内面）



第75図 原田遺跡1区西側遺物包含層出土縄文土器（浅鉢⑤）実測図（1／3）



第76図 原田遺跡1区西側遺物包含層出土縄文土器（浅鉢⑥）  
実測図（1／3、1の拓本は内面）

整はミガキである。9、10は口縁部が肥厚し、短頸のものである。11、12は短頸のものであるが、胴部の張りが弱いもの。13は小型で、短頸。出土例は少なく、特異なものである。調整はミガキである。14~22は、器形が碗形のもの。19は山形口縁。23は擬口縁の可能性もある。調整はナデもあるが、ミガキが中心である。

#### 1区西側遺物包含層出土浅鉢④（第74図、図版31）

第74図は遺物包含層出土の長頸浅鉢で、胴部に稜をもつもの。1~6は口縁部の内側に沈線をもつ。1は、口縁部の破片が小さく、口縁部を直線にしているが、波状の可能性もある。3は2条の沈線をもつ。5、6は、口縁端部に突起が付く。7~21は単純な口縁部をもつもの。鋸い稜をもつものが多い。18、19は頸部がやや短い。20、21には突起が付く。21の場合、二山の突起の上面には凹点がある。9、10には孔が開けられている。調整はナデもあるが、ミガキが中心である。



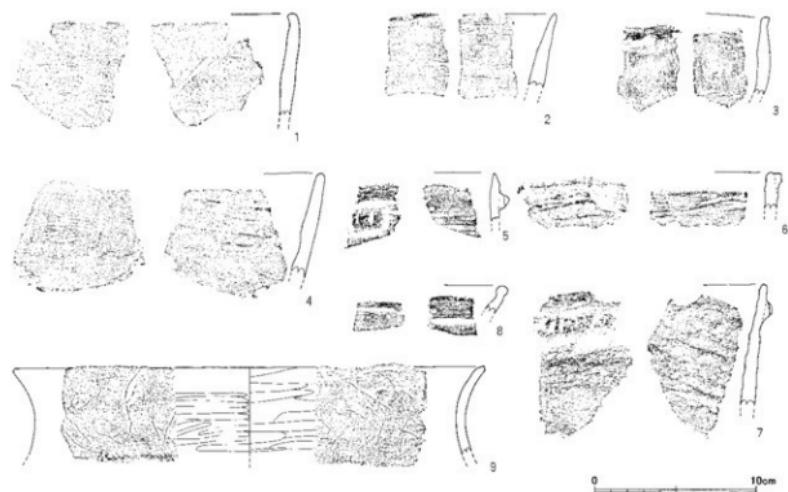
第77図 原田遺跡1区古墳付近出土縄文土器（深鉢）実測図（1／4）



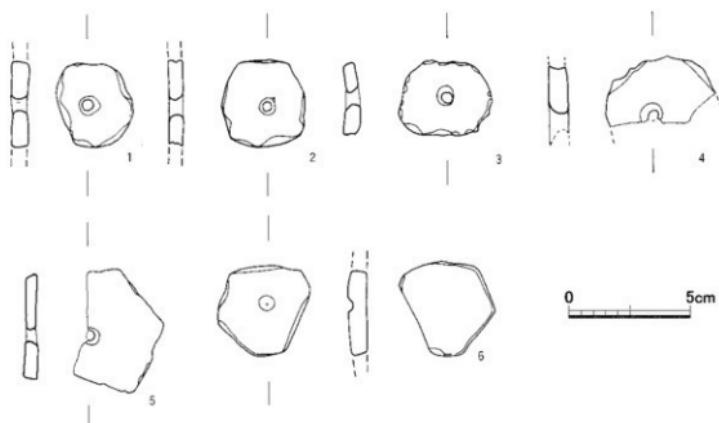
第78図 原田遺跡1区東側遺物包含層出土繩文土器（深鉢）実測図（1／3）

1区西側遺物包含層出土浅鉢⑤（第75図、図版33）

第75図は遺物包含層出土の長頸浅鉢で、胴部に縦をもつもの。口縁部は欠く。稜は鋭い。調整はミガキである。



第79図 原田遺跡1区東側遺物包含層出土縄文土器（深鉢・浅鉢）実測図（1／3）



第80図 原田遺跡1区西側遺物包含層出土縄文土器（有孔円板）実測図（1／2）

### 1区河床跡1出土深鉢・浅鉢（第76図、図版33）

第76図は1区河床跡1出土の深鉢・浅鉢。1～6は、頸部が屈曲し、口縁部内側に刺突（孔列文）をもつ深鉢である。3はD字、5はC字の刺突をもつ。6は古い形の刺突文である。1、3、5、6は二枚貝条痕で調整している。7は砲弾形の深鉢。8は口縁端部に突帯文をもつ深鉢で、新しい時期のものである。9～11は浅鉢。9、10は、胸部が屈曲するもの。9は鋭い稜をもつ。11は皿形の浅鉢で、調整はミガキである。

### 1区原田古墳付近出土深鉢（第77図、図版34）

第77図は1区原田古墳付近出土の深鉢である。多くは石室の西側（TR19）から発見されている。1は緩やかな波状口縁をもつ。口唇部内側に僅かな凹線状の凹みがある。3は緩やかな波状口縁をもち、口縁部に外間に円形の浮文がある。4の口唇部内面に浅い刺突が左から右に施されている。1、2、6は二枚貝条痕で調整してある。

### 1区東側遺物包含層出土深鉢（第78図、図版35）

第78図は1区東側遺物包含層出土の深鉢である。绳文時代の河床1付近から発見されている。1は後期の崎ヶ鼻式土器で、口縁部に2山突起が付く。突起部頂部から内面に沈線文、繩文がある。沈線文は突起を巻くモチーフがくずれ、複合鋸歯文状となる。突起部、口縁内面に繩文（RL）が施されて、突帯の上端部に斜線文が刺突されている。ナデ調整。2～6は、頸部が屈曲し、口縁部内側に刺突（孔列文）をもつ深鉢である。2の刺突は鋭く刺され、内面にスジが残る。3は竹管状工具による円形の刺突を、4は円形に近い刺突をもつ。最深部はV字状に鋭くなり、内面にスジが残る。原体は二枚貝かと推定される。5は楕円形の刺突。6は楕円形で、鋭い刺突をもつ。2、3、5は二枚貝条痕で調整してある。7～9は胸部に稜が付く深鉢である。

10～16は砲弾形の深鉢で、口唇部に刻目風の刺突をもつ。10、14は円形、11はD字、13、16は方形の刺突である。10、13～15は二枚貝条痕で調整してある。

### 1区東側遺物包含層出土深鉢・浅鉢（第79図、図版36）

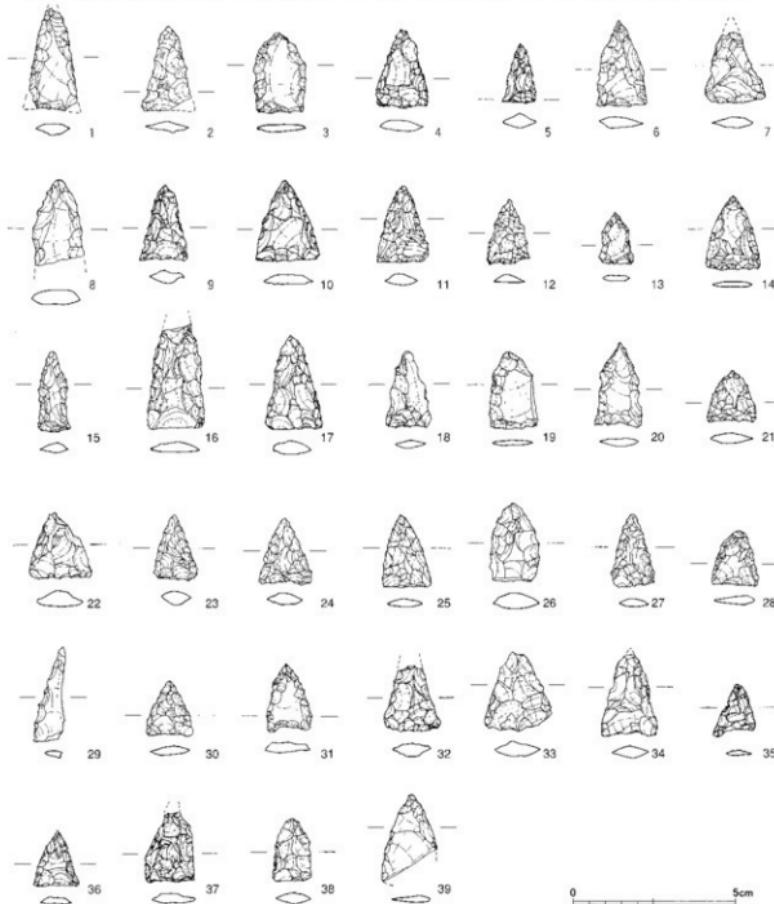
第79図は1区東側遺物包含層出土の深鉢・浅鉢である。1～4は砲弾形で、無文の深鉢である。5～7は突帯をもつ深鉢である。5、7はV字の刻目が施されている。9、10は、胴部屈曲の長頸浅鉢である。9は単純口縁をもつ。

### 1区西側遺物包含層出土有孔円板（第80図、図版36）

第80図は1区東側遺物包含層出土の有孔円板である。土器の破片を使用した円板で、1～5は両面穿孔されている。6は、途中まで孔を開けて終わっている。未製品と考えられる。平均10.5g。

1区西側遺物包含層出土石器（石鏃）（第81図、図版37）

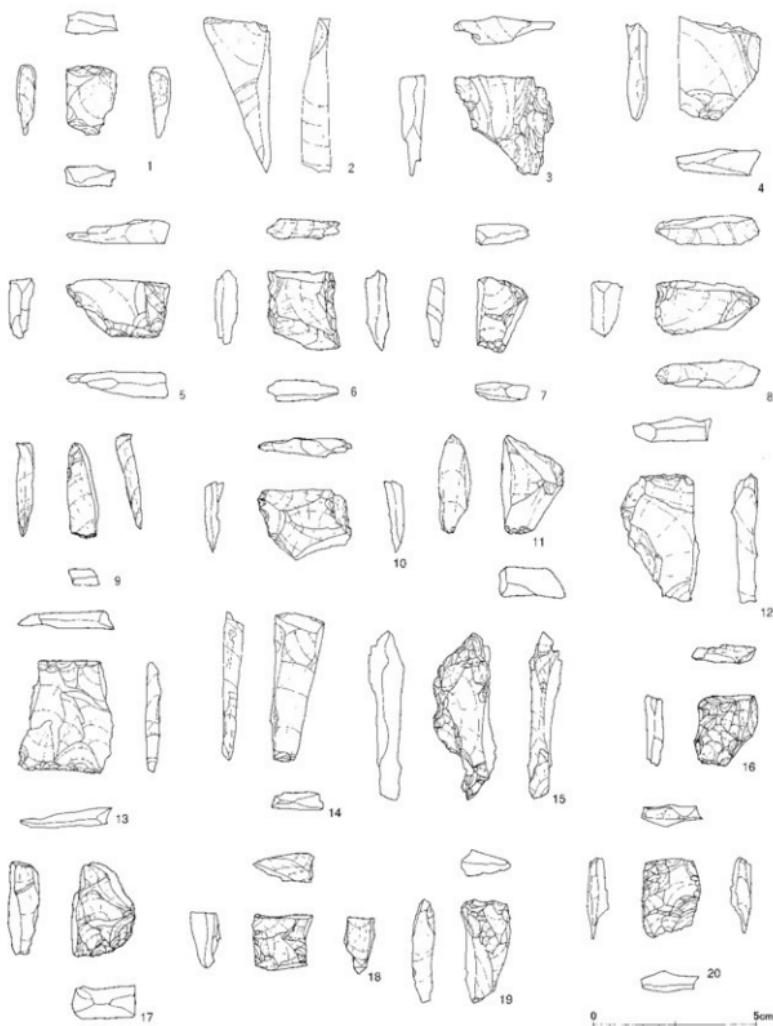
第81図は1区西側出土の石鏃で、図化が可能なものは39個ある。出土地点は第2表のとおりG-6区からJ-5区・6区までの縄文土器の包含層から発見されている。中でも、H-6区から多く出土している。石材は35の黒曜石を除いて総て安山岩である。後述する石器と同じ傾向にあり、この時期の特徴と考えられる。形状については、29が未製品ということもあり、変形しているが、他は平基無茎鏃である。遺跡の年代が限定されており、石材と形状が同じである点が注目される。長さでは、1の3.1cmが長く、13、21の1.6cmが短い。幅は0.9cm～2.0cm、厚さは0.18cm～0.48cmで、断面はレンズ状になる。重量は、先端が欠損しているものの16が重く、軽いものは13の0.42gである。



第81図 原田遺跡1区西側遺物包含層出土石器（石鏃）実測図（2／3）

1区西侧遺物包含層出土石器（楔形石器）（第82・83図、図版37・38）

第82・83図は1区西侧出土の楔形石器で、固化が可能なものは27個ある。出土地点は第12表のとおり石巖と同じ区から出土している。H-6の縄文土器の包含層から多く発見されている。石材は



第82図 原田遺跡1区西侧遺物包含層出土石器（楔形石器）実測図(1) (2 / 3)

總て安山岩である。形状については、台形のものが多いが、第82図2、9、14は細い棒状の形をしている。大きさと重さはまちまちである。大きさでは、長いのは前記の棒状の第82図2であるが、全体に大きく重いのは第83図の6である。長さ4.9cm、幅3.0cmで、重さは20.29g。小さいのは第82図9で、長さ2.8cm、幅1.1cm、重さ1.69gである。なお、加工痕がある面については、形と同様にまちまちであった。

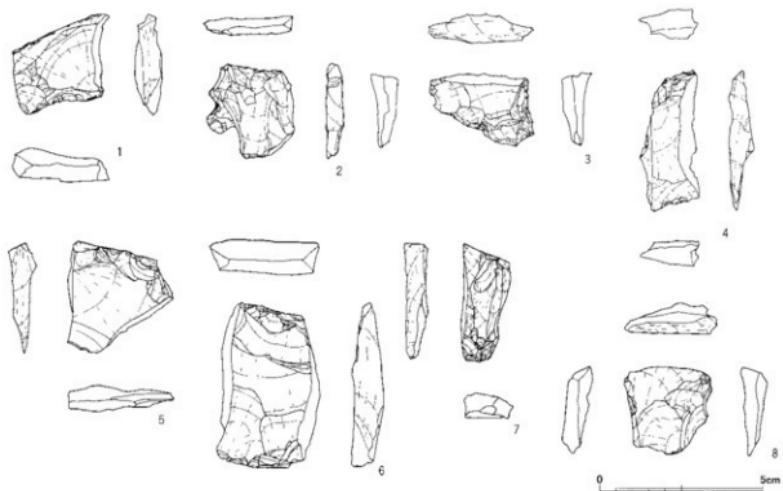
#### 1区西側遺物包含層出土石器（スクレイパー）（第84・85図、図版38・39）

第84・85図には、1区西側出土のスクレイパー12個を載せている。第84図には大形品を中心としている。出土地点は第12表のとおり、石器と同じ区から出土しているが、第85図は、J-6区の縄文土器の包含層から多く発見されている。この石器も安山岩製が多い。第85図2、3、7は黒曜石の製品であり、小さい。大きさはまちまちで、第84図6は長さ7.5cm、幅9.6cmで、重さは91.56gで最大である。小さいのは第85図7で、長さ2.1cm、幅1.1cm、重さ3.00gである。形は横長で、台形のものが多い。黒曜石製の3、7は二次加工されている。なお、剥片も第85図に載せている。

#### 1区西側遺物包含層出土石器（石斧・垂飾・石棒）（第86図、図版39）

第86図1～7は1区西側出土の石斧で、出土地点は第12表のとおりG-6区からJ-5・6区までの縄文土器の包含層から発見されている。なお、8はJ-6区出土の弥生時代の蛤刃石斧である。

1は打製石斧で、刃部のみ研磨されている。長さ、幅も短い。安山岩製。2、4、7は磨製石斧で、塩基性片岩の搬入品である。刃部付近全体が研磨され、刃部先端には敲打痕が残る。3個とも断面精円形で、短い。3は磨製石斧で、流紋岩製である。刃部のみ研磨されている。刃部の破片。5は乳棒状石斧で、刃部は丁寧に研磨され、その他は敲打で成形されている。断面は円形。刃部先端には敲打痕が残る塩基性片岩の搬入品である。6は定角式磨製石斧で、撥形を呈す。長さ



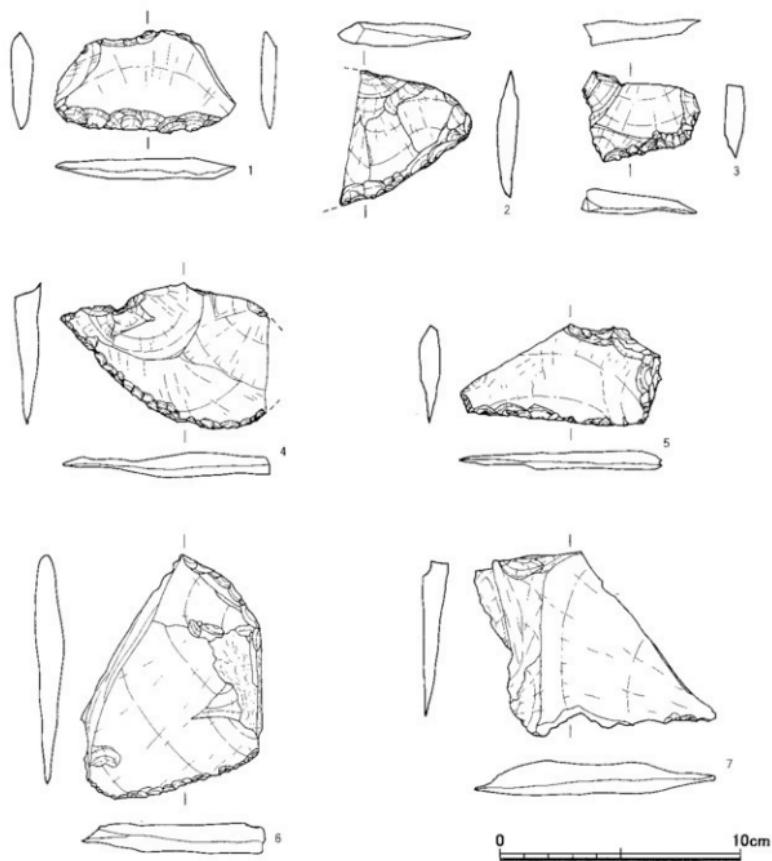
第83図 原田遺跡1区西側遺物包含層出土石器（楔形石器）実測図(2) (2/3)

6.4cm、幅4.1cmの小形品え、蛇紋岩製。刃部を中心に全体が研磨されている。

9は垂飾で、頁岩製である。長さ10.2cm、幅2.3cm、厚さ0.4cmで、細長く、ナイフ形を呈す。重さは15.29g。表面全体が研磨されている。10は石棒の頭部の破片である。頁岩製で、表面は良く研磨されている。

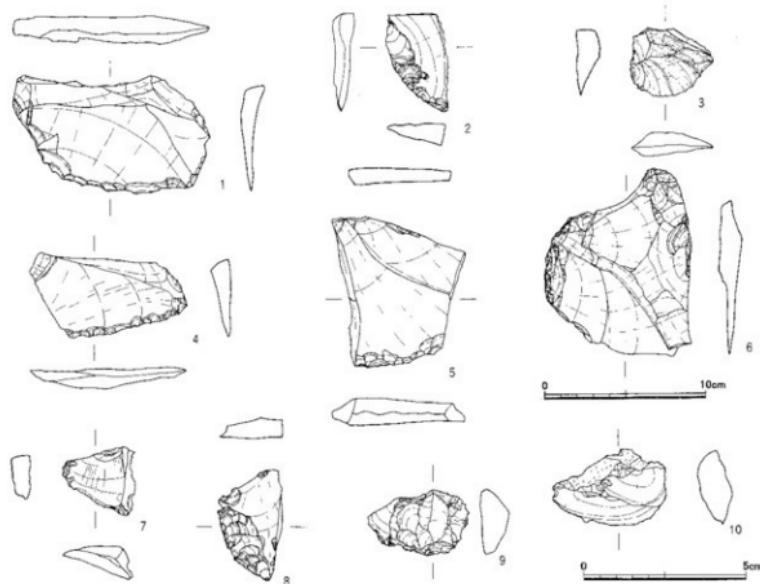
1区西側遺物包含層出土石器（敲石・くぼみ石・擦石・石錐）（第87図、図版39）

1は敲石兼擦石である。流紋岩製で、河原石である。1155 gで、手に握れる大きさである。両端と両面の中央に敲打痕が残る。2はくぼみ石である。流紋岩製で、河原石である。750 g。両面の中央から少しづれた所に、径1.5cmと2cmの敲打による深い穴が残る。3は擦石で、石杵と考



第84図 原田遺跡1区西側遺物包含層出土石器（スクレイバー）実測図（1／2）

えられる。流紋岩製で、河原石である。929 g で、手に握れる大きさである。両面の中央付近を中心にななり擦られている。擦られている所に赤い顔料が残る。4 は敲石兼擦石である。花崗岩閃緑岩製で、河原石である。1058 g で、手に握れる大きさである。片面はかなり擦られ、水平になっている。縁部には敲打痕が残る。5 は中央部に幅 3 cm の深い溝をもつ石錐である。流紋岩製で、河原石を加工している。一部剥離しているが、653 g の重さがある。



第85図 原田遺跡1区西側遺物包含層出土石器  
(スクレイバー、板状の素材、剥片) 実測図 (2/3、6は1/3)

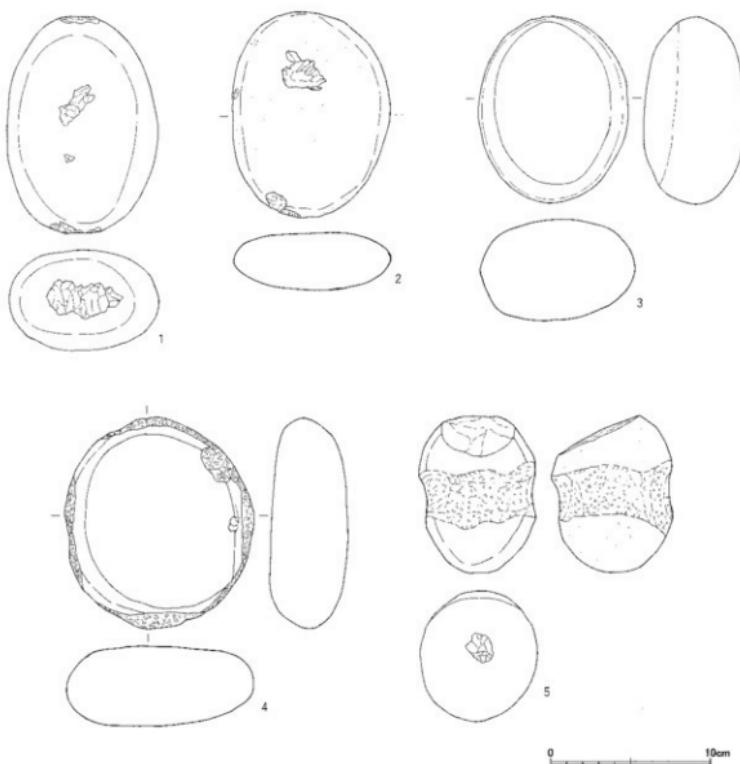


第86図 原田遺跡1区西側遺物包含層出土石器（石斧、垂飾、石棒類）実測図（1／3）

### 第3節 弥生時代の遺物

出土している弥生土器は30点近くで、図化ができるものは第88図のものが縦てである。古墳付近を中心に発見されている。時期は弥生時代中期後半で、III-2様式からIV-1様式のものと推定される（注）。なお、磨製石斧が1個J-6から出土している。（第86図、図版39）

遺構については調査区では検出されなかった。

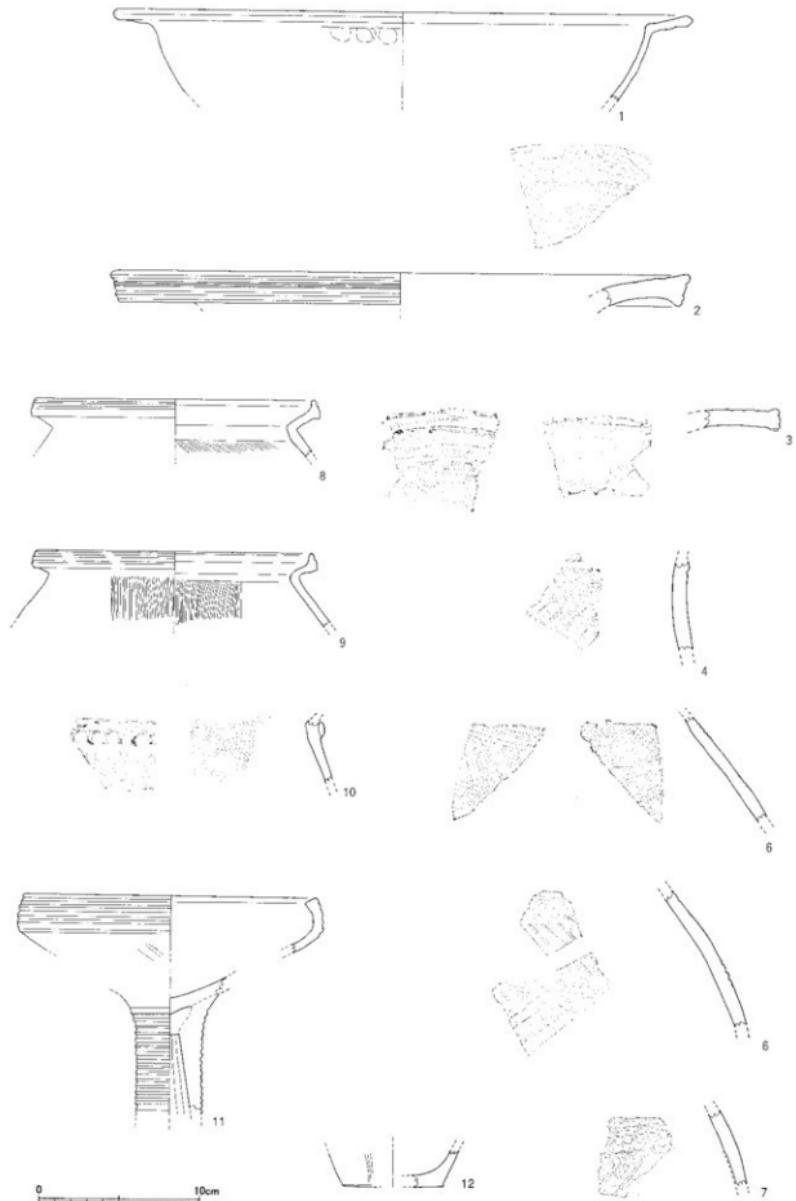


第87図 原田遺跡1区西側遺物包含層出土石器（敲石1・2・4、磨石、石錐）  
実測図（1／3）

#### 1区出土弥生土器（第88図、図版40）

第88図は1区出土の弥生土器である。1は中期後半の高杯の坏部である。2は、1と同じ時期の壺で、口縁部が大きくラッパ状に開く。口縁端部に4条、内側に3条の凹線を施す。3も2と同じ形態であるが、少し小形の破片。口縁端部に2条、内側に3条の凹線を施す。4は頸部の破片。凹線と櫛による刺突文、斜め方向の平行沈線文を施す。5～7は肩部の破片で、同一個体の可能性もある。外面に、櫛による刺突文、斜め方向の平行沈線文、平行沈線文が施されている。8、9は甕の口縁部から肩部の破片で、口縁部外面には二条の凹線がある。肩部は内外面とも、ハケ調整で仕上げている。10も甕の破片で、頸部外面には指頭圧痕文帯をもつ。11は高杯で、口縁部と脚部の上部の破片である。口縁部外面に凹線文を、脚部にヘラによる平行沈線文をめぐらす。12は壺か、甕の底部で、平底となる。

（注）松本岩雄「出雲・岐阜地域」『弥生土器の様式と編年－山陽・山陰編－』木耳社 1992



第88図 原田遺跡1区出土弥生土器実測図 (1 / 3)

## 第4節 原田古墳に伴う遺構と遺物

原田古墳は平成12年度の遺跡範囲確認調査において初めて確認されたもので、それまでは地元でもまったく知られていなかった。確認調査時には、墳丘も横穴式石室もなく、1区の中程のF-7区トレーナーから玉類や須恵器などの副葬品一部が発見され、石材の一部を検出したに過ぎない。

**墳丘** 既に記したように、古くからの水田造成により墳丘は削られ、さらに、1977年（昭和52）の窪直しにより完全に水田下に埋没した。'77年以前には、石材の一部が露出しており、三宝荒神として祀られていたという。元の土地所有者の話では、「77年に行われた水田造成は、まず、横穴式石室に使用されていた大きな石材は東側15mにある比高1.5m低い水田に集め（写真6）、次に、集めた石材の周囲には斜面の切土で覆い、水田の客土下に埋めた」という。よって、斜面の土が多い



写真6 原田古墳の石室に使用された石

ため周囲からはほとんど遺物は発見されなかった。

一方、石室の前方も'77年以前には低い水田となっていた。この田の北には、三宝荒神が祀られた石室の石材があり、その南端裾部には近代に積まれた高さ1mの石垣が東西に存在した（図版11）。この低い水田には、古墳と周囲の土で盛土を行い、北側の古墳がある部分と同じ高さにして、南北15mの大きい田をしている。よって、古墳南側のF-6区の水田下には、石室に使用された大小の石が多く混在した。また、その土の中には玉類や馬具および須恵器などの副葬品が重機で動かされ、元の位置からかなり離れて発見された（第90図）。

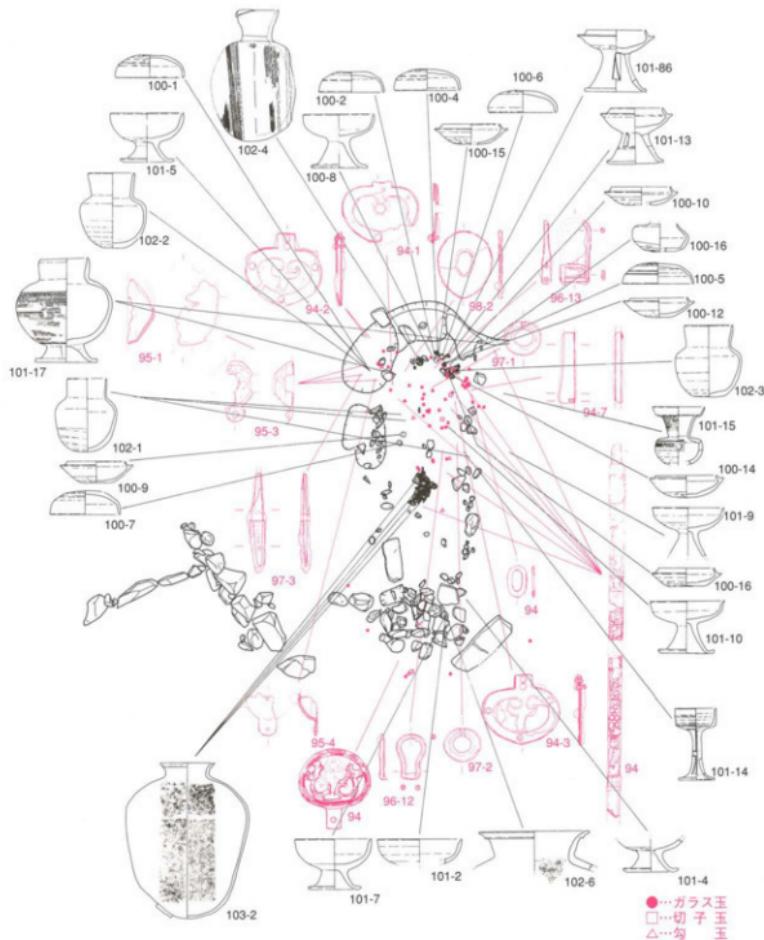
墳形は、墳丘がほとんど残っていない、調査で明確にすることはできなかった。また、石室北側の山裾では鋸状の加工跡も残されなかった。古墳の大きさは渢道部の位置と石室の奥壁の北側の山の斜面の存在により、南北は10mを越えることはない。よって、奥行き推定10m程の古墳となる。墳形は不明。但し、南北については全く痕跡が残っていない。なお、石室の東側は古墳の基底部以下まで削りとられ、低い水田になっていたと推定される。

第89図の南北セクション図のように、石室の奥壁があったところは、重機で壁石が抜かれ、大

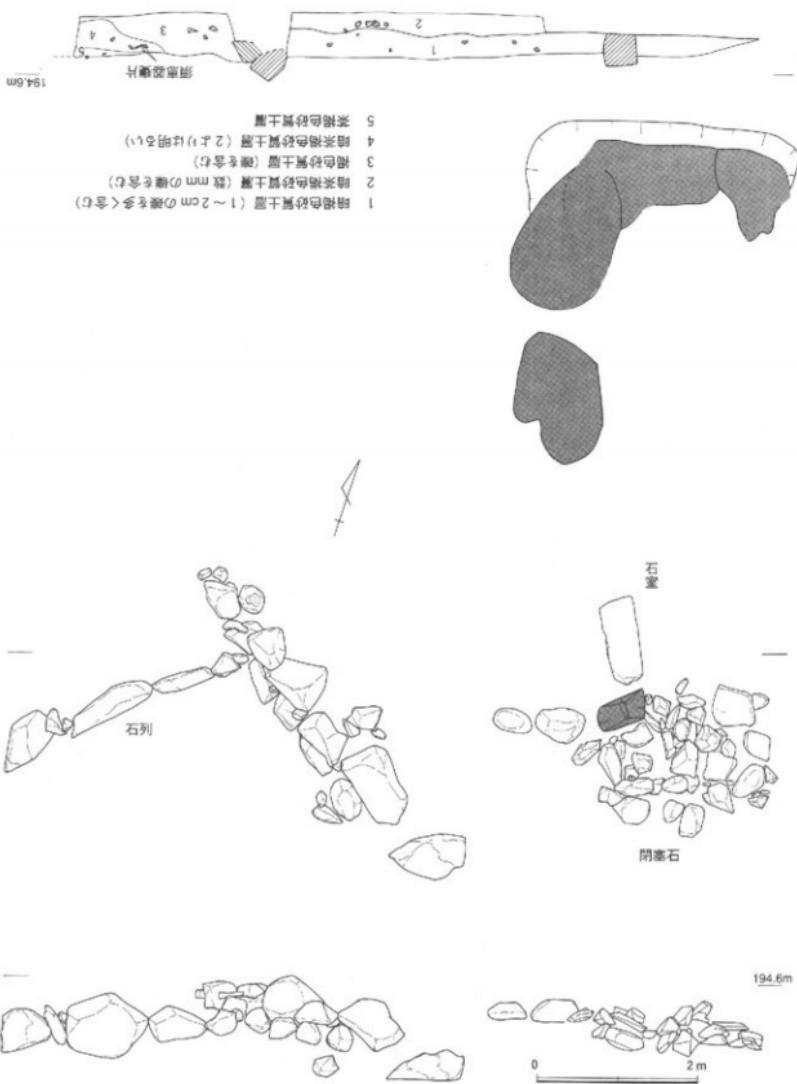


第89図 原田古墳石室実測図 (1 / 60、アミは抜き取り跡)

きな抜き取り跡が認められた。その抜き取り跡周辺の土層は暗茶褐色の小礫混じりの砂質土である。この土層は、山際では斜めに立ち上がる。さらに、地山の岩盤との間には、幅50cm程に、茶褐色砂層と明茶褐色砂層とが互層状に堆積した土層が存在する。茶褐色砂層は1cm前後と薄く、16層確認された。この層は東側F-8区の斜面にも存在する。この堆積は人の手により成るものではなく、自然にできたものと考えられる（中村唯史氏の教示による）。しかし、どのような条件ができるかは不明である。なお、この堆積層からは、土器などの遺物は全く出土していない。



第90図 原田遺跡1区原田古墳出土遺物位置図（1／120）



第91図 原田古墳墳丘・石室実測図 (1 / 60、アミは抜き取り跡)

石室の西側には、茶褐色の山石混じり砂質土層が厚く堆積し、上層では縄文土器深鉢の破片が混じっていた。造成等で二次堆積した土は存在しなかった。石室の南から西側にかけては、1ないし2段に積まれた石垣状の石列が4m並ぶ。石は川石で、大きいもので、1m×0.6mある。少し弧状になる。これらの石が古墳築造時に並べられたか、後の時期に墳丘に沿って置かれたかを明確にすることはできなかった。なお、この石と石室との間には暗褐色砂質土層がある。この層は石室までの間に存在するので、盛土の一番下の土層に成る可能性は高い。

さらに、東南に3m直線の石列が存在する。こちらは板状の石が数個立て並べられている。大きい石は1.2m×0.35mである。この石列の性格と並べられた時期は分からぬ。なお、石列の上面からは古墳時代後期から奈良時代の須恵器や土師器の破片が出土している。

**横穴式石室** 基底部は標高193.5mであり、河岸段丘の黒ボク層上に築かれていた。既に記したように、石室も墳丘と同じく幾度かの水田造成ではとんどの石材を欠く。現位置に残っていた石は、漢道部西側にある長さ1.1m、高さ0.4mの長方体の石と漢道部の前方を塞いでいた閉塞用の石がある。また、その南側には縦62cm、横34cm、深さ35cmの穴が残っていた。この穴には漢道の入口の石を据えるためのものと推定される。この穴の西には長さ60cm・高さ28cmと長さ48cm・高さ22cmの2個の川石が並ぶ。これらは石室入口付近に置かれた石列の一部と考えられる。同様の石列をもつ古墳は横田町の白石追古墳が挙げられる。

漢道部の閉塞石は川石で、大きさは人頭大である(第91図)。漢道部付近には第89図に見るよう、重機で少し元位置を動いた石が数個存在する。總て、基底部に存在した石である。よって、2段目以上に積まれた石は總て失われている。なお、石室内は上のみで、内部は茶褐色土層で、固く締まっていた。

玄室には、壁を構成する石材は全く残っていない。平面プランは副葬品の出土状況と漢道部および側壁の基底部に置いたと推定される小石群の配列より想定するのみである(第89・90図)。抜き取り跡をみると、西壁は2個以上の石で構成され、奥壁は両側壁で挟まれた可能性が高い。なお、奥出雲地方に分布する奥に長い横穴式石室は、奥壁が総て両側壁で挟まれたタイプである。袖石については、石材が残っていないので、存在したかどうかは判断できない。東壁は副葬品の位置や小石群の配列、さらに、奥側隅の抜き取り跡より第89図の平面図東側の石列とほぼ重なると推定される。

横穴式石室の規模は奥壁の抜き取り跡と漢道部入口の位置より、奥行き約6m50cmである。玄室は奥行き3m前後、幅は奥壁付近で推定2m前後、漢道部は奥行き3m50cm前後、入口の幅1m以上と考えられる。石室の開口方向はほぼ南向きで、S-15°-Eをとる。

**遺物** 遺物には、古墳の副葬品と古墳周辺の古墳時代後期と奈良時代の土器がある。奈良時代については、1区西側の掘立建物跡などに伴うものも混じっている可能性もあるが、取り敢えずここで記載しておく。

古墳の副葬品については、既に記したように水田造成時に石材の移動と重機掘削により大部分が壊され、かつ、第90図から分かるように元位置から移動したものも多い。副葬品の中で、元位置が推定できるものがいくつか存在する。須恵器では、壺(第103図2)が漢道部と玄室の境に置かれていた。胴部から底部にかけて完全な形で残っていた。漢道部では、この他には副葬品は置かれていません。玄室の中では、第90図で分かるように、壺の奥1m程の所に、蓋壺の身と蓋が2個伏

せて置かれていた。また、奥壁付近で、左右2カ所に須恵器が集中して発見された。金銅装大刀の破片はかなり広い範囲から出土している。細長いためバラバラになり易かったからであろう。馬具の内、鏡板や杏葉は形が分かる程度の大きさで発見されたが、雲珠などは足がバラバラとなって散在していた。これらの金属製品と玉類は、その多くは玄室およびその付近から発見されており、元々は玄室の何カ所かにまとめて置かれていたものであろう。(西尾克己)

副葬品には、金属製品、玉類、須恵器がある。以下、個別に概要を記述する。

### 武器

装飾付大刀1振、鉄製鐔1点、鉄刀身1点以上、鉄鎌2点以上がみられる。

#### (1) 装飾付大刀

環頭柄頭1点・鐔1点・刀身片3点が見られる。これらのうち茎部を持つ刀身片は幅などから、現状では遊離している鐔と組み合うと考えられるが、それ以外の刀身片同士は接合面を持たずに折損している。また、柄頭と刀身片の間にも接点は見られない。しかしながら、後述するようにこれら刀身片は鞘間節板に施された文様、あるいは刀身断面の相似性から本来1本の大刀であったと思われる。したがって、実測図では3点の刀身片を1振の大刀となるように配置した。また、柄頭に関しては、ほかに組み合う刀身が見られないためこれに付属するものであったとすると、これら5点は本来組み合わさって1振の環頭大刀をなしていたものと考えられる。以下の記述ではこの想定に基づいて、環頭大刀を構成する各部位ごとに解説を加えてゆく。

**柄頭(第92図)** 環の内部に向かい合う1対の龍を表現した双龍環頭柄頭と推測される。金銅製で所々に鍛金が遺存する。

環本体は平面形がおむすび形に近い梢円形で、下方に柄と結合するための目釘孔が穿たれた茎を持つ。環本体の断面形は隅丸方形だが、環の内側が平坦であるのに対して、外側は若干丸みを帯びている。茎から環にかけては柄の木質が僅かに遺存しており、環と茎が接する箇所には木質の終端が確認できる。その位置は茎下端から環側に向かって2.9cmであり、ここまで柄の中に入っていたことがわかる。大きさは環外側の長径8.8cm、短径7.2cm、環内側の長径7.4cm、短径5.6cm、断面の刃長0.8cm、茎部長2.5cm、茎下端幅1.9cm、茎下端厚0.2cm、目釘孔径0.8cmを測る。環本体外面には文様が施されており、一番内側には表裏ともに0.5cmあたり8~10個の刻み目が、その外側には数条の溝が彫りこまれている。刻み目の縱幅は約0.1cmで、溝の幅約0.2cm、深さ約0.1cmである。刻み目・溝ともに現状では鋳化のため半分程度しか見られないが、本来全周していたものと推測される。これら欠損部分を遺存部分より推定復元して、内側の刻み目が外側にくるよう展開したのが第92図の環体展開模式図である。以下ではこの図を参照しながら環本体の特徴を述べる。刻み目の内側に施された溝の構成は、外側に2条全周する溝を配し、その内側に互い違いになった1条の溝と、その溝が片側に寄ったときにできる空間を埋める、途切れた短い3条の溝を施している。内側の溝は茎のある左右両端(環の下側)で途切れているが、途切れている部分から茎までは内側の溝がみられない空間が約2cm存在し、目立たない部分に対する手間の省略が窺われる。溝の配置は上下対称とはなっておらず、中心が若干展開図の下方にずれている。その結果、左下端は溝が平行したまま終わっているのに対して、上方では内側の溝が全周する外側の溝に接して終わっている。環本体の製作技法は、X線ラジオグラフィーの観察でも接合部が観察できないことから铸造によるものと考えられる。また茎は、境目付近の外面に撫付時によく見られる肉盛り状の凹凸が

認められ、その部分のケイ光X線分析で錫が高い強度で検出されていることから、別に鋳造したものと錫を用いた繄付によって接合している可能性が高い。

環本体内部の双龍文は、平坦面に列点文を施して、端部に丸く面取りを施した板状のつくりとなっている。厚さは茎を下にして置いた時に下方よりも上方が若干薄くなっている。双龍文の下端が環本体と接するところで厚さ0.5cm、遺存している部分の中で最も上端にあたる冠毛が環と接するところで厚さ0.3cmとなる。遺存状態は悪く、中心部で玉を争う口先部分は全て欠損しており不明であるが、実測図上では残存部より推定復元をおこなった。2匹の龍は、尾先と頭毛を欠損する側の龍が、もう一方の龍よりも尾幅を細く冠毛を太く作られており、左右対称にはなっていない。冠毛・角の合計は2本で下顎と尾が接している。尾には中心に向かってとび出た羽毛の表現が見られ、本例の龍文における最大の特徴となっている。列点文は直径約0.05cmほどの刻点より構成されており、1cmあたり5~10個施されている。刻点同士が切りあうほど密に施され、あたかも線のように見えるところと、刻点同士の間隔が広く粗いところが混在しているため、単位あたりの数にはこれだけ開きが見られるが、どれも線を志向している。文様の構成は、龍文の板端にそって縁取りした内側に、胴体部分では波状文を施している。目の部分は明確に作り出されておらず、目と思われる位置を中心として渦巻きが表現されている。冠毛と角にも縁取りの中に、胴体とは異なる表現がなされているようであるが、遺存状態が悪く、詳細は不明である。尾の部分は、幅が細いためか、縁取りのみで内部の表現はされていない。製作技法はX線ラジオグラフィーの観察より、鋳造によるものと判断できる。

環本体には、破損面を見ても文様板結合のための溝等は確認できない。また、文様板と環が接合する部分でケイ光X線による分析を行ったところ、その部分のみ高い強度の錫が検出された。従ってホゾ組みをせずに、錫を用いた繄付により組み立てたものと考えられる。

構造・文様構成に一部独特な要素を含むが、冠毛・角の数が1匹につき3本であること、茎が短いものとなっていること、鋳造で製作されていることなどから新納泉による分類（新納1987）のⅣ式の範疇におさまるであろう。

**柄** 柄を構成していたと考えられる破片は見つけることができず、その詳細は不明である。

**鐸** 鞘口から鐸外形が若干外側に出る喰出鐸である。金銅製で表面には所々に鍍金が遺存する。内側には柄の木質が直交する方向に付着しているのが観察される。平面形は倒卵形に近い楕円形で片方が一方に比べて若干尖っており、こちら側が刃部になるよう装着されていたと推定される。外側の長径4.2cm、短径2.6cm、内側の長径2.9cm、短径1.4cmとなる。断面形は内側に比べて外側が若干薄くなる継長台形で内側厚0.25cm、外側厚0.2cmである。X線ラジオグラフィーの観察を通しても板を重ね合わせたような痕跡は確認できず、製作は鑿で銅板を斬り出すことにより行われたと考えられる。

**鉢** 鞘口金具が破損した部分より、内部に金銅製の綱が観察できる。破損した個所の切先側には刀身に直交する金銅板がみられ、茎を差し込む窓の開いた型式であることが分かる。長さ3.4cm、横幅3.1cm、縦幅約1.5cmである。

**鞘** 鞘口、鞘間、鞘尻の3箇所に筒状の金銅製金具と金銅製責金具を装着し、それぞれの金具の間に列点文を施した鞘巻と円形文を打ち出した伏板で飾っている。断面形は幅の広い横長八角形で外面にはゆるい稜を持つ。遺存状態は2箇所で折損しており、鞘間金具切先よりの責金具（一の責）

と鞘尻端を欠くが、その他の部材は、欠損部分が多いながらもそろっている。

鞘口金具は佩裏側を全て欠損している。横幅3.4cm、縦幅約1.7cmで、鍔の茎寄りの端まで鞘口が及んでいたと推測すると長さ約8.5cmとなる。鞘口金具の切先寄りの端には、貴金具の痕跡と思われる銅片がみられるが、刃部側に僅かに遺存するのみで足金具であるのかは判断できない。

鞘間金具は切先よりの端を全て欠損している。横幅3.2cm、縦幅1.7cmである。現状では長さを特定できないが、残存長10.5cmを測る。茎寄りの端には貴金具の破片が付着するが、ここも鞘口金具の貴金具と同様棟側を欠くため、足金具となっていたかについては判断できない。

鞘尻金具は、半ばより鞘尻側を欠損する。横幅2.9cm、縦幅1.6cm、残存長5.9cmとなる。長さについては不明である。折損している以外、遺存状態は良好で、貴金具も完存している。貴金具は長径3.1cm、短径1.9cmで断面形は扁平な蒲鉾形となる。

足間飾板は鞘口金具よりの位置で折損し、貴間飾板は鞘間金具と接する部分を欠損している。伏板は金銅製で、幅約2.7cmで、細長い板の両長端を幅0.3cm程度折り曲げている。佩表側の平坦面には直径約1cmの円形文を高さ0.5cm程度打ち出している。円形文の立上り部には連続した点文を打ち込み、文様の盛り上がりを区画している。点文はさらにその外側にもめぐっているが、こちらは円形文の周囲を全局はせず、隣り合う2列の円形文を1セットにして「8」字状になっている。円形文の中心間距離は、縦方向に約1.5cm、横方向に約1.0cmである。伏板の固定には金銅製の釘をもちいており、円形文3段毎に左右各1箇所の釘を、刀身を避けるように斜めに打ち込んでいる。釘頭径は0.2cm、釘脚長はX線ラジオグラフィーの観察からの復元で約0.7cmとなる。

鞘巻は金銅板に列点文を施して製作されている。遺存状態は良好ではなく、金の剥がれた箇所が多く見られるが、金銅で作られた場合に通常観察される縁青の付着が一切見られなかった。しかしながら、ケイ光X線分析によると銅が高い強度で検出されたため、金銅板であることは確実である。ただし、その他の部材に比べて非常に薄い板を使用していた可能性が高い。列点文により構成される文様は伏板に隠れる佩表側上面を除いた7面に施されており、それぞれが独立した文様構成となっている。佩裏側上面を除いた施文面積の狭い6面は独立しつつも同じ文様構成をとり、崩れた藤手文が施されている。文様の進行方向も全て同じ向きで、佩裏から見たときに左右対称とはならない。佩裏側上面はほかの面と異なり、同じ文様の繰り返しではない。ただし、遺存状態が悪く一部の良好に遺存する箇所では、弧文同士が切りあう様子が観察できるものの本来のような構成であったのかは不明である。

刀身は破断面の観察より平造の直刀であることがわかる。またX線ラジオグラフィーの観察より、両闇で、茎幅が茎端に向けてならかに狹まることと、カマス切先であることが推定される。闇部幅3.2cm、切先幅2.7cm、棟幅0.8cm、闇下茎幅2.9cmとなる。なお、全長は現状で77.0cm以上となる。

次に本書実測図における刀身および鞘の全長について述べる。まず鞘間金具は最低でも鞘口金具の1.2倍の長さとなるが、この1.2倍という値は京都府湯舟坂2号墳（久美浜町教育委員会1983）出土の双龍環頭大刀とはほぼ同じとなる。ただし岡山県大谷1号墳（北房町教育委員会1998）例をみると、ここでは鞘口金具の約1.7倍にも及ぶ。したがって現在遺存している状態よりも、ある程度長くなることは十分考えられる。本例の実測図においては刀身断面幅、破断面の観察から鞘尻側の破片はある程度間隔があったことを想定し、鞘口金具の1.5倍となるように復元した。次に足

間および責間の長さであるが、円形文と伏板を固定する釘が比較的等間隔に配置されていることから、推定することが可能である。まず、足間には残存部分に等間隔で円形文が並ぶことを想定した場合、11以上となる。これを他の出土例と比較すると、11段以上並ぶのは千葉県金鎌塚古墳出土・双龍環頭大刀（千葉県教育委員会1951）の11.5段等数例に止まり、島根県かわらけ谷横穴出土双龍環頭大刀（島根県埋蔵文化財調査センター2001）の8段など、6から8段の範囲に収まる例が多い。従って、本例でもこれより大幅に増える可能性は少ないと考えられる。また、伏板を固定する釘が3段間隔で打たれているが、鞆間金具よりで1段余っている。伏板固定の釘に規則性のあるものはあまり見られないようだが、ここで再びかわらけ谷横穴例を見てみると、ここでは鞆口側から等間隔に施してゆき、鞆尻側で2段余らせている。従って、本例がかわらけ谷横穴と同様の製作手順であったとするならば、1プラス3の倍数で13段であることが想定される。しかしながら、かわらけ谷横穴例では責間の鞆尻よりの円形文が半分つぶれているように、円形文の割付がなかったように見受けられる。それに対して本例では、足間・責間とも一番鞆尻側の円形文の金具からの距離がほぼ等しく、ある程度の割付が想定される。また13段と仮定した場合、異例の多さであるばかりか、この量にバランスをとりながら責間の長さを決めた場合、長くなりすぎると思われる。従って、本例は、鞆口側・鞆間側ともに1段ずつ余らせた11段を想定して復元をおこなった。責間に關しても足間と同様な類推を行い、残存部分最低数が18段となるため、足間と同様に鞆口側（一番鞆間金具より）を1段あまらせたと考え、鞆尻側の余り2段とあわせて1プラス2プラス3の倍数で最低数の18段を想定した。

以上の復元によると、鞘は最低でも76.7cm以上、刀身は80.7cm以上と考えられる。

#### (2) 鉄刀（第98図-1）

鉄刀身の破片が5点みられる。

いずれも銹化が進行しており、表面に有機質等の痕跡もみとめられない。破断面の観察より棟幅0.4cm、刃幅2.5cm程度と近接していることから同一個体である可能性が高い。

#### (3) 鉄製鐸（第98図-2）

1点みられる。無窓でX線ラジオグラフィーの観察によると象嵌はみられない。平面形は倒卵形で断面は内側が薄い長台形となる。現状で外側長径9.2cm、短径7.4cm、内側の長径3.3cm、短径2.0cm、外側の厚さ0.4cm、内側の厚さ0.2cmとなる。内側の端部には鍼の痕跡と思われる鈎のラインが観察でき、長径3.9cm、短径2.6cmとなる。先述の鉄刀身片との関係は不明である。

#### (4) 鉄鎌

いずれも破片で、12点みとめられる。茎部あるいは頸部の破片のみで、身部が遺存するものは存在しないため、長頭鎌であること以外は不明である。個体数の復元も難しく、頸部闊を持つ破片が2点あることから、2個体以上であったことが窺えるのみである。

(第97図-6)・(第97図-10)は頸部から茎部にかけての破片である。第97図-6は頸部闊が棘状闊であるのに対して、第97図-10は台形闊となっている。法量的には類似しており、双方ともに頸部幅約0.5cm、頸部闊幅約0.8cmとなる。茎の上には、矢柄とその上に巻かれた樹皮の痕跡が遺存している。第97図-11～15は茎部の破片である。いずれも、上下端が欠損しており、法量に関する情報は得ることができない。矢柄の痕跡と思われる有機質が遺存しており、その観察によると、茎部直上に横方向の纖維を巻き付け、その上から矢柄材をあてて最後に樹皮を横方向に巻いて

仕上げている。特に、良好に遺存する第97図-11では、矢柄の破面から箭竹の接合面が確認できるが、この接合面は片側にしか見られず、箭竹の一方にのみ切込みを入れることにより、樹皮巻で固定するだけではなく、箭竹自身でもかしめている構造が推定できる。第97図-7~9は頸部の破片と考えられる。幅・厚さ等法量は先述の頸部から茎部の破片と同様である。(藤井章徳)

## 馬具

### (1) 唐・杏葉

第94図-1は、鉄地金銅装の心葉形の鏡板である。裏面に銘などの痕跡はないが、中央に径1.2cm程度の孔が穿たれていることから、杏葉ではなく、鏡板と考えるのが適当であろう。横幅は9.4cm、立闇をのぞいた部分の残存縦幅は6.9cmを測る。鉄地板の厚さは0.3cmとやや厚く、鉄製の縁金具は厚さ0.1cmである。後述する杏葉(第94図-2・3)においても同様であるが、鉄地板の上に金銅板を被せた鉄製縁金具を重ねており、金銅板の端は縁金具の下に挟みこんでいると考えられる。また、径0.8~0.9cmの鉄地金銅装の鉢を上下左右4ヶ所に打っている。地板と縁金具は法量が合っていないためか、最大0.2cm程度のずれが見られる。縁金具は中央部が欠損しているが、残存している形状から、杏葉と同じ三葉文になると推定される。裏面には革と考えられる有機質が全面に付着しており、鉄脚はこの有機質の上からかしめられたと考えられる。鉄脚は、鉄板2枚と有機質の厚みを貫通しなければならないため、0.9cmと長い。かしめの痕跡は径0.5cmである。

立闇は、大部分が欠損しているが、わずかに立闇孔の一辺が残存しており、釣金具と連結していたことが分かる。立闇の幅は2.4cmを測る。

鏡板と銘の連結方法については、銘がほとんど残らないため推測の域を出ないが、中央の孔の縁にテーパー状の加工がなされていることが注目される。奈良県牧野古墳の三葉文心葉形鏡板(広陵町教育委員会1987)など、銘先環端部につくりだされた突起を鏡板の裏面(鉄地板)に穿たれた小孔にかしめることによって、銘を直接鏡板に連結し、その上に、平板な上板(縁金具)をのせた例がしばしば見られる。本例もそのような連結方法をとっていたと考えられ、先述の孔に施されたテーパー状の加工は、かしめた銘先環が容易に抜け落ちないようにするためにものであろう。孔は半分ほど塞がれており、銘先環の突起の痕跡と考えられる。この孔の上にちょうど三葉文の縁金具が重なることから、突起は表面に突出するものではなかったと考えられる。

第96図-10は釣金具の一部であり、第94図-1の鏡板とセットとなる可能性がある。幅2.0cm、厚さ0.2cmの鉄板に金銅板を張り、金銅板の端は裏に折り曲げている。下端に舌状の突起が付けられており、屈曲して鉤部分をなしている。鉢は脚が1ヶ所残るのみであるが、鉢位置から考えて釣金具の中央に1列打つタイプのようである。

第94図-7・6は引手の一部である。第94図-7は環の付け根で軽く屈曲しており、ぐの字状引手の引手壺と考えられる。一方の第94図-6は直柄であり、銘の可能性もある。X線ラジオグラフィーの観察によると、ともに、鉄の棒の先を環状に曲げ、その環の付け根部分に重ねて接合した痕跡がみられる。

第94図-6では、接合部がやや膨らんでいる様子が肉眼でも観察できる。断面は、第94図-7が幅0.6cmの隅丸方形、第94図-6は径0.8cmの円形を呈する。第94図-2・3は、鉄地金銅装の三葉文心葉形杏葉である。横幅は9.4cm、立闇を除いた部分の残存縦幅は6.8cmを測り、鏡板とはほぼ等しい法量である。鉄地板の厚さは0.2cm、鉄製の縁金具は厚さ0.1cmである。鉢の配置は鏡板

とは異なり、径0.8cmの鉄地金銅装の簇を下部と左右に3ヶ所に打つ。地板と縁金具は法量が合っていないためか、最大0.2cm程度のずれが見られる。立聞部に関してはともに完存しており、幅2.2cm、長さ1.5cm~1.8cmを測る。釣金具を用いず、革帶に簇で直接留める方法をとっており、第94図-3では、立聞の部分から杏葉上部にかけて帯状に革と考えられる有機質の付着が認められる。ただし、第94図-2では鏡板と同様に全面に付着していたようであり、革と考えられる有機質の性格としては、革帶以外のものも考えられるようである。

他に、鏡板か杏葉か、不明なものとして第94図-4・5がある。ともに、縁金具を含む部分であり、鉄地金銅装で鉄地板の厚さは0.2cm、鉄製の縁金具は厚さ0.1cmである。地板の厚さから考えると、厚手の地板を用いる第94図-1の鏡板より第94図-2・3の杏葉に近く、杏葉片であるのかかもしれない。

本例の杏葉と鏡板には同じ意匠が用いられ、鏡板の連結部が突出しないように加工されていることから、これらは同じ外観を志向していたことが分かる。輪郭線等の形態にも、鏡板と杏葉はともに左右対称ではなく、右側よりも左側が張り出す特徴を持っていること、また、縁金具の内側のラインも一致する部分が多いことなどから、同一の型を共有するようである。桃崎祐輔はこうした例を「ともづくり」と呼んでおり（桃崎2002）、6世紀末から7世紀初めに開始される、工程の簡略化に連関する方法であると指摘する。本例もこうした「ともづくり」で作られた鏡板・杏葉の一つと考えられる。また、立聞の連結方法として簇で革帶に直接留める方法は釣金具を用いる方法より後出すると考えられており、同一セット内の鏡板・杏葉では共通させることが多い。しかし、本例のように新旧の方法を併用する例も見られ、類例としては福岡県竹原古墳出土花形鏡板・杏葉（若宮町教育委員会1982）が挙げられる。小野山節はこうした例について、杏葉に比べて鏡板に古い型式の要素を残すことから、鏡板を熟練工が作り、杏葉を経験の浅い人が作るといった製作分担の可能性を指摘している（小野山1990）。

### (2) 鞍金具

第96図-12は鞍金具である。刺金を持たず、輪金と共に巻き付けた脚の一部が残る。輪金は径0.4~0.45cmの鉄の棒で作られ、左右への張り出しあは弱く、中央部で緩やかに屈曲する。輪金長5.3cm、最大幅3.5cm、基部幅2.2cmである。巻き付けた脚は、幅1.3cm、厚さは0.15cmである。この部分には革と考えられる有機質も付着しており、この下に存在すると考えられる輪金の接合面については、X線ラジオグラフィーにおいても判別できなかった。

第96図-14は銅無垢、もしくは金銅製の金具の小片である。

### (3) 鉗具・留め金具

第96図-13は鉗具である。綫長の輪金に「T」字状の刺金と脚を取り付けるための軸を付けたものであるが、輪金および刺金の半分以上が欠損している。刺金と軸はいずれも先端を輪金の外側に突き出し、それを打ち付けることで固定している。輪金の長さは7.7cm、残存する最大幅は3.4cmを測る。輪金の断面形は頂部においては径0.4~0.5cmの隅丸方形をなすが、基部に至って薄く延ばされ、幅0.35cm、厚さ1.0cmの長方形を呈する。

第96図-11は留め金具である。革帶を介して、雲珠や杏葉の釣金具に連結するものであり、鉗具状金具と長方形板からなる。長方形板には舌状の突起が付いており、それを鉗具状金具に巻き付けている。長方形板は長さ2.9cm、幅2.1cm、厚さ0.15cmで、鉗具状金具の幅は2.7cmを測る。また、

長方形板の下端に径0.75cmの鉢が2個打たれているが、ケイ光X線分析の結果、鉄からは鉄・金・銅が検出され、鉄地金銅装と考えられる。長方形板自体の材質は分からなかった。裏側は全体的に革と考えられる有機質が付着しており、鉢脚はこの上からかしめられたようである。鉄製の鉢具状金具製作時の接合については、長方形板が巻き付けられている軸の図上左端においてなされたと考えられる。(田中由理)

#### (4) 雲珠・辻金具

破片が14点出土しているが、全て鉢部と脚部は一体造りで、鉄地板に金銅板を折り返して留める、いわゆる鉄地金銅装のものである。頂部中央に宝珠飾、脚部中央付近に円頭の鉢一つを打っている。遺存状態が悪く、宝珠飾や鉢にも金銅板が張られていたかは不明である。完形のものは1点もないが、鉢部の遺存状況から、大型で頂部に平坦面をもつ第95図-1が雲珠と考えられ、小型で頂部に平坦面をもたない第95図-3・4・6が辻金具と考えられる。すなわち1点の雲珠と3点の辻金具が尻繁を構成していたことになるが、これは杏葉の数や遺存する脚部の数とも矛盾しない。

第95図-1は脚部が欠失しているものの、復元される鉢部の直径が9.7cmと他に比べ極めて大きいことから先述のとおり雲珠と考えられる。鉢部の高さは3.3cmを測り、扁平な半球状をした形状である。下半部側面で稜をなしている。頂部は中央に向かって僅かにくぼむ平坦面をなし、頂部中央には第95図-6に見られるような宝珠飾の存在が想定される。頂部平坦面の復元径は2.6cmにも及ぶため、座金具の付属した可能性が高い。厚さは0.2~0.35cmである。

第95図-2は小片であり、全形を知りえないが、想定される鉢部の直径は比較的大きく、雲珠の脚部である可能性が高い。鉢部はほとんど残っていないが、下半部側面で稜をなしている。脚部は長さ1.7cm、幅2.3cmで、中央に直径0.9cm、高さ0.35cmの扁平な半球状をした形状の鉢を打っている。脚部先端は他のものが丸みをもつに対し、明瞭に角をなすことが特徴である。厚さは0.2~0.25cmである。

第95図-3は辻金具の一部である。復元される鉢部の直径は5.5cmで、高さは不明であるが、頂部平坦面をもたない半球状をした形状を呈すると考えられる。下半部側面で稜をなしている。脚部は1箇所のみ残存しており、長さ1.9cm、幅1.8cmで、脚部先端は丸みをもつ。中央に直径0.8cm、高さ0.3cmの扁平な半球状をした形状の鉢を打っている。金銅装の範囲は脚部の端面にまで及んでおり、金銅板を折り返して留めていることがわかる。厚さは0.2cmである。

第95図-4は辻金具の一部である。鉢部はほとんど残っていないが、復元される鉢部の直径は6cmを測る。鉢部の高さは2.3cmで、中央には宝珠飾の痕跡が認められる。下半部側面でやや弱い稜をなしている。脚部は1箇所のみ残存しており、長さ1.9cm、幅2.2cmで、脚部先端は丸みをもつ。中央やや先端よりのところに鉢の痕跡が認められる。鉄地金銅装の範囲は脚部の端面にまで及んでおり、金銅板を折り返して留めていることがわかる。厚さは0.2~0.3cmである。

第95図-6は鉢部の頂部で、頂部平坦面をもたない半球状をした形状を呈することから先述のとおり、辻金具である可能性が高い。幅1.2cm、高さ0.9cmの宝珠飾を頂部中央に打っている。表面に木質が僅かに付着している。厚さは0.2cmである。

第95図-5は辻金具の一部である。鉢部はほとんど残っていないが、下半部側面で稜をなしている。脚部は1箇所のみ残存しており、長さ1.9cm、幅2.2cmで、脚部先端は丸みをもつ。中央に直

径0.8cm、高さ0.3cmの扁平な半球状をした形状の鉢を打っている。金銅装の範囲は脚部の端面にまで及んでおり、金銅板を折り返して留めていることがわかる。脚部裏面には革と考えられる有機質の付着が認められる。厚さは0.2cmである。

第96図-7は辻金具・雲珠の脚部である。鉢部への立ち上がり部は残っておらず残存長1.9cm、幅2.2cmで、脚部先端は第95図-2のように角をなす。中央やや先端よりのところに直径0.9cm、高さ0.4cmの半球状をした形状の鉢を打っている。厚さは0.2cmである。

第96図-1は辻金具・雲珠の脚部である。長さ2.2cm、幅2.1cmで、脚部先端は丸みをもつ。中央に直径0.8cm、高さ0.3cmの扁平な半球状をした形状の鉢を打っている。脚部裏面には革と考えられる有機質の付着が認められる。厚さは0.25cmである。

第96図-2は辻金具・雲珠の脚部である。長さ2.35cm、幅2.2cmで、脚部先端は丸みをもつ。中央に鉢の痕跡が認められる。鉄地金銅装の範囲は脚部の端面にまで及んでおり、金銅板を折り返して留めていることがわかる。脚部裏面には革と考えられる有機質の付着が全面に認められる。厚さは0.2cmである。

第96図-4は辻金具・雲珠の脚部である。長さ1.9cm、幅2.1cmで、脚部先端は丸みをもつ。中央に直径0.7cm、高さ0.25cmの扁平な半球状をした形状の鉢を打っている。鉄地金銅装の範囲は脚部の端面にまで及んでおり、金銅板を折り返して留めていることがわかる。脚部裏面には革と考えられる有機質の付着が認められる。厚さは0.2cmである。

第96図-5は辻金具・雲珠の脚部である。長さ2.3cm、幅2.3cmで、脚部先端は丸みをもつ。中央に直径0.8cm、高さ0.3cmの扁平な半球状をした形状の鉢を打っている。金銅装の遺存は良好である。厚さは0.2cmである。

第96図-6は辻金具・雲珠の脚部である。長さ1.8cm、幅2.2cmで、脚部先端は丸みをもつ。立ち上がり部は僅かにくぼんでいるが、資金具等は出土していない。中央に鉢の痕跡が認められる。厚さは0.2cmである。

第96図-3は辻金具・雲珠の脚部である。長さ2.2cm、幅2.3cmで、脚部先端は丸みをもつ。中央に鉢の痕跡が認められる。脚部裏面には革と考えられる有機質の付着が認められる。厚さは0.25cmである。

##### (5) 革金具

革金具は2点出土しているが、出土している雲珠・辻金具から、本来はもっとあったものと推測される。2点とも長方形の鉄地板に金銅板を折り返した、いわゆる鉄地金銅装である。長軸方向に伸びると考えられる有機質の紐を2つの円頭鉢で留めている。遺存状態が悪く、鉢にも金銅板が張られていたかは不明である。

第96図-9は革金具である。長さ3.45cm、幅2.2cm、厚さ0.2cmで、短辺の一方はなだらかなカーブを描く長方形である。長軸の中心線に沿って、直径0.7cm、高さ0.3cmの扁平な半球状をした形状の鉢を2個打っている。鉄地金銅装の範囲は端面にまで及んでおり、金銅板を折り返して留めていることがわかる。裏面には革と考えられる有機質の付着が全面に認められる。また、表面でも一部に革の付着が認められる。

第96図-8は革金具である。残存長2.55cm、幅2.1cm、厚さ0.2cmで、第96図-9と同様に長方形と考えられる。長軸の中心線に沿って、直径0.7cm、高さ0.3cmの扁平な半球状をした形状の鉢

を2個打っている。裏面には革と考えられる有機質の付着が全面に認められる。(諫早直人)

## 農工具

刀子2点、鎌1点、不明鉄製品1点が出土している。

### (1) 刀子

2点出土している。

第97図-3は切先を欠くが、その他の部分の遺存状態は良好である。全体残存長7.6cm、身部残存長3.9cm、身部幅1.05cm、身部厚0.3cm、茎部長3.7cm、茎部幅0.8cmである。茎部には、柄の木質が良好に遺存しており、X線ラジオグラフィーの観察によると径0.3cmの目釘穴が一つ確認出来る。また、関の形状は両閻で、直角に近い明瞭な段を伴う。身部には有機質らしき付着物が幅広く明瞭に遺存しており、これは革である可能性があるが、そうであるとすれば革の鞘が着装された状態で副葬されていたと考えられる。

第97図-4は身部先端部と、茎のほとんどを欠損している。全体残存長5.8cm、身部残存長5.3cm、闊幅1.3cm、闊部の厚さ0.5cmである。身部には、有機質等の付着物はなく、闊部直下の茎部にわずかに柄と思われる木質がみられるのみである。闊部の形状は片閻だが、明瞭な段は形成せず、茎部の方向に向かってゆるやかに幅狭になる形である。

### (2) 鉄鎌(第97図-5)

折り返しの基部のみ残存したものが出土している。残存長2.7cm、幅1.8cm、厚さ0.5cmである。身の先端の方向は、折り返されている面を上にして置いた時に右側にくる。斜めに折り返されており、着柄した場合刃部が柄に対しやや鈍角に付く構造になる。古瀬分類(古瀬1991)における小型鎌II類に分類されるものである。ただし、木質など有機質の痕跡は現状では認められず、副葬時に着柄されていたかどうかは不明である。

## 不明鉄製品

2点出土している。

第97図-16は、平面形が細長い長方形で、径0.3cm程の孔が一つ確認出来る。両端が欠損しており、全長の推定はできない。刀子かそれに類した鉄製品の茎部である可能性が考えられる。断面の形状は長方形で、刃部などは認められない。残存長3.5cm、厚さ0.2cm、幅は常に一定で1.1cmである。側面から観察すると片側が反り返っているが、これは元々の形状なのかそれとも土中で変形したものなのかなは現状では判別出来ない。

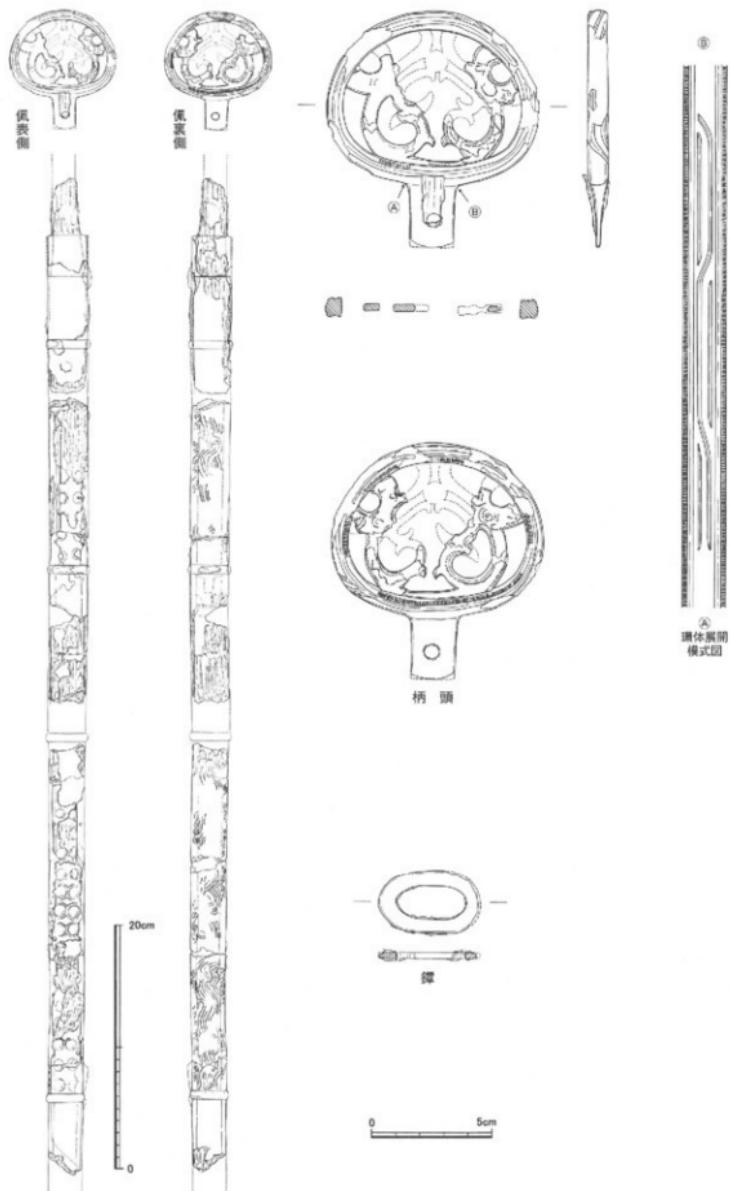
第97図-17は湾曲した鉄板で、一方の側面に玉縁状の端部を持つ。用途は不明であるが、鉄製の鍔であった可能性がある。(柏原龍嗣)

## 装身具

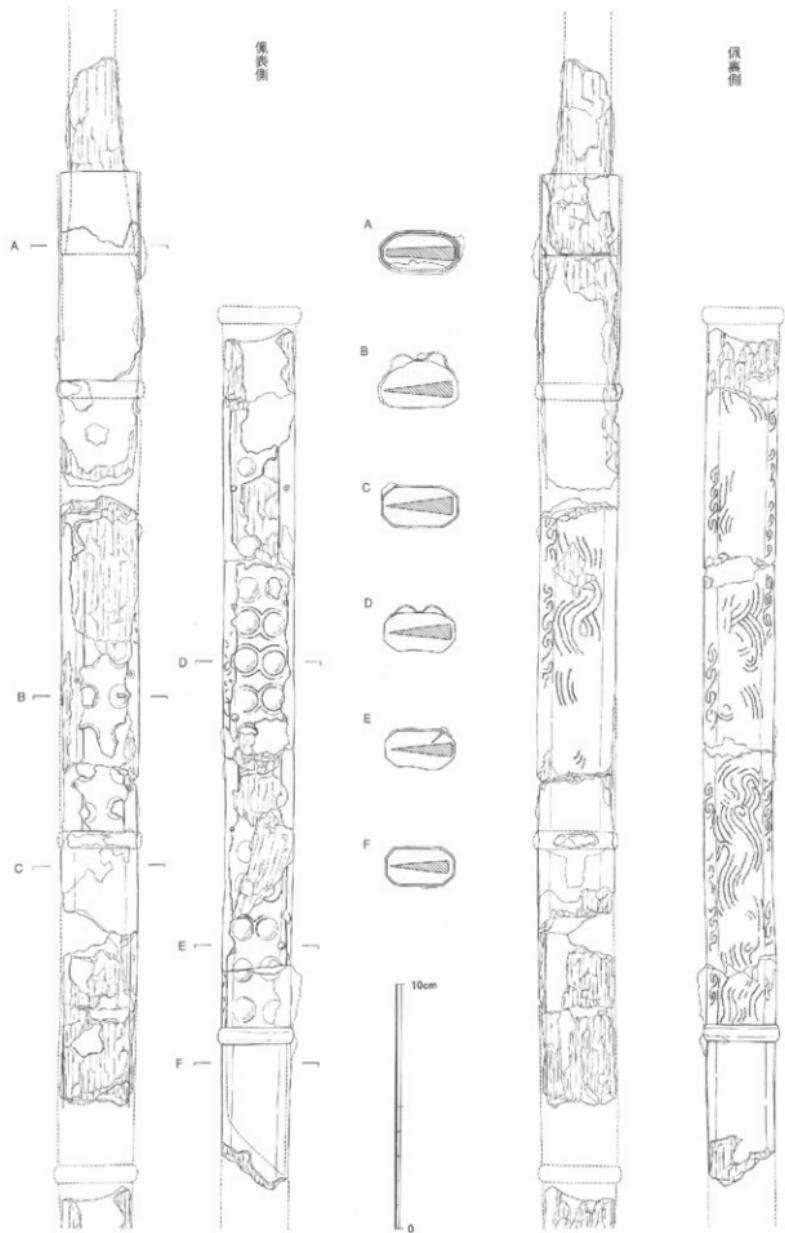
耳環が2点みられる。

### (1) 耳環

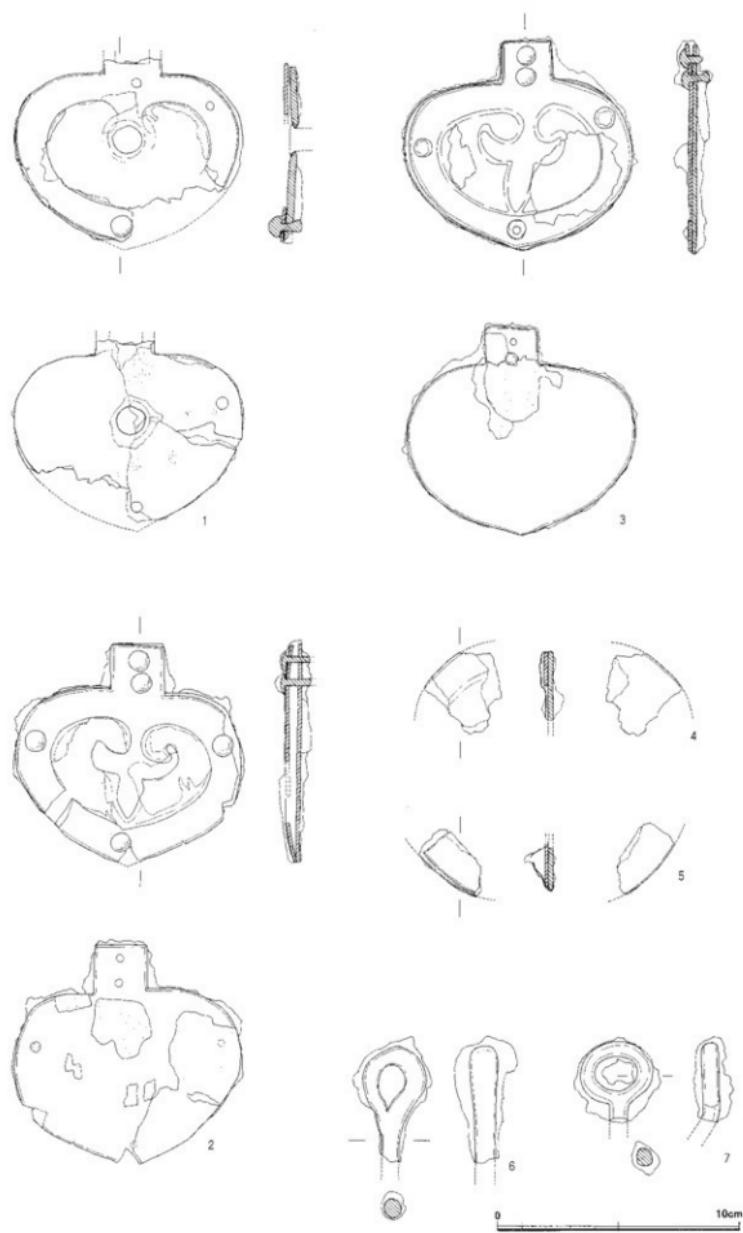
2点の形状・大きさ・構造は非常に類似しているため、本来1対をなしていたものと考えられる。平面形は、切れ込みを上にして置いた時に縱幅よりも横幅が若干広い楕円形を呈しており、第97図-1、第97図-2ともに長径3.0cm、短径2.7cm、断面形は、ほぼ正円形で直径0.8cmとなる。ケイ光X線分析によると表面に銀・金および水銀の存在が確認できることから、渡辺智恵美の分類(渡辺1997)による銅芯銀板貼鍍金であることがわかる。銀板の巻き方については、環表面の破損が激し



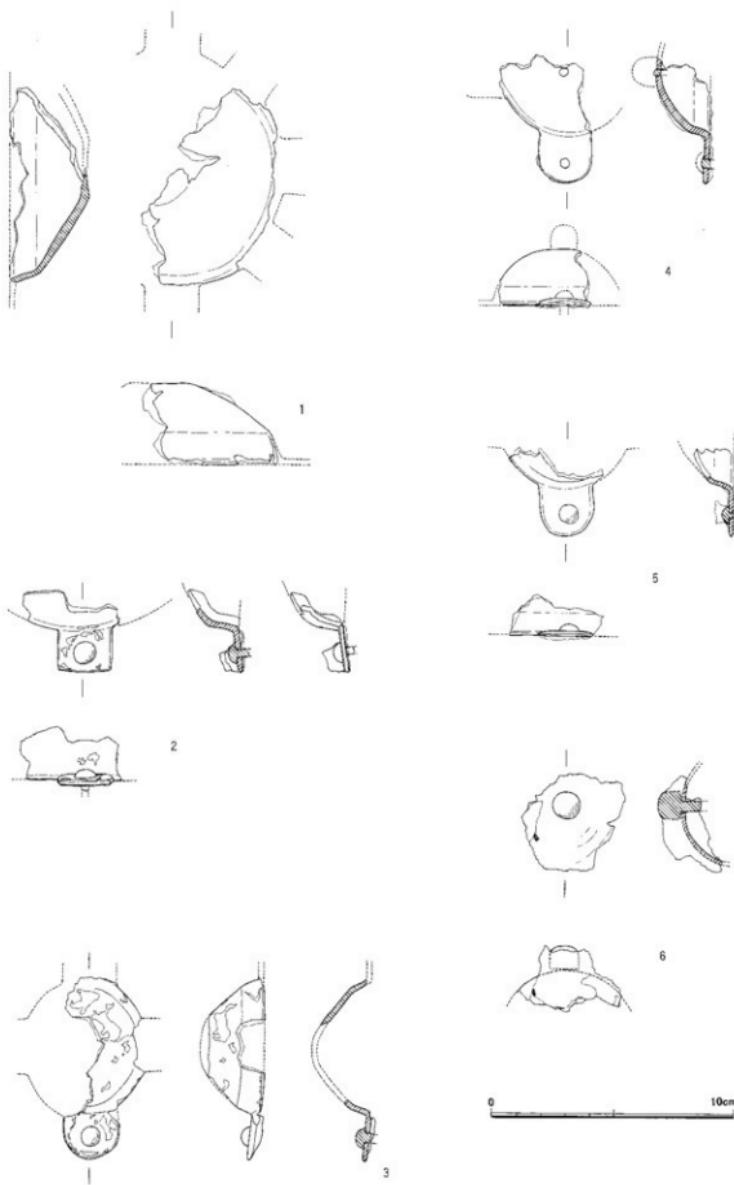
第92図 原田遺跡1区原田古墳金属製品実測図①(双龍環頭大刀)(1/4、1/2)



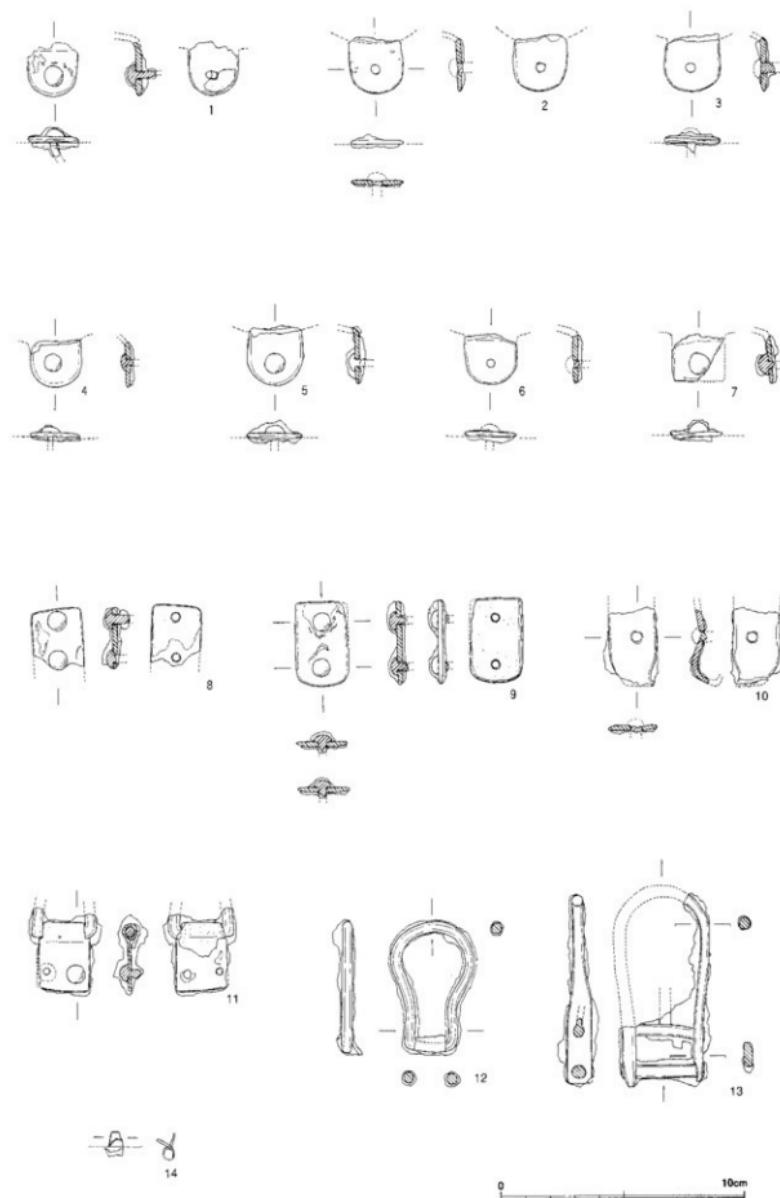
第93図 原田遺跡1区原田古墳金属製品実測図②（双龍環頭大刀、部分）（1／2）



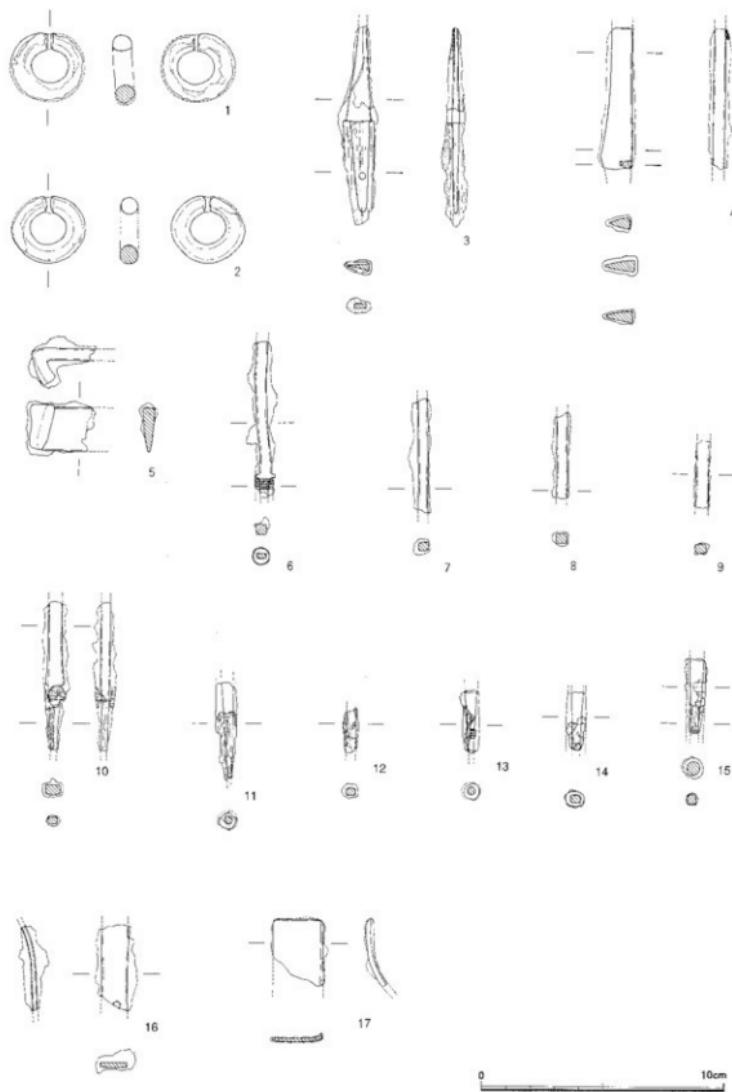
第94図 原田遺跡1区原田古墳金属製品実測図③（馬具、轡・杏葉）（1／2）



第95図 原田遺跡1区原田古墳金属製品実測図④（馬具、雲珠・辻金具）（1／2）



第96図 原田遺跡1区原田古墳金属製品実測図⑤（馬具、辻金具・鉸具・その他）（1／2）



第97図 原田遺跡1区原田古墳金属製品実測図⑥(耳環・刀子・鉄鎌・鉄鋤・その他) (1 / 2)

く接合面の観察はできなかった。接面では、端部に継ぎ目らしきものが観察できず、小口と環体部がつながっている様子がみられる。また、X線ラジオグラフィーの観察によると小口面に心材とは別の材が被さっていることもわかる。したがって本例は側面の端部を接面に被せるようにたたみこんで仕上げていると考えられる。(藤井)

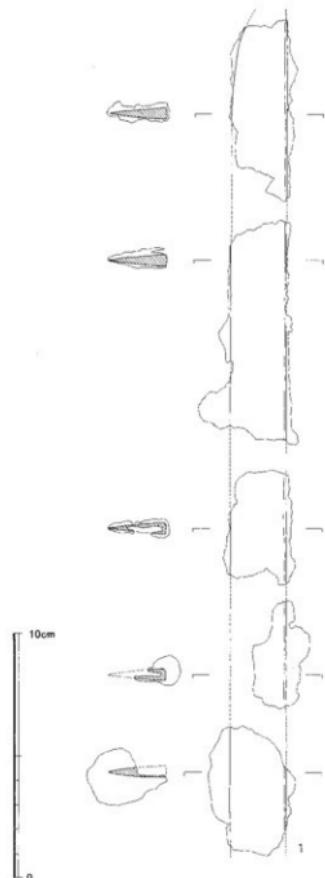
#### 参考文献

- 小野山節 1990『古墳時代の馬具』鈴木友也ほか編『日本馬具大鑑 第一巻 古代上』日本中央競馬会・吉川弘文館  
久美浜町教育委員会 1983『湯舟坂2号古墳』  
広陵町教育委員会 1987『史跡牧野古墳』  
鳥根県埋蔵文化財調査センター 2001『かわらけ谷横穴墓群の研究』  
千葉県教育委員会 1951『上総金鈴塚古墳』  
新納泉 1987『戊辰年銘大刀と装飾付大刀の編年』『考古学研究』第34巻3号  
古瀬清秀 1991『農工具』『古墳時代の研究』8 古墳Ⅱ副葬品 雄山閣  
北房町教育委員会 1998『大谷1号墳』(北房町埋蔵文化財調査報告第7号)  
桃崎祐輔 2002『筑内37号横穴墓の出土馬具から復元される馬具について』『福島県文化財センター白河館研究紀要2001』福島県教育委員会  
若宮町教育委員会 1982『竹原古墳』  
渡辺智忠美 1997『耳環小考—製作技法、材質からみた分類—』『創立三十周年記念誌』元興寺文化財研究所

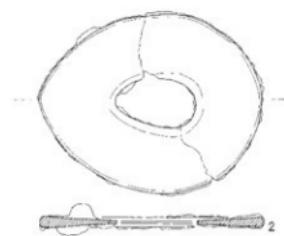
#### 玉類 (第99図、図版41)

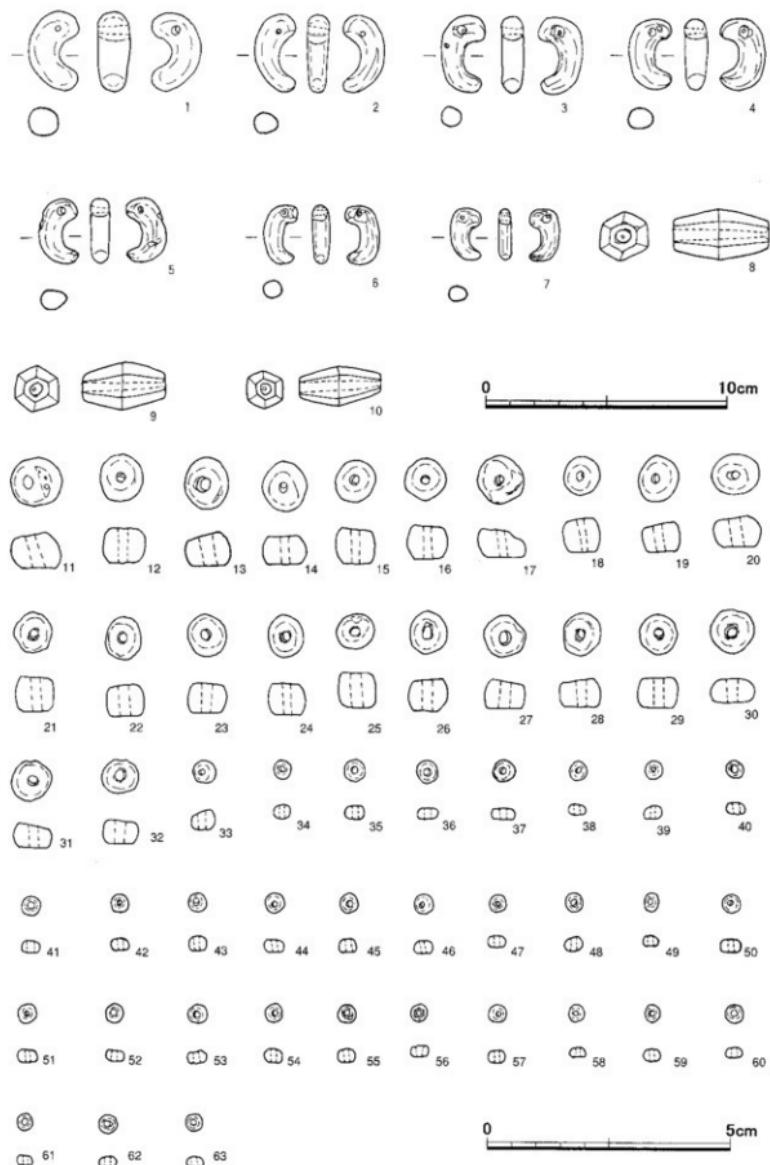
玉類には、勾玉7個、切子玉3個、ガラス丸玉11個、ガラス小玉32個の総数52個がある。なお、元々はこれ以上存在したと推定される。

**勾玉** 翡翠と瑪瑙との2種類がある。第99図1、2は翡翠製で、3~7は瑪瑙製である。形は皆同じで、総て片面穿孔である。1は大形の勾玉で、丁寧に加工されている。色調も翡翠独特の明緑色部分も



第98図 原田遺跡1区原田古墳金属製品実測図⑦(鉄刀・鐔)(1/2)





第99図 原田遺跡1区原田古墳出土玉類（勾玉1～7、切子玉8～10、ガラス玉11～63）  
実測図（1～10は1/2、11～63は1/1）

ある。岡山県古代吉備文化財センター米田克彦氏の教示によれば、鳥取県内における古墳・横穴墓出土の翡翠製の勾玉は6ヶ所で出土しており、糸魚川産であるという。2は細身で、色合いも悪い。3～7は赤瑪瑙製、大小さまざまである。

**切子玉** 水晶製。形は同じで、片面穿孔である。8は最大で、10の倍近い重さがある。

**ガラス丸玉** 11個が発見され、表面はやや不透明な藍色である。大きさはまちまちで、径11mm以下で、重さは1.0 gから0.35 gまでである。

**ガラス小玉** 32個が発見され、表面は丸玉と同じくやや不透明な藍色である。径は5.0mm以下で、大きさは皆小さいが、その中でも重さはいろいろである。重さは13 gから0.04 gまで大小がある。また、0.06 gから0.04 gまでの極小の玉が大部分を占める。

**須恵器（第100～103図、図版49～58）**

蓋坏、高坏、趨、有蓋壺、壺、広口堆、提平、甕がある。

**蓋坏（第100図1～7、図版49）** 蓋坏の蓋は7個団化を行った。総て、口径は大きく、天井部は、ヘラ削りが施されている。1～5までは天井部と体部の境に沈線が入り、稜をつくる。6、7は胎土中に砂粒が多い。7は、稜があまく、6は稜をもたない。1～5は出雲IV期に属するが、6、7はV期に入るかもしれない。

**身（第100図8～17、図版49・50）** 蓋坏の身は10個団化を行った。天井部はヘラ削りが施され、8以外は口径が大きい。蓋受けも14以外はやや起きている。天井部はヘラ削りが施されている。14は胎土中に砂粒が多く、蓋受けも頗り、かつ、短い。8～13、15、16は出雲IV期に属するが、14はV期に入るかもしれない。また、7、14は造りが雑であり、胎土・色調も似ている。同じ窯の可能性が高い。

**高坏（第101図、図版51～54）** 団化したのが14個ある。有蓋高坏が3個で、他は無蓋高坏である。脚部が坏部より変化が大きいので、脚の変化で分類し、記述する。

**低脚無蓋高坏I（第101図4～7）** 坏部は深く、大きく開く。透かしのない短い脚が付き、脚の端部は少し反る。坏部の脚部との境はヘラケズリがなされている。胎土中には砂粒が多い。

**長脚無蓋高坏I（第101図8～10）** 坏部は浅く、口縁部は上向きになる。坏部と脚部はほぼ同じ長さであり、透しはもたない。

**長脚有蓋高坏（第101図11～13）**

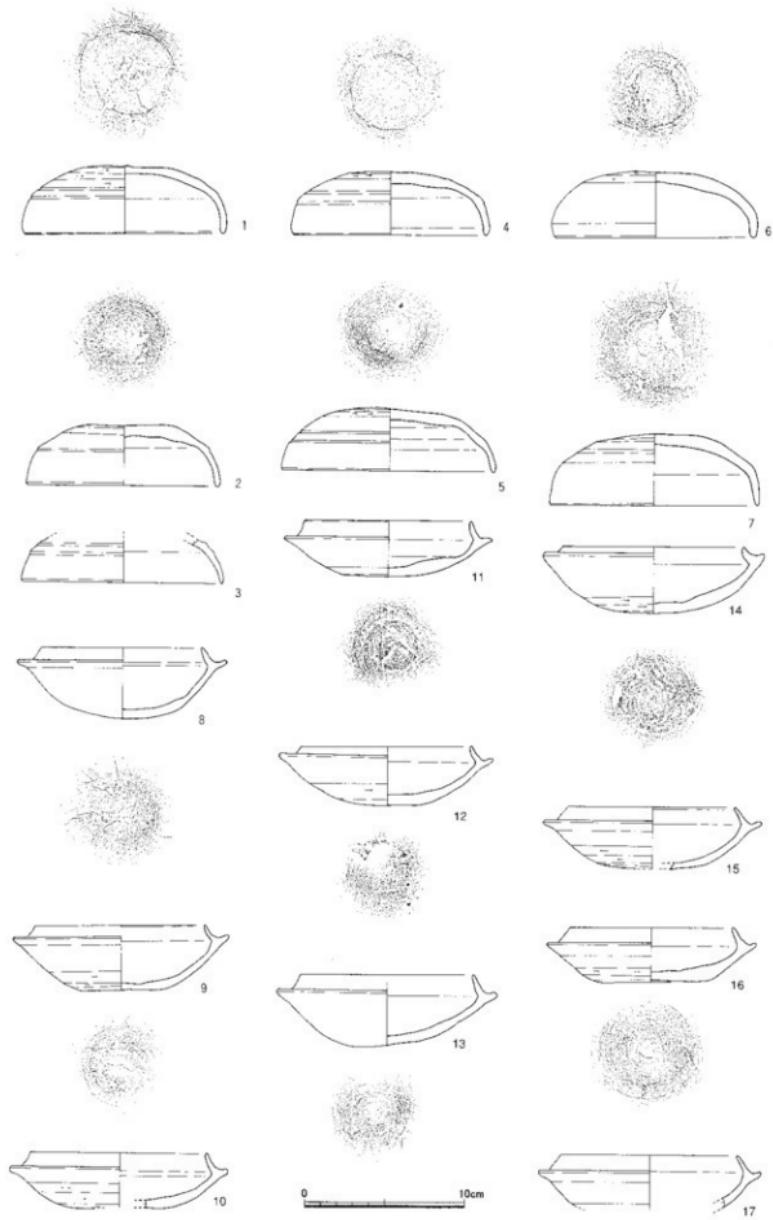
坏部は蓋坏の身と同じ形態であり、蓋受けもやや起きている。透かしは、11が1段、12が2段となっている。13は脚の中程に2条の平行沈線が引かれ、上方に方形の透かしが付く。なお、この高坏に伴う蓋については出土の須恵器の中では確認できなかった。

**長脚無蓋高坏II（第101図14）**

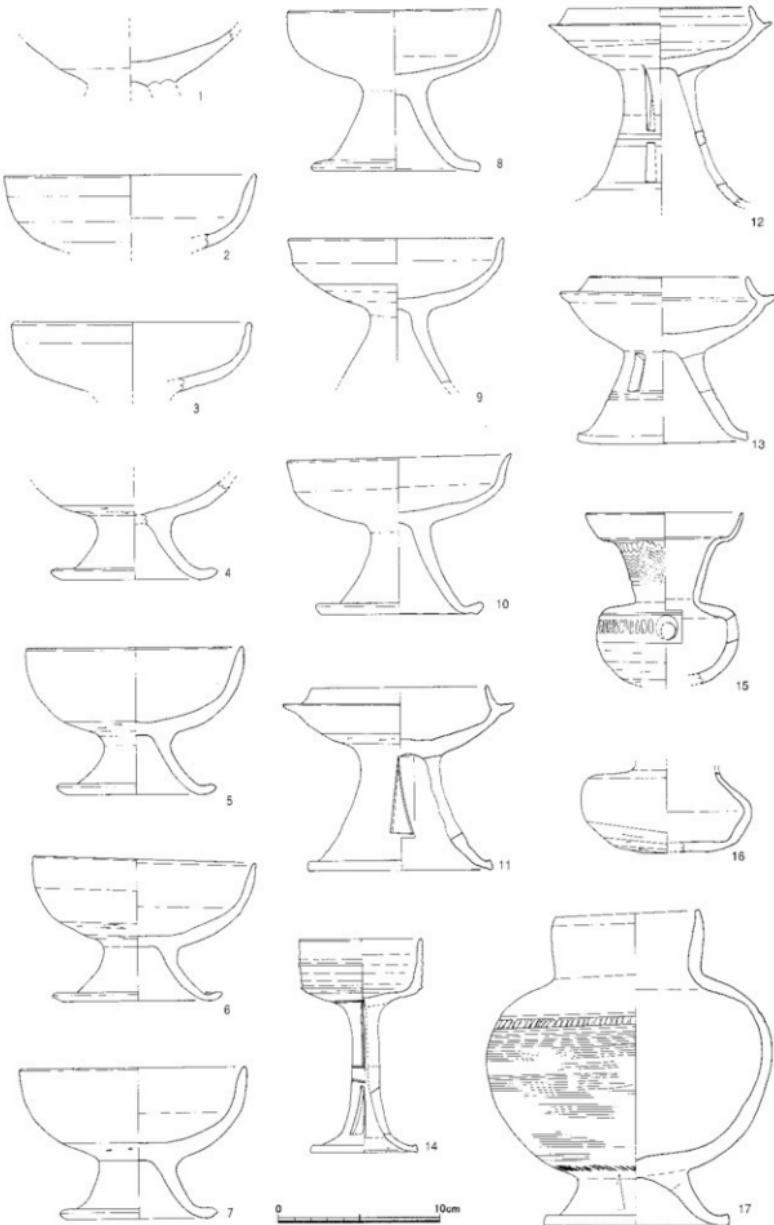
坏部の体部は真直ぐに立ち上がり、2段に突帯が付く。脚は細く、長い。脚の中程に2条の平行沈線が引かれ、上方に線状の、下方には方形の透かしがある。仁多郡では、出土は少ないタイプである。

**趨（第101図、図版54）**

第101図15は趨で、口縁部と頸部はラッパ形に開き、頸部に波状文が入る。体部には1条の沈線と刺突文が入る。出雲4期にあたる。



第100図 原田遺跡1区原田古墳出土須恵器実測図（1／3）



第101図 原田遺跡1区原田古墳出土須恵器（高環・壺・壺）実測図

**有蓋壺（第101図、図版54）**

第101図16は短頸の有蓋壺であるが、口縁部は欠く。小型品で、底部はヘラケズリを施す。

**脚付き壺（第101図、図版54）**

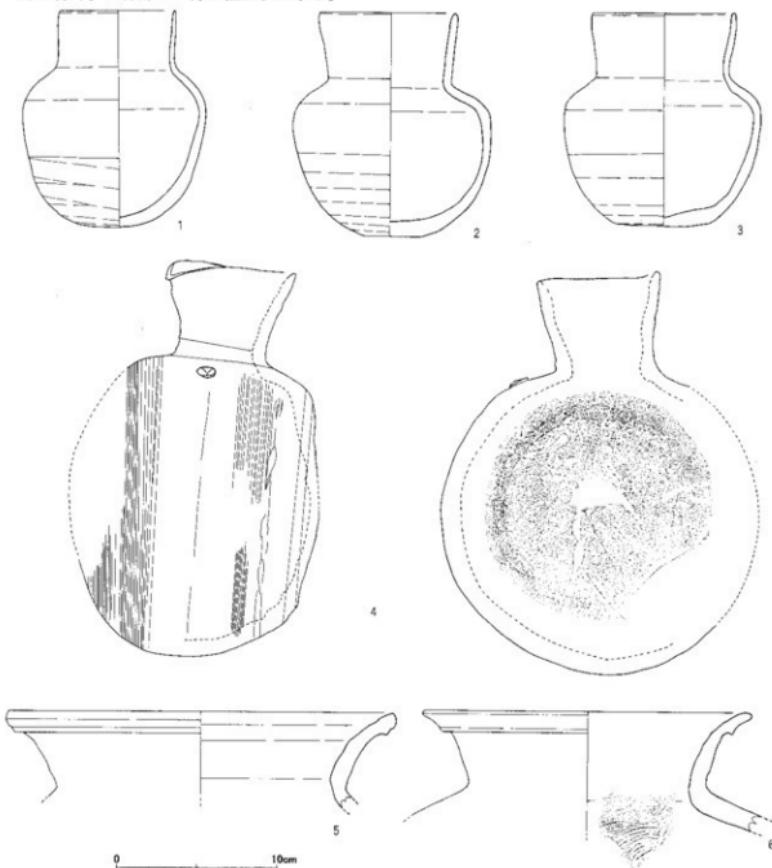
第101図17は脚付き壺である。球形の胴部に、まっすぐに立ち上がる短い口縁部が付く。胴部の上部には2条の沈線があり、脚との接合部には櫛による刺突文が施されている。

**壺（第102図、図版55）**

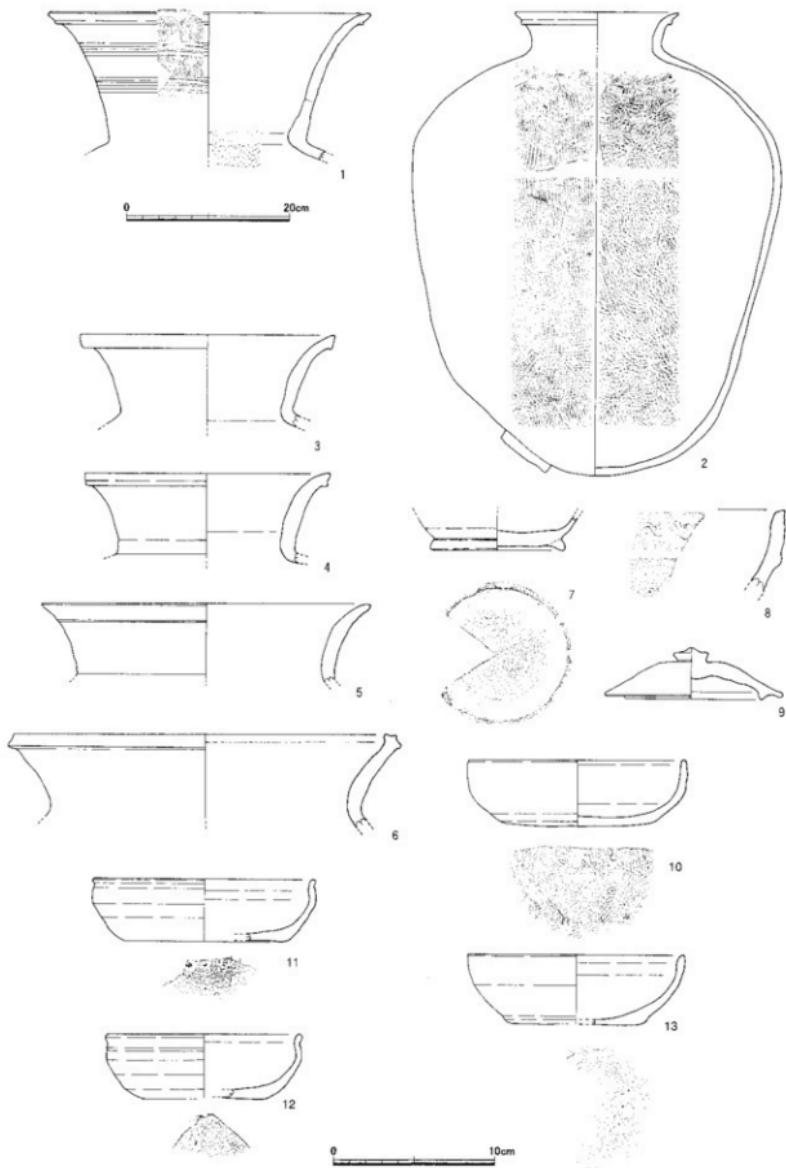
第102図1～3は壺で、短い頸部に撫で肩の体部が付く。底部は削られている。

**提瓶（第102図、図版56）**

第102図4は提瓶で、肩の把手が瘤状になっている。片面は水平で、直立する単純な筒状の口縁部が付く。口縁部の一部が注口状になる。



第102図 原田遺跡1区原田古墳出土須恵器（壺・提瓶・甕）実測図（1／3）



第103図 原田遺跡1区原田古墳・古墳付近出土須恵器実測図  
(1、2は1/6、3~13は1/3)

### 甕(第102、103図、図版56・57)

第102図5、6は口縁部が短く、外反する。口径は24.3cmと20.6cmで、小型品である。103図1は口縁部のみであるが、口径39.7cmの大形品である。頸部には2段に3条の凹線を入れ、さらにその間に櫛による波状文を施す。2は全形が知れる甕で、置かれた場所(漢道の入り口)も分かる土器である。口縁部が短く、外反する。体部の内外面に叩き残る。

### 1区原田古墳付近出土須恵器(第103図、図版58)

第102図3～13は古墳付近出土の須恵器である。3～6は壺の口縁部で、口縁部は短く、外反する。外面には文様をもたない。端部のつくりはそれぞれで変化している。3、4の口径は15cm程度小さいが、6は大きく、口径は22.8cmである。7は壺の底部で、低い高台をもつ。8は壺の口縁部で、真っ直ぐに立ち上がり、外面には2段に波状文を入れる。9はボタン状のつまみをもつ蓋で、小型品である。かえりは短い。古墳時代の末頃の須恵器であるが、原田遺跡1区ではほとんど出土例がない。10～13は奈良時代の壺であり、糸切り底となっている。11、12の口縁部は僅かに屈曲する。

## 第5節 奈良時代の遺構・遺物

奈良時代の遺構としては、調査区西側の段丘上にある掘立柱建物2棟と斐伊川の河道が検出されている。建物跡はJ-5区とI-6区にあり、河道は調査区の南側に位置する。この時代の遺物はほとんどが河床跡2部分から出土している。掘立柱建物が存在する部分は既に記したように、1997年に削平され、遺物包含層は存在しない。

斐伊川の河道と遺構がのる段丘上と川底との比高差は1.5mである。河道に堆積している土層は大部分が泥質の土砂であり、河川でよく見られる砂疊層はない。古代末から中世にかけては、奈良時代の河床部分は斐伊川の流心部にはなっていなかったことを示している。J-5・J-6のラインの堆積状態は第105図のとおりである。奈良時代の遺物や炭化物等を含む層は13層以下であり、河床が段丘の土砂を中心に埋まり、時折、洪水に合った時には16層のように川砂が薄く堆積する。なお、奈良時代にもこの遺跡の斐伊川は石の多い川であった。

### 掘立柱建物跡(SB01)

西側調査区のJ-5区に所在する2間×3間の掘立柱建物跡である。桁行は5.0m、梁間は7.6mの38m<sup>2</sup>の大きさである。建物の北西部分には鍛冶用の炉跡が残る(写真7)。炉跡は径30cm、深さ13cmの穴で、周囲の床面は被熱により赤化している。但し、東側は赤化していない。これは東側に爐が置かれ、西側の



写真7 鍛冶炉跡(SB01の内部に所在する)

炉に風が送られたためと考えられる。被熱具合を見ると、反対方向の西側がより赤く変色している。この建物跡の床面は水田造成時に削られ、遺物等は発見されなかった。なお、南側の斐伊川河床跡2から鍛冶に関わる櫛の羽口や鉄滓が出土している。また、この鍛冶に伴う鉄滓は、既に記したように成分分析の関係上、平成16年度に別途報告する。



第104図 原田遺跡1区西側建物遺跡・斐伊川河床跡2・3測量図（1／300）

柱穴は8個確認している。柱穴は40~60cmの大きさで、深さは24cmである。なお、北側の梁行列のうち2個は土坑とトレーナーにより失われたので詳細は分からぬ。柱の間隔は梁行で2.5m、桁行2.4mである。梁行の方向はS-17°-Eで、建物は南向きに建つ。また、斐伊川にも面している。

#### 掘立柱建物跡（SB02）

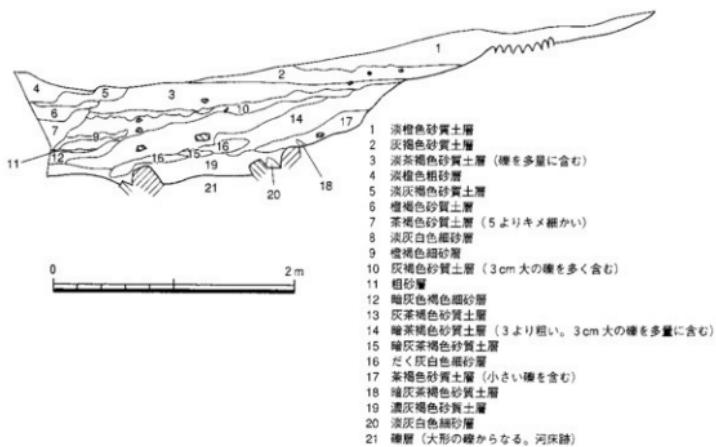
建物跡（SB01）の北東にある2間×2間の掘立柱建物跡である。桁行は3.6m、梁間は4.6mで、16.56m<sup>2</sup>の大きさである。なお、西側の梁間列では柱穴を確認することはできなかった。

柱穴は7個確認している。柱穴は30~50cmの大きさで、深さは26cmである。柱の間隔は梁行で2.3m、桁行では2.1mと1.5mである。梁行の方向はS-21°-Eで、建物は南向きに建ち、SB01とほぼ同じ方向で並ぶ。

#### 斐伊川の河道跡（第104・107図、図版2下段）

掘立柱建物跡（SB01・02）の南側にあたるH-5、I-4、I-5、J-4で、奈良時代の斐伊川河遺（河床跡2）が現れている。川の北側には、段丘崖ができ、大きくL字状に抉られている。岸辺部分には、小さい円礫が多く堆積しているが、中には人頭大以上の石も混じる。また、川底は水平になり、大きな川石が多く存在する。川岸と河床の標高は193mから190mで、掘立柱建物跡が乗る段丘面との比高差は3m程である。生活面と河床の差が少なく、今日的にみれば、水害等に合いやすい立地といえる。このことについては、第9章第1節「原田遺跡の立地」で触れている。

川底や堆積層からは縄文土器や奈良時代の須恵器や土師器の破片（第53図、図版6）が多く出土している。また、前記したように鍛冶に伴う羽口や鉄滓もこれらの土器とともに発見され、破片も大きく、表面の摩滅もない。河床跡2やその上に堆積している暗茶褐色砂質土層からの出土品は、段丘上の生活面から落ちたり、流れ込んだりしたものと推定される。出土した土器は、第107図のとおり、須恵器と土師器に限られ、須恵器の形態より古墳時代末から奈良時代末頃のものと考えら



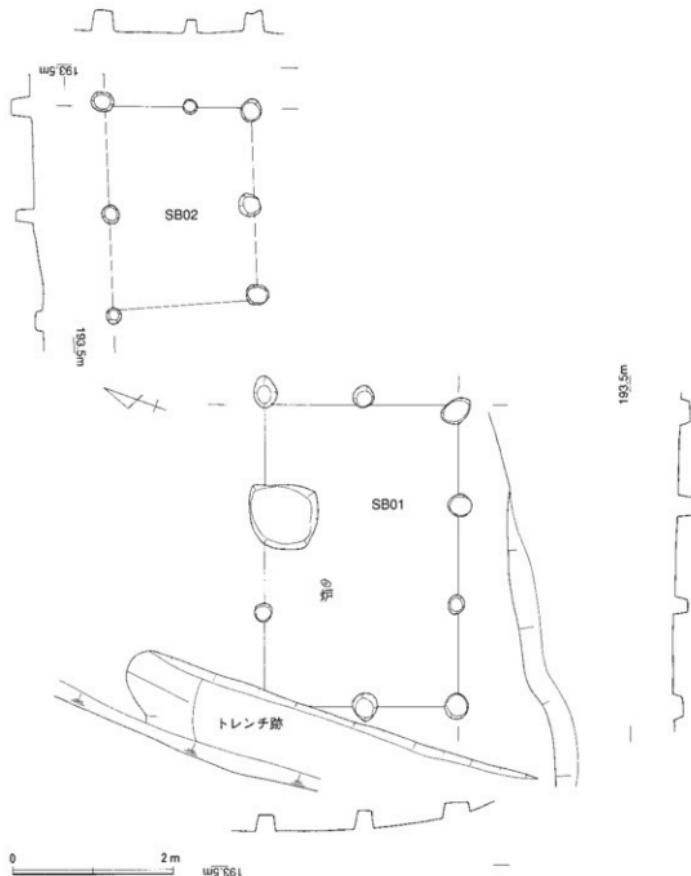
第105図 原田遺跡1区斐伊川河床跡2、J-5土層断面図（1／80）

れる。のことより、河床跡2は7世紀から8世紀の斐伊川の河道といえる。

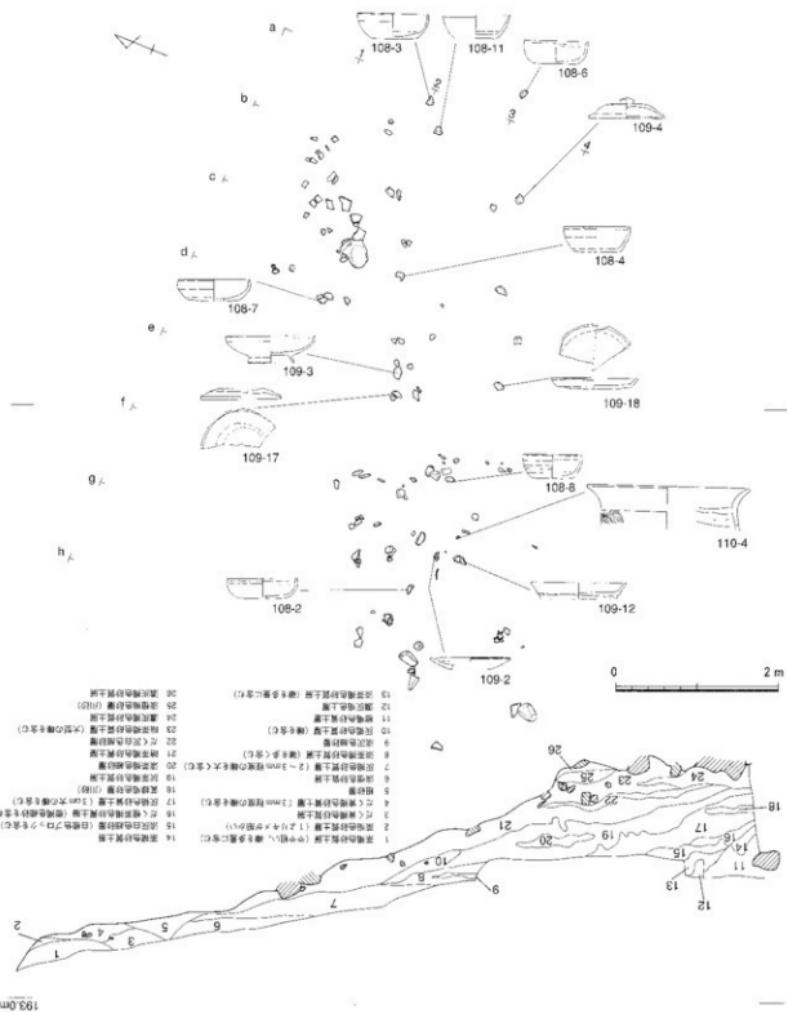
#### 1区西側河床2出土須恵器① (第108図、図版59・60)

調査区の西側に位置する斐伊川河床跡2から出土した須恵器には蓋、坏、壺、鉢などがある。

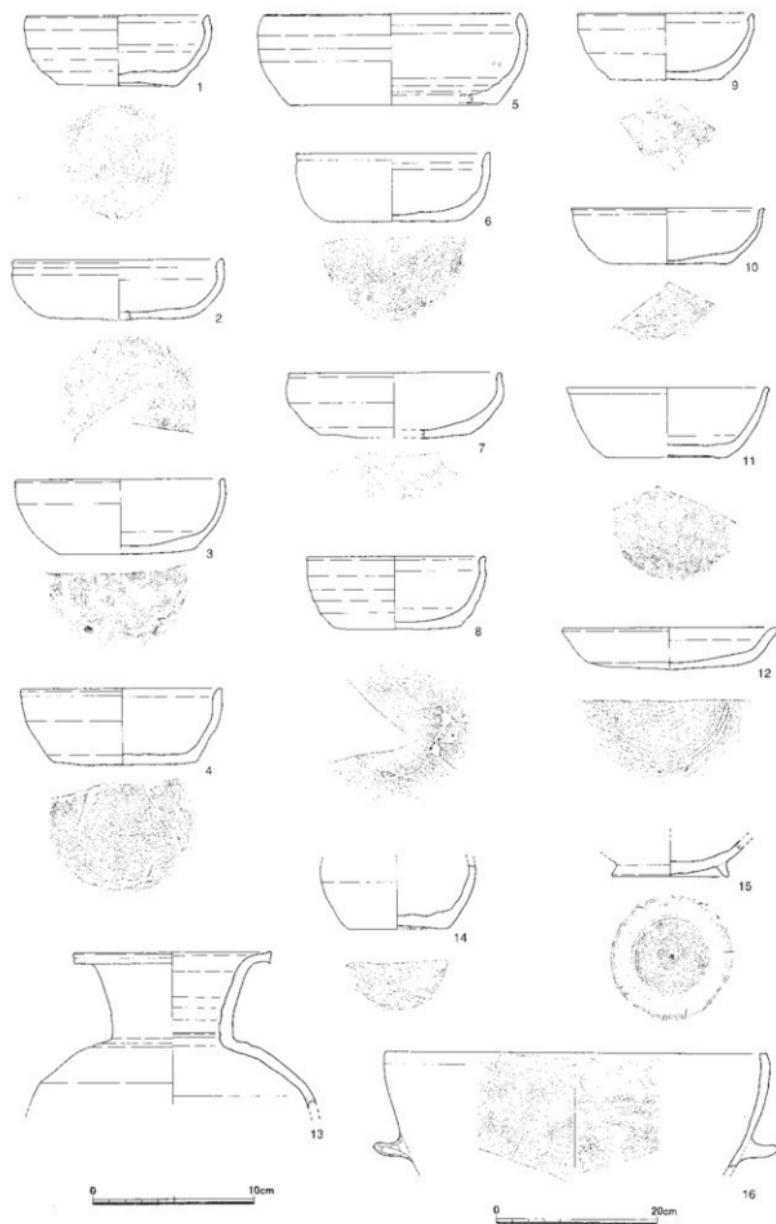
第108図1~9は蓋である。1~3は古墳時代後期の須恵器。1は蓋坏の蓋。天井部と口縁部の境に稜線が入る。出雲4期か。2は、つまみが付く蓋。出雲6期。3は高台が付く坏で、2~9は坏に伴う蓋。出雲7期か。4~9は蓋である。後述する坏の蓋で、つまみが付く。口縁部端部が折り返しが短いタイプで、天井部は糸切りである。4はボタン状のつまみが付く。奈良時代後半から平安時代の初めのものと推定される。10~12は、体部が短い坏。体部はやや外反する。底部は回



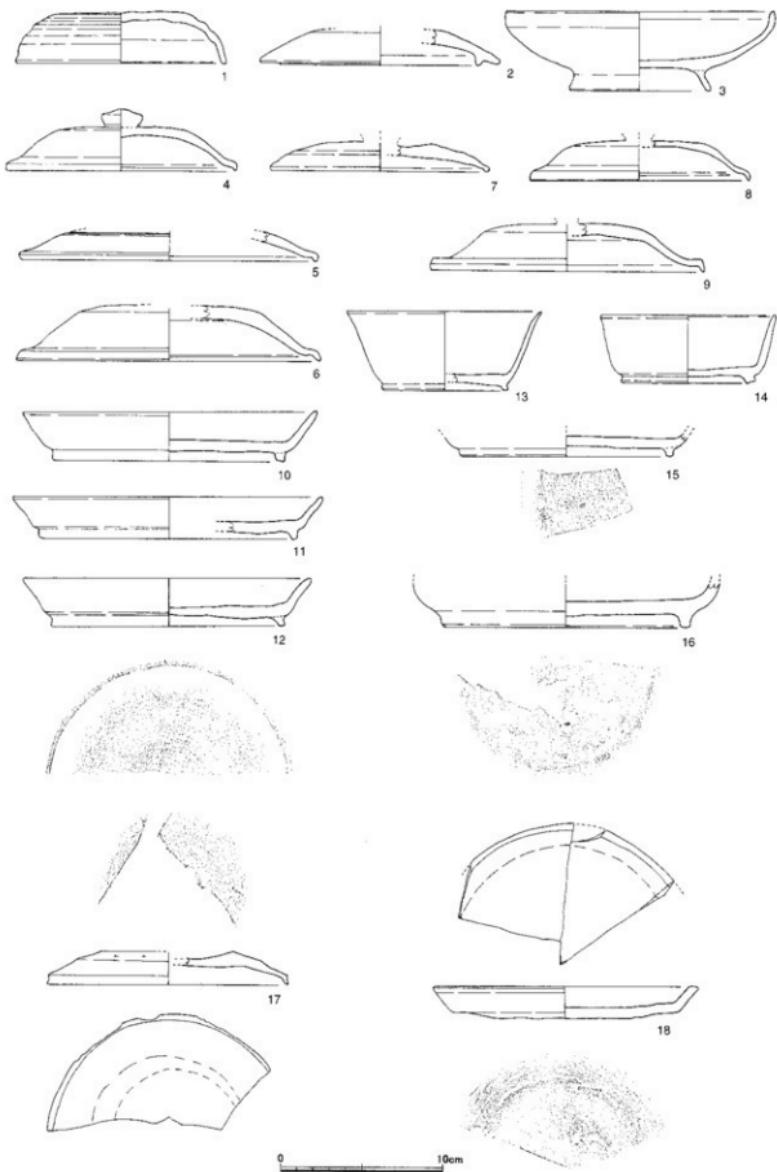
第106図 原田遺跡1区西側掘立柱建物跡 (SB01・SB02) 実測図 (1/60)



第107図 原田遺跡1区西側斐伊川河床跡2出土須恵器・土師器出土位置図 (1 / 60)

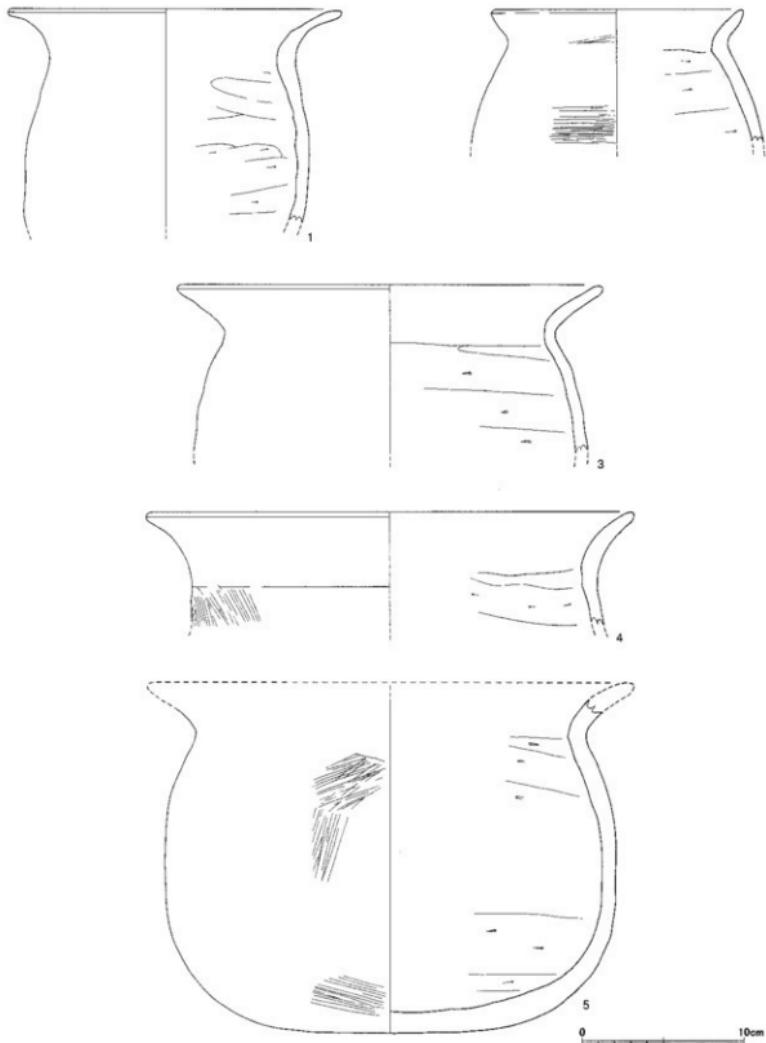


第108図 原田遺跡1区西側斐伊川河床跡2出土須恵器実測図（1／3、16は1／6）



第109図 原田遺跡1区西側斐伊川河床跡2出土須恵器実測図 (1 / 3)

転糸切りで、低い高台が底部の外側に付く。13、14は体部が長い壺。体部はやや外反する。底部は回転糸切りで、低い高台が底部の外側に付く。時期は蓋と同じで、奈良時代後半から平安時代の初めのものである。17は蓋で、内面は擦られ、スペベしている。墨は認められないが、転用窯の可能性があるのでここに掲載した。18は体部が短い壺で、内面に墨が付着する。内面はかなり擦られている。この形態の壺は、出雲部では稀である。時期は前記の壺や蓋と同じと考えられる。



第110図 原田遺跡1区西側出土土師器（甕）実測図（1／3）

### 1区西側河床跡2出土須恵器②(第109図、図版61)

調査区の西側に位置する斐伊川河床跡2から出土した須恵器の壺、壺、鉢である。

第109図1~10は壺である。体部が内湾し、口縁部先端は少し屈曲するものが多い。底部は回転糸切りである。時期は第108図の蓋・壺と同じで、奈良時代後半から平安時代の初めのものと推定される。11は体部が外開きになる。底部は回転糸切り。12は、体部が短い壺で、体部はやや外反する。底部は回転糸切り。二分の一の破片であるが、外面の大半に鉄分が付着している。これは鍛冶に伴って付いたものと考えられ、SB01に伴う確実な須恵器といえる。14は小型の壺で、糸切り底をもつ。15は低い高台をもつ壺の底部である。13は短い頸部をもつ壺である。肩は撫で肩で、奈良時代末から平安時代初めのもの。16は把手をもつ鉢。外側面に叩きがあり、内面には丸に十字が入る當て具痕が認められる。

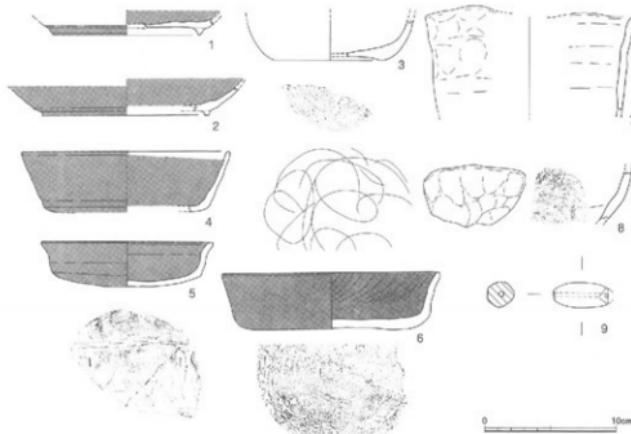
### 1区西側河床跡2出土土師器(第110図、図版40)

河床跡2から出土した土師器の甕である。総て、口縁部が外に開き、肩は張らないタイプである。口径は15~30cmまであり、大小の甕が存在する。5は器形が知れるもので、器高は21.6cmの大形品である。胴は張らず、底部は平底気味となる。

### 1区西側河床跡2出土土師器・製塩土器・土錐(第111図、図版62)

第111図は河床跡2から出土した土師器の壺、製塩土器・土錐である。

1~6は壺で、総て赤色塗彩である。1、2には、底部外縁に低い高台が付く。3、6は底部が回転糸切りで、5は少しづつへらで削られている。3は体部が内湾し、4はやや外傾する。共に、須恵器の壺の器形に似る。6は、内面に細かな放射状と螺旋状の暗文が入る。7は砲弾形の製塩土器である。破片はかなりの量が発見されているが、図化できるものは少ない。8も製塩土器の破片である。内面の一部には、型造りを示す1mm幅の縦横方向の布目が認められる。9は土錐で、残存長4cm、最大幅1.9cmである。



第111図 原田遺跡1区西側河床跡出土土師器・製塩土器・土錐実測図(1/3)

## 第6節 中世の遺構・遺物

段丘において、平安時代以降の明確な遺構は検出されてはいない。斐伊川側の南の低い部分では、奈良時代の斐伊川河床の上に、茶褐色や褐色の砂質土層と薄い砂層が堆積している。その厚さは、江戸時代の砂層まで1m程になっている。この間には疊層は全くなく、洪水時にのみ冠水する場所と推定される。普段は斐伊川の河原で、草原となっていたであろう。

中世の土器や陶磁器は1区全域からおよそ114片が出土している（第112図）。細片が多く、北側の斜面から落ちたものと推定している。調査区より15~30m上の山林には平坦地が数段ある（注5）。その場所の字名は、明治21年の佐白村切図（仁多町役場保管）を見ると、調査区の上方の斜面にある道から上の山林には「横畠上」、「東垣内」、「竹ノ下」などの字名が存在する。「東垣内」、「竹ノ下」は中世の武士の屋敷や館によくある地名であり、裏山には「殿ヶ迫」や「上井平」という字名も知られている。なお、1区では東側が字「横畠」、西側が字「竹ノ下」である。また、前布施集落の北側の山には山城の水手城跡が所在する。この城跡は字「要害」と呼ばれる郭群と西側に隣接する字「土井平」と呼ばれる2段の平坦地から構成されている。（第1図参照）

土器と陶磁器以外に鉄滓が全域からかなりの量が出土している。1区全体で認められ、水田造成や耕作時にも見つかったであろうか、山の斜面や水路の脇に置かれていたものもあった。この鉄滓も北側の斜面から入ったものと推定している。なお、鉄滓の報告については、目下、分析中であり、本書からは外し、平成16年度に報告する予定である。

**遺構** 中世の遺構としては、原田古墳の東側では中世以降の加工段とそれに伴う掘立柱建物跡2棟（SB03・SB04）、および性格不明の方形の遺構（SX01）、西側では石垣状石積み（SX02）が検出されている。

### 方形の遺構（SX01）（第114図）

加工段の西側のD-7に、斜面を方形に掘り込んだ竪穴状の遺構が存在する。深さは北側で、上端と下端の比高差25cmある。平面プランは方形を呈し、東西3.5m×南北3m以上の規模である。標高は192.8m。出土品はなく、埋土から鉄滓が1個出土している。また、柱穴が平坦面に5個が存在する。大きさや配列に規則性がなく、柱穴になるかどうかは不明である。

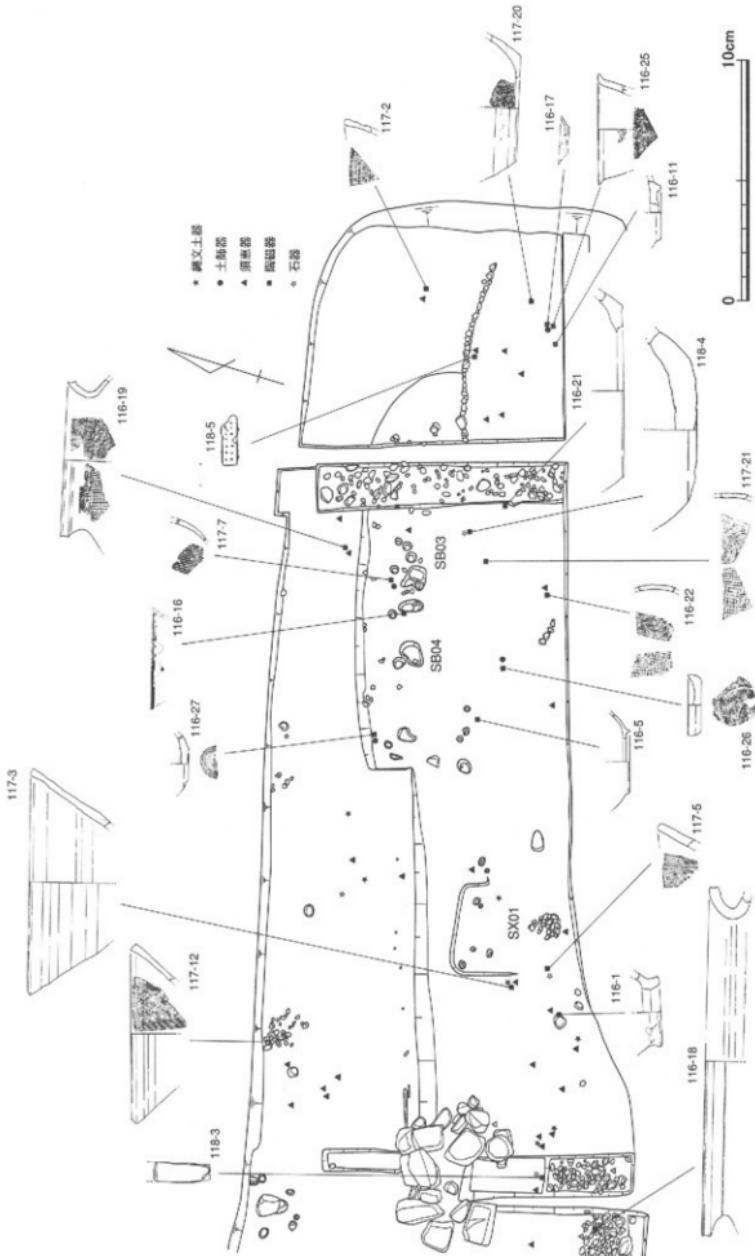
なお、この遺構の基盤層には三瓶山の降下火山灰が多く含まれる。

### 加工段と掘立柱建物跡（SB03・SB04）（第115図、図版16）

**加工段** 調査区の東端にあたるB-8区とC-8区に位置する。加工段は緩やかな斜面をL字状にカットしている。斜面に沿って、高さ60cm、長さ16m、幅3m以上を切り、その上砂を南側の斜面に盛り、大きい平坦面を造ったと考えられる。第113図はTR4の南北セクション図であり、縄文時代に堆積した淡黒褐色砂質土を削り、平坦面の地盤としている。平坦面の標高は193.5mであり、当時の斐伊川河床とは比高差は2~3m程しかなかったと推定される。

### 掘立柱建物跡（SB03）

平坦面の東側B-8区に位置する。桁行3間の掘立柱建物跡である。平坦面の北端に柱穴が4本並び、総桁行は5m70cmで、柱間は約1.9mになる。1間が6尺2寸5分と推定される。柱穴の大きさは25~30cm、深さは最も深いP180で25cmである。なお、南側の柱穴列を確認することはできなかった。出土品はほとんど発見されていない。



第112図 原田遺跡1区東側遺構位置図と遺物出土地点  
(番号は図版番号・挿図番号と一致する)